

---

# **魔法少女リリカルなのはA's ~全てを変えることが出来るなら~**

IKA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA's～全てを変えることが出来るなら～

### 【Zコード】

N9760X

### 【作者名】

IKA

### 【あらすじ】

機動六課は『J.S事件』によつて、大切な仲間を失う。その中で生き残つた独りの少年『朝我 零』。彼は事件解決後、全てを否定した

そして彼は過去へ飛び、全てを変える。

変えてはいけない過去を変える独りの少年が出会い、今まで知らなかつた過去と出会つ新たな仲間。その出会いを経て変化していく、

彼の想いとは・・・今　　変えてはいけない過去を変える、

少年の戦いが始まる。少年は変えられるだろうか？彼女達の

その運営を

## 企画が始めるプロローグ

新暦0075年

『古代遺物管理部 機動六課』は次元犯罪者『ジェイル・スカリエツティ』の手によって消滅の危機に瀕した。

俺、『朝我 零』はスターズ隊長『高町なのは』と副隊長『ヴィータ』の二人と共に『聖王のゆりか』と呼ばれる巨大飛行戦艦の内部に潜入。

内部に発見された『聖王』の正体はとある事件で見つけた少女『ヴィヴィオ』だった。

高町なのははヴィヴィオと戦闘を行うが、今まで共に過ぐしてきたヴィヴィオに本気で戦えず、撃墜される。

ヴィータはゆりか内部にある核の破壊に向かい、核の破壊に成功。だがヴィータはガジェット・ドローンによって撃墜される。

そこに救助に『ハ神はやて』が訪れるが、突如活動停止したゆりかごでの脱出に失敗して死亡した。

一方でライトニング部隊隊長『フェイト・T・ハラオウン』は別の場所に潜伏していた『ジェイル・スカリエッティ』の逮捕の為に現場に向かっていた。

ジェイル・スカリエッティの発見し、倒したが、逮捕には至らず、戦死する。

そしてFW達は皆、戦闘には勝利するものの、部隊長達の死に絶望する。

そして俺は、聖王のゆりかごでヴィヴィオと決着をつける。

俺は見事勝利し、ゆりかご内部に潜伏するナンバーズのクアットロと言ひ女性の撃墜に成功した。

そして、ヴィヴィオの救出も成功し、事件は集結を迎えた。

それから一ヶ月が過ぎる。

朝我「なのは・・・フェイト・・・ヴィータ・・・はやて・・・」

俺は独り、3人の墓に来ていた。

朝我「ごめん。俺は……最低だつたな」

俺の頭の中に思い浮かべるは……4人と過<sup>い</sup>した想に出。

だが・・・俺には後悔して<sup>い</sup>ることがあった。

朝我「もつと・・・4人の事・・・いや、皆の事を知つていれば良かった・・・」

俺は機動六課の中でも、孤立していたほうだった。

いや、俺から独りでいることを望んでいた・・・つていった方が正しい。

だがなのは達は俺に何度も声をかけてきた。

こんな・・・俺なんかに・・・

朝我「もつと皆の事を知つていれば・・・現在は変わっていたのに・・・」

生意気な事を言つてしまつた。  
俺は、なのは達に悪い事をした。

生意気な事を言つてしまつた。

悪口を言ってしまった。

全部・・・俺が悪いのに・・・

朝我「本当は・・・俺が死ぬべきだったんだ

！」

だから

俺は使つ。

朝我「俺は

！！！

過去と現在を否定する――――――――――――

そう言って俺は全身に溢れる魔力を世界に・・・そしてこの世の全てに向けて放った。

朝  
我

』

『始  
まりの世界』  
ダ・カーポ

そう言って、俺は全ての始まりに飛んだ。

## まあは独りで無いなる事（前書き）

過去改变を始める彼はまず飛んだ世界は始まりの世界。

高町なのはが魔法に出会った時間とその世界。

その世界から変えることや  
未来を変えられると言じて  
。

魔法少女リリカルなのは ～全てを変える事が出来るなら～ 始まります。

まずは独りで無くなる事。

朝我 Side

朝我「…………」  
海鳴市

俺は光から解放されると、懐かしい場所へ辿り着く。

場所は地球にある海鳴市の海鳴公園。

朝我「どこまでの時間に飛んだか忘れたな……多分、少し飛びすぎた可能性があるな……」

そう考えた俺は現在の時間を調べる為に公園を歩き出す。

朝我「変わらないな……海鳴公園」

俺はなのはと同じように地球出身だった。

だがなのはたちとほんくいたわけではない。

俺はいつも独りでいることを望んで……いつも屋上で寝ていたからな・・・

海鳴公園は俺が独りで寝るには丁度いい場所だった。

だから・・・馴染み深い場所で、少し安心した。

朝我「・・・あれ・・・」

公園の隅っこにある木の椅子に座る、独りの少女がいた。

栗色の髪・・・左手で飲み物を持つ姿・・・左利き・・・

朝我「なの・・・は

彼女はまさしく、高町なのはだった。

だが、小学3年生、つまり魔法に出合った頃の容姿にしては少々幼い。

きっと小学2年生だわ。

公園に桜が咲いている所を見ると、季節は春。

そして俺は巻き戻った時間は・・・『11年前

つまり俺は、この11年と言ひ過去を改変して・・・新しい未来を作り出すんだ。

・・・でも、何でなのはは独りなんだ?

アリサや・・・すずかがいたはずだが?

なんで・・・

朝我「ねえ、そこの君」

なのは「え・・・」

俺は勇気を振り絞つて、彼女に声をかけた。

朝我「違う。つか、ストーカーな。平仮名じゃない」

なのは「すとーかー？」

朝我「……君の事を、よく知っている人……かな？」

しかも俺の姿未だに19歳だし……

あ……つと、この世界じゃ俺の事知らないんだつたな。

なのは「貴方は……誰？」

いきなりストーカー扱いかよ・・・

なのは「それじゃ・・・誰?」

朝我「だから、君の事を・・・まあ少しだけ知ってる人」

なのは「やっぱりストーカーだよ」

朝我「違うから」

あれ?俺・・・小2の子供に弄られてる?

なのは「・・・なんでもいい」

朝我「え・・・」

彼女が先に折れ、俺に意見を求める。

なのは「私・・・独りぼっちなの。貴方・・・友達になってくれる

?」

独り・・・ぼっち!?

あの・・・高町なのはが！？

## 回想

これは、俺が機動六課で見てきた高町なのはのまとめだ。

高町なのはは19歳でエース・オブ・エースと呼ばれる程高い存在へと成長した。

その影には、度重なる苦難と困難の連續を乗り越えた事にある。

そしてあの時までのなのはは・・・その存在があるだけで、皆に希望をもえていた。

そう。周りから慕われ、決して独りぼっちなんかではない・・・そんな、皆の中心となる少女だった。

そして今、目の前にいる8歳のなのは。

彼女は自分の事を独りぼっち言つた。

朝我「独り……ぼっち。実はな、俺も独りぼっちなんだ」

なのは「え……」

朝我「ちょっと前に仲間が4人……事件で死んだんだ。俺の……  
唯一の仲間」

なのは「そう……だつたんだ」

朝我「ああ。だから、君が俺に『友達になつて欲しい』って言つてくれたの、凄く嬉しい」

そう言つと、彼女は笑顔で言つ。

なのは「じゃ、友達になつてくれるのー?」

朝我「ああ。君の人生の一番最初の友達は

朝我零だ」

なのは「……うん……!」

こうして俺はなのはと友人になる。

突如聞こえた女性の声に、俺は辺りを見回す。

朝我「！？」

？？？「ビックリした？」

朝我「まさか・・・11年前のなのはが・・独りぼっちだったなん  
て・・・」

そして俺は夜、寝どころが無いので公園のベンチで寝る。

だが、そこには誰もいない。

朝我「誰だー!?」

? ? ? 「ええ～！? も、もう私の声忘れたのー! ?」

え・・・この声・・・あの懐かしい声・・・まさか!?

朝我「なのは・・・なのか?」

なのは「ピンポーン!正解!」

いつも言ひと俺の背後から透けた状態の19歳のなのはが現れた。

朝我「なのは・・・死んだはずじゃ!..?」

なのは「うん。だから、朝ちやんに魔力としているんだよ」

朝我「魔力・・・なるほど、死ぬ前に俺の体内に魔力を入れて、その魔力と俺の魔力を組み合わせてなのはは実体となつて現れた・・・と言つわけか」

なのは「いやはは・・・頭良いね、正解」

嬉しくないつての・・・聞きたい事が、山ほどあるつてのに・・・

なのは「朝ちゃんの気持ちは分かるよ。けれど、私がこの状態でいるのも限界があつて・・・だから、言える事だけ話すね」

話すこと・・・か。

なのは「まず、私が独りでいる理由は簡単。私のお父さんが・・・事故で死んだの」

朝我「な…………！？」

なのはが……父さんを亡くしてる！？

そんなの……聞いたことがない……

なのは「それで、その時期から私のお店『翠屋』は忙しくなっちゃつて……私を育ててくれる人、私の面倒を見ててくれる人はいなかつたの」

それって……完璧な孤独じゃないか！？

なのは「だけど……もう大丈夫みたいだね」

朝我「え……」

なのはは、安心したように微笑み。

なのは「あの頃の私には  
もう心配はいらないかなあ～」

朝我「・・・俺に、なのはを救えるか？」

なのは「ううん。救つ必要は無いよ」

朝我「え・・・」

そしてなのは俺の胸に顔を埋めるように抱きついた。

なるほど・・・全ての魔力がなのはの存在維持に使われる訳じゃないのか。

なのは「私の魔力に合わせてくれる分の魔力が・・・もう無い」の

いや、俺はまだ全然いけるぞ!?

朝我「は!?

なのは「いやほほほ・・・もう、朝ちやんの魔力が限界みたい」

するとなのはは徐々にその姿を消えていく。

朝我「なのは・・・!?

なのは「ただ傍にいてくれれば、それで良いの」

朝我「また・・・今度はよな?」

なのは「え? もしかしておじこの?」

にせんやした様子で聞いてくれる。

朝我「・・・ああ。正直にい、凄く寂しい」

こんな気持ち・・・初めてだな。

朝我「なのはがいなこと・・・寂しげよ」

なのは「・・・いわんね・・・朝けやん

そつ言ひて、なのはは涙を流して姿を消した。

全てを

朝我「…でも、俺は負けない。救うんだ

!!

そつ覚悟を決め、俺は夜を過いだ。

なのは Side

なのは「・・えへへ・・」

家に帰った私は、やつぱり独りでした。

でも、今日は不思議と・・寂しい気持ちがしません。

お風呂に入つても、思い浮かべてしまつのは、公園で出会つた人。

私の・・初めての友達。

なのは「明日も・・・また会えるかな／＼／＼／＼／＼／＼」

そう言つて私は、明日が学校であることを忘れ、朝我さんの事ばかり考えて悶々として朝を迎えます。

## まずは独りで無くなる事（後書き）

知つた事は、彼女が独りぼっちだつたこと。

それは、周りから信頼されて・・・俺も信頼していた彼女しか知らないからこそ知つた・・・驚きの真実。

それを知つた俺は、ただ近くにいてあげよう決意する。

## 本と一人の少女（前書き）

高町なのはと出会つて二日が経つた。

その一日で、俺は色々な事実に驚いた。

なのはが独りだつたこと。

父を失つていた事。

だとしたら・・きっと彼女も・・・

そう思つた俺は、彼女を探す。

そして知る、新たな真実。

魔法少女リリカルなのは～全てを変えることが出来るなら～  
始まります。

## 本と一人の少女

朝我 Side

朝我「さて・・次は・・・」

そつ言つて俺は考えながら街を歩く。

向かうのは図書館。

今から探すのは『八神はやて』

彼女は読書が趣味（決して官能と言う意味ではなく）だったので今から彼女を見つけ、どんな生活をしていたかを知りうと思つた。

というのも、なのはの人生が俺の予想を上回つていたから、もしかしたらはやても・・・と思つたからである。

だが俺は本をあまり読んだりしないので、はやてと話しが合うか物凄く不安だつたりする。

朝我「元々勉強とか駄目だつたからなあ・・・」

そう。俺は勉強に関しては本当にダメで、機動六課に来れたのはリンクディ・ハラオウンさんの気遣いあつてだった。

その為、俺は戦術を建てて戦うなどは苦手で、戦いながら先を読むことしかできなかつた。

朝我「この時代に来んだから、少しほは勉強しないとな」

そう言って俺は図書館にたどり着き、中に入った。

朝我「うへん・・・つとへ・・・」

海鳴の図書館は結構本の量が多く、それだけにこの図書館は広い。

学校の図書館とは大違のだ。

さて、本を探し・・・もとい、はやてを探さないと…

そう考へていると俺の後ろから声をかけてくる車椅子の少女が現れた。

? ? ? 「あの、そこにある本、とつて貰つて良いですか？」

朝我「え？・・・ああ、」れか

そう言つて俺は4段目に置いてあつた本を取つて彼女に渡した。

? ? ? 「ありがとうなあ

朝我「いや・・・つて・・・!?

この喋りかた・・・髪色、声。

? ? ? 「?

朝我「あの・・・君は・・・」「

? ? ? 「え？」

朝我「君は

八神はやて・・・なのか？」

はやて「え・・・どうして・・・」

これが、俺が知らない・・・八神はやてとの出会いだった。

だから失礼ながら、はやての両親を利用をせてもうつた。

まあ全て嘘だが、はやての両親は既にこの歳で亡くなっている。

俺ははやての両親と知り合こと並んではやての親戚だと言つた。

はやて「ふえー…や、やつなん?」

朝我「ああ」

朝我「今日俺がここにきたのは、まあ今のせやての様子を見に来たつてところだ」

はやて「や、そんな・・心配なんていうへんよ?」

朝我「そうか・・まあ車椅子で生活してるってだけあって今の状況を知りたいから、今田は一緒にいていいか?」

はやて「それはかまへんけど・・朝我さんは大丈夫なん?」

朝我「ああ。問題はない」

はやて「うふ。それは、今日はよろしくお願ひします」

なんか・・はやてからそんなことを言われるのは初めてだな。

機動六課にいたときは命令されてただけだったからな。

そう言って部屋の電気をつける。

「やあ、ちよつと待つてなあー、今電気つけるからあー」

そこは、外出していたからと嘘のあるが、真っ暗だった。

朝我「・・・」

家に着くと俺は、いきなり衝撃を受けた。

そして俺は車椅子を押してあげてはやへの家に向かった。

だけど・・・まだ暗い。

なんだろ・・・なぜか、暗い部屋だと感じる・・・

部屋の電気が暗い？

・・・違う。

窓から日差しが入ってるのに、それでもまだ・・・この家は暗すぎる。

何故だ・・・なぜなんだ・・・

何故・・・なんて寂しい場所なんだ。

はやて「?..どないしたん?」

朝我「あ・・・いや、何でもない。悪いな、お邪魔して」

はやて「ええよ。私は一人暮らしやし、家族は多方がええからな

多い方つて・・・お前、独りじゃねえかよ。

俺や・・・なのはみてえに・・・

なんで・・・なんで笑顔でいられるんだよ・・・

・・・・・あ、そうか。

分かつた気がする。

なんで・・・こんなにこの家が暗いのか。

暗いのは・・・この家自体じゃないんだ。

はやて「はー。これ、お茶や」

朝我「ああ、ありがとつ」

本当に暗いのは

君の、  
はやて  
その笑顔なんだな。

朝我「……馬鹿やわ！」

ほんと・・・馬鹿だな。

はやて「え・・・あ／＼／＼／＼／＼」

俺は車椅子に座つたままのはやてを、やつと抱きしめた。

はやての顔を、俺の胸に埋めるよつこ・・・

朝我「お前・・・どうして隠すんだよ。話してくれよ。甘えてくれよ。泣いてくれよ。怒ってくれよ。そして笑ってくれよ。

「あ

俺は見たい、はやての本当の笑顔を。

こんな偽物の笑顔で、Jの世界が明るいとは思わない。

Jの・・・はやての生きる世界が明るいなんて・・・俺は、思わない。

はやて「・・・」めん。ちよつと・・・「つねにやくなるかもしねへん」

朝我「構わない。今は、俺しかいないからな」

はやて「・・・うん」

やつぱり、せめてよひをうたっておひただ。

全ての悲しみを叶えよう。

全ての理不眞を詮じよう。

全部・・・夢である事を祈るよう。

そして全てを叶え終えると、彼女は疲れさせて寝てしまへ。

はやて　たう　すう　たう

朝我「つたく・・・」の性格は、生まれつきか

いつも、自分の中にある感情を外に出さなくて、いざ出すと大きく  
て・・・

一度泣くといつも大泣きで、笑うと大笑いで、怒るとマジギレで・・

不器用だから、慣れないから・・・だから大きく感情が出てしまう。  
今のうちから「いつに」と慣れないから・・・皆から心配される  
んだよ。

朝我「良かつた。俺がいなかつたら……」のままだつたかもしけなかつたんだから・・・」

そう言つて布団の上にひたすらを仰向けで寝かせ、毛布を肩までかけて俺は部屋を出でていった。

朝我「またな、はやい。もうお前は  
やつぱり、俺はまじての家を出でこった。  
「さあ、わざわざみゆう」

独りじゃないからな

だがこの日の夜、八神はやは闇の書から現れる守護騎士達と共にここになる。

その話は、また時期を改めて話すことになるだひつ。

## 序章の始まり（前書き）

二人との出会いを終え、早くも時期は変わり、高町なのはは小学3年生となり、魔法とあります。

だが俺は未だ、何も出来ず、ただ一人といつもの場所で会って話をするだけ。

そう・・・ただ、それだけしかできない。

俺は、何をしていいのか分からぬんだ。

だが、そんな俺もどうとう、あの事件が始まる。

魔法少女リリカルなのは ～全てを変えることが出来るなら～ 始まります。

## 序章の始まり

季節は変わり、春になつた。

春の桜はいつも綺麗で、いつも  
える。

そう、全てはこの春から始まるんだ。

全ての始まりと終わりを伝

朝我「早くも・・・1年か・・・」

俺はこの1年の間に、なのはの両親と話をしてなのはの家族関係の修復をした。

そのかいあつてか、なのはは今まで以上に元気になり、学校でも友達が出来たと言っていた。

はやはその後、図書館で何度も会って、恥ずかしながら勉強を教わった。

基礎中の基礎はあるのだが、応用問題などが俺はダメで、はやは教わった。

・・・てかはやてつて9歳くらいになるのに何で小6の勉強している

んだ？

さて余談はここまでとして、いよいよ本題に入る。

もつもつと、物語が始まる。

彼女達の物語。<sup>かご</sup>

そこに、俺は参加する。

タイミングは最初からでも良いが、それは管理局と共に動く」と云  
うとなる。

出来ればそれは避けたい。

管理局や地上本部は・・・闇がいくつもあつたからな。

朝我「・・・！」

夜になり、俺は嫌な感覚を覚えた。

魔力反応や・・・何か強力な力を感じる。

朝我「これは・・・ロストロギアなのか！？」

初めて感じた感覚に俺は驚きながらも、その場所へ向かう。

朝我「・・・な！？」

そこは、木々がつるさい程にざわめいている。

そして風が体に容赦なく打ち付け、感覚を狂わせる。

俺が見つけたのは、そんなおぞましい雰囲気を魅せる一体の狼の様な化け物。

更には、全身ボロボロで体のいたる場所から血が流れる一人の金髪の少年。

彼は右手に紅き丸い宝石を持ち、目の前の化けものと戦う。

だが、彼の体力は限界で、狼に吹き飛ばされた。

朝我「！危ない！！！」

俺は両足に魔力を込め、それを爆発させて光の速度を手にする。

朝我

瞬間魔力換装

『

俺は少年を抱きとめ、少年をゆっくりと横に倒す。

朝我「・・・・殺るか」

俺は化け物を睨みつけ、瞳を閉じて

唱える。

朝我『牡蠣かけ闇す総光の門

』

俺の左掌から小さな魔法陣が現れる。

朝我『七惑七星が招きたる、由来艸阜の勢

』

そして刀の柄の部分が出てきた。

その形狀から刀だと判明する。

何かを察した化け物は素早く走り出し、俺に牙を向ける。

朝我『廉貞零零、急ぎて律令の如く成せ

』

次の瞬間、化け物は横にまつぶたつに切られ、更に炎に燃えて消滅した。

朝我『千歳の籌

火車切広光

』

三尺を越える大太刀、赤き焰を纏つて、俺はそれを右手に持つ。

朝我「無益な殺生は好まない。けれど、“護るため”なら、無益でも何でも斬る」

そう言つて俺は再び刀を左手に出した魔法陣の中に戻す。

そして切り裂かれた化け物の中からは蒼く輝く宝石が現れた。

朝我「これ・・・ジュエルシード!?」

俺はそれを、左手に再びだした魔法陣の中に納めた。

朝我「これが・・・全てを繋ぐきっかけロストロギア」

そして俺は倒れた少年の治療を始めた。

治療を終えると少年は何故かフェレットに成り代わり、俺は動物病院にあづけた。

## 序章の始まり（後書き）

この出会いは、全ての始まりの序章。

最初に見つけたジュエルシードは、その序章の幕開けを知らせる物。それを証明するかのように、俺はこの世界に来て初めて魔法を使つた。

## キャラ設定 朝我零編

朝我零ともがれい 19歳 身長175cm

魔力ランクS -

魔力変換資質 非保有

魔力色 『銀・黄金』

デバイス 非保有

希少能力 『次元の家』ホル・ハウス

説明

左掌に空間魔法陣を発生させ、そこから物を収納して自分専用の次元に送られる。

出したい時は左掌から魔方陣発生から、右手でそれを引き抜く。

両手で同時発生させた場合、巨大な魔法陣となり、人が入ることも可能になる。

これは量に限界が無いので、なんでも好きな量だけ入れられ、更に食べ物を入れてもその次元には時間軸が存在しないので腐つたりもせず、鮮度も入れた時から変化しない。

## 武器

『火車切広光』  
かしゃぎりひろみつ

三尺を越える大太刀で、刀身は仄かに紅い。

魔力を込めると焰を出すが、これは魔力変換資質とは関係ない。

武器はもつとあるのだが、まだ内容が進んでないので、進んでからまた発表する。

## 技

『始まりの世界』  
ダ・カーボ

## 説明

『次元の家』の能力を極限まで使い、現在の時間を別次元に送ることで自らを過去の時間に飛ばす。

だがこの能力は戻る事以外は出来ず、一度戻れば一度進むことは出来ない。

## 容姿

- ・髪の毛は肩までと長め。
- ・髪色は若干白が混ざった黒。
- ・服装は茶色っぽい長袖のジャケットに青いジーパン。B sizeofこれに同じ。
- ・瞳は普段は黒っぽい青。

## 性格

- ・頭はあまりよくない。

・冷静に物事を考える為、物事に対しても常に結果や理由を求める。

・謙虚なせいか、自分の事を低く評価しそう。

・怒った時は外道と呼ばれる程の恐ろしさをだす。

## 好き嫌い

### 好き

・人の笑顔。

・正直な想い。

・友人・親友・家族。

・甘えん坊。

嫌い

・好きな人の血。

・死。

・朝我零  
じぶんじしん

・好きな人の涙。

・嘘。

・運命。

余談

朝我は過去、つまり11年前に飛ぶ前の時間で生きていた高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやての3名に告白したが、3人ともふつたらしい。

いのりとも後の内容で頗りかかるのでお楽しみ。

## キャラ設定 朝我零編（後書き）

変更が何度もあると思うので感想 + 意見をお願いします。

## 始まり（前書き）

夜が明ける。

夜が明ければ、平穏な朝となり、平穏な日常が始まる。

だが、一人の少女は違つた。

そしてこの日、少女は日常とはかけ離れた、非常と出会い。

魔法少女リリカルなのは　～全てを変えることが出来るなら～  
まります。

始

## 始まり

なのは Side

なのは「行つてきます！！」

そういうと、私の家族は皆、私に『行つてらつしゃい』と書つてくれる。

そして私は元気に外へ出て、学校へ向かう。

去年までは無かつた、私の望んでいた日々。

それが叶つた背景には、朝我さんの存在がありました。

回想

ある日、私の家族全員が家に集まつた日、朝我さんは私の家に来て家族に言いました。

朝我「なのはを、これ以上独りにしないでくれ」

桃子「え・・・」

恭也「その前に、お前は誰だ?」

朝我「なのはの 最初の友達だ」

美由希「最初つて・・・なのはは学校に友達がいるつて・・・」

朝我「なのはが言ったのか?だとしたらそれは本心じゃない、なのはは独りだったんだ お前らのせいだな!――!――!――!――!――!

桃子「!?」

その時の朝我さんは、私の前では一度も見せなかつた　怒りの姿。

全身から怒りが溢れて、今にも爆発しそうでした。

朝我「事情は分かつてゐる。だが、家族・・・それも娘一人を見捨て  
るなんて・・・あんたらどんな神経してんだ？ああ！？」

口調もどんどん悪くなつて、不良みたいでした。

桃子「私だつて辛かつたわ。でも、これしか無かつたの！今は、今  
だけは我慢して欲しかつたの！時間が経てば、きっと解決するはず  
だから・・・」

朝我「今じゃないと　　駄目なんだよ」

朝我さんは静かにそつと言つた。

そして再び口を開け始めた。

朝我「今じゃないと　　なのはは変わつてしまつ。純粹な瞳と  
心を持つ少女が、変わつてしまつんだ。俺は、そんな事を許さない」

なのは「朝我さん・・・」

そう言つて朝我さんは、私の左手をギュッと握つてくれました。

なのは「あ・・・（温かいなあ・・・朝我さんの手）」

そう言つて私が朝我さんの手を握り返すと、朝我さんの表情は落ち着いて普段の朝我さんに戻つてくれました。

朝我「俺も、大切な人を・・・4人も失いました。だから、貴方がたの気持ちは痛いほど分かっているつもりです。でも・・・だからこそ、取り残されたなのはを一人にしないでください」

なのは「え・・・」

この時、私は初めて知りました。

朝我さんは、大切な人を4人も失つたって。

それなのに私は・・・朝我さんに色々な悩みをぶつけてしまった。

朝我さんの方が、もっと傷ついていた筈なのに・・・なのに・・・

桃子「ありがとう、朝我君。そして、『めんなさい。なのはを・・・  
独りにしてて、何も出来なかつたのは、私の責任だから・・・』

朝我「いえ。“誰が悪いか”じゃないくて、“誰が悲しんでいるか  
”が大切なんです」

桃子「そうね、ありがとう」

回想終了。

それからお母さん達は私と接する時間を作ってくれて、今年は大分時間が出来て、家族の時間が増えました。

それもこれも、全部朝我さんのおかげです。

・・・そして、もう一人。

アリサ「なのはあ～！早くしなさい～～～」

すか「なのせかへー。のせかへー。」

なのは「一人ともおねがいします！」

私に一人の友達が増えました。

金髪のちよつと怒りつぽいのがアリサちゃん。

紫色の髪で優しそうな子がすずかちゃん。

一人ともお金持ちで、少し忙しいけど、私と仲良くなっています！

そう、私の世界は朝我さんとの出会いで大きく変わりました。

この手にしたかった日常が、この手に入つて一生手に入らないと思っていた日々が・・・今ここにある。

桜が舞つこの春は、そんな新しい年の始まりです。

すずか「やう言えば昨日の夜、公園で何か事故があつたらしくよ

なのは「へえー、そんなんだあー」

あれ・・・何か引っかかるような・・・

昨晩、私は夢の中で紅い宝石と、黒い狼を見ました。

そこでは大きな爆発があつて・・・それで・・・

・・・あれ？そこから記憶がない・・・

アリサ「?.どうしたの？」

なのは「ふえ？な、なんでも無いよ！？」

笑つて誤魔化して、私達はバスに乗つて学校に向かいました。

バスに乗つている中、私は窓の外を長めながら、思い出す。

なのは「（朝我さんに会つて、もう一年か・・・もう一年にもなるのに私、朝我さんの事・・・何も知らない。出来ることなら・・

色々知りたいなあ）』

そう思いながら、また日常に戻る。

朝我「・・・」

昨晩の突然の事件から数時間が経過し、翌日のお昼頃、俺は再びあの場所に向かっていた。

そこは既に警察などが入っていて、俺達が立ち入る事はできなくなっていた。

まあ俺は隠れながら移動するのは慣れてるから別に問題はないのだが・・・

そして俺は隠れながら移動して、戦った場所に向かった。

朝我「・・・」

俺は、この世界の運命を変えた。

それは、俺が魔法を使って戦いをした時点で変わったのだ。

そもそも俺が魔法を手にしたのは元々あつたリンクアーコアが次元漂

流によつて田覚めて能力を手に入れたからだ。

そう。俺は次元漂流を経験したことがある。

死を感じた瞬間、俺は本能的に覚醒した。

俺はただ『生きたい』と強く願つた結果として、力を得る事ができ  
たんだ。

だが、力を手にしても俺は 誰も救えなかつた。

なのはやヴィータ、はやてもフェイトも救えなかつた。

ハッピーハンドなんて存在しないなんて認めない。

俺は、強引でも手に入れると決めた。

ハッピーハンドを  
。

だが、突然俺の背後から現れたのは、高町なのはだった。

なのは「な・・何で・・・」

朝我「それは、俺の台詞だ。なんで・・・なのはが」

なのは「え・・・朝我、さん」

朝我「な　　！」

アリサ「なのは！」

すずか「なのはちゃん！」

朝我「アリサ……すずか……」

なのは「え……なんで……知ってるの……」

やばいな……何かややこしくなつてしまひつつ……

アリサ「あんた……誰よ？」

すずか「私……知らないよ？」

そりゃそうだ。

俺が一人と知り合つるのは六課に入隊して地球に任務で向かつたあの時が初めてだからな。

さてさて余談は一行ほどで良いだらう。

なのは「朝我さん、何があつたんですか？」

朝我「・・・」

「この俺は迷う。

嘘を付くべきなのか？

真実を教えるべきなのか？

もし真実を言えれば、きっとなのはは魔法の世界に入つて・・・

だったら、嘘をつけばいいのか？

嘘をついて、なのはを平凡な人生を送らせるべきか・・・

朝我「……」めさ。話す事はできない

なのは「…………」ひひひひひひ

朝我「!?

なのはは悲しそうな表情でそいつ言った。

アリサとすずかは察したのか、黙つてなのはと俺の会話を聞いていた。

なのは「私、朝我さんに助けられてばかりで……朝我さんを助けることが出来てない!! 私は朝我さんの力になりたいの!!」

朝我「なのは……」

その表情、その眼差し。

それは、ヴィヴィオを救出する時に見た・・・なのはの表情にそつくりだった。

ああ・・・そうか。

意地つ張りな性格、自分の想いを通したい頑固さはこの時から既にあつたわけか。

・・・でも

朝我「ごめん。俺は・・・力になつて欲しいなんて思つてないし、力を求めていない」

なのは「・・・

そう言つとなのはは無言で俯き、そして我慢できなかつたのか、俺やアリサ達を無視して走り去つていつた。

すずか「なのははちゃん!――」

すずかは走つてなのはを追いかける。

アリサ「あんた・・・最低」

冷たい声でやう言つと、アリサも一人を追いかけていった。

朝我「・・・はあ、流石アリサ・・・グサツとくる言葉をくれるな

でも、実際にアリサの言ひ方とは正しい。

朝我「でもな・・・俺は、なのはに何度も助けられてるんだ」

そう。10年後のはは、いつも自分よりも周り中心で、俺の事もいつも護つてくれた。

こんな・・・すぐに死んでもいい俺の事を、護つてくれた。

そんななのはをこの世界で救う事が出来たのは、俺からの恩返しつて事にしてた。

だから・・・これ以上、なのはに助けて貰いたくない。

もひ、なのはは十分に護つてくれたのだから。

？？？「朝ちゃん、我侌だね」

朝我「！？」

すると俺の背後から現れたのは10年後のなのはだった。

なのは「お久あー！」

何とも軽い挨拶だった。

朝我「なのはってこの頃から真っ直ぐだつたんだな」

なのは「いやほほ・・・変わらない、私の短所みたいなものだよ」

自虐的な笑でそう答える。

なのは「でも、朝ちゃんは何であんなに強く拒んだの？」

朝我「俺は、なのはに助けられまくりだつたからな。なのに・・・  
これ以上助けられたら・・・」

なのは「迷惑？」

朝我「違つ・・・けど・・・俺が、情けなくてな」

いつまで・・・護られていれば強くなれるんだ?

俺は・・・強くなつて護りたいのに・・・情けなさすぎるだろ・・・

なのは・・・情けなくとも、私は良いと思ひよ」

朝我「え・・・」

いつもと変わらない笑顔でそう言った。

なのは「私は好きで護りたいの。独りぼっちだつた私の傍にいてくれた皆を・・失いたくは無かつたから・・だから、私の手の届く範囲だけでも、護つてあげたかったの」

朝我「なの・・・は」

全てを護る訳じやなくて・・・か。

なのは「私は、朝ちゃんの事を護りたかった。ただ・・・それだけなの」

朝我「・・・うん。ありがと」

なのは「いやはは・・・改めて言われると、ちょっと恥ずかしいかな」

頬をポリポリかいてそう言つた。

するとまたなのは消えかかった。

なのは「それじゃ私は消えるね」

朝我「ああ。ありがと」

なのは「うん。またね、朝ちゃん」

朝我「またな、なのは」

セイツヒツとのせは消える。

朝我「・・・いいのか・・・なのはを、巻き込んで・・・」

俺は再び

迷つ事になる。

そして、その日の夜。

なのは Side

なのは「・・・」

私は一人、夜の外を散歩してました。

今日、朝我さんと衝突しちやつて・・・だから気晴らしに歩いて紛らわそうとしてる。

なのは「嫌われちゃったかな・・・」

しうがないよね。私は、生意氣言つちやつたんだから。

・・・私に力があつたら、朝我さんの力になれるのかな・・・

もし私が朝我さんを護れる力があつたら、朝我さんは私を認めてくれて・・・

なのは「あれ・・・ビーハー、いろんな朝我さんの事・・・考えてるんだろう・・・」

不意にせつ思つた。

理由が分からない。

何が原因で私は朝我さんの事を考へてるんだろう。

初めての友達だから?

うへん・・・なんか惜しいような気が・・・

そして私は更に不意にこんな事を考へてしまった。

もしかして朝我さんの事が好きだつたりして?

なのは「はり／＼／＼／＼／＼」

どうしてだろ・・・急に熱くなつてきた。

好きって事がよく分からぬけど、思つたら思つたらで何か詰まつていた物がとれた感覚があるよ。

分からぬいけど、嬉しいな。

こんな・・・幸せな気持ち。

朝我さんの事を考えると、心臓がドキドキして、呼吸が少し荒くな  
る。

苦しいけど・・・嫌いじゃない感覚。

なのは「でも……だとしたら、仲直りしないこと……」

じやなこと、ずっと仲悪いままだから……

なのは「明日、ちゃんと謝るー。」

やつ決めた私は、家に帰ろうとした。

助けて・・・

なのは「ふえ？」

私は誰かの声が聞こえた気がしたので後ろを向いて確かめました。

でもそこには誰もいなくて、だから空耳だと思ったので再び家に向かって・・・

誰か  
・  
・  
助けて  
・  
・  
・

なのは「！？」

・  
・  
・  
違う。

空耳なんかじゃなくて・・・本当に助けてつて・・・助けを求めて  
る!

だったら・・・だったら！－！－！

私は声の聞こえる方へ走つていきました。

けれど、迷つてなんかいられない。

足で纏いになるかも知れない。

何が出来るか分からない。

私には、選択の猶予は『えられていないのだから。

私は、“決断”しなければいけないのだから。

## 決断と、手にかかる光（前書き）

少女は走り出す。

夜の道を走る。

少年は走り出す。

夜の道を走り出す。

全ての始まりは、一人の一歩から

魔法少女リリカルなのは　～全てを変えられることが出来るなら～  
始まります。

## 決断と、手に見る光

朝我 Side

朝我「！？ロストロギアの反応！？」

気づいた俺は即座に走り出す。

朝我

『ブリューゲル・ブリッツ  
瞬間魔力換装』

□

速度は光を超えて、目指すべき場所へ向かう。

なんで・・・こんなに嫌な予感がするんだ?

「」の脳髄のうずい・・・一体何だ!?

朝我「とにかく・・・間にあってくれーーー!」

俺は光を超える速度で移動しながらそつ思った。

なのは Side

なのは「これって……」

そこは家が沢山ある場所でそこはまるで戦いでもあったかのようだ地面が抉れていたりしていました。

そしてそこには3つの顔を持つ黒い影と小さなフュレットがいました。

『君は……』

なのは「え？」

私にかかる声。

その声の主は間違いなくあのフュレット。

でも・・・フュレットが喋るなんて・・・

・・・うう。今は全てを否定している場合じゃない。

今は、この状況を打破しないといけない。

なのは「私は・・・何をすればいいの?」

そのフュレットを拾い上げて声をかける。

フュレット「君には素質がある。この“力”を使う・・・素質が」

そう言ってフュレットは私に紅く丸い宝石を渡した。

なのは「これは?」

フュレット「君に力をくれる物。君の力を貸して欲しい。手伝つて  
欲しいんだ!!

なのは「・・・・・」

私は見つめる、この田舎を。

今から私はきっと、田舎を遠ざけたくなる。

非日常へ踏み込む。

今なら、まだ戻れる。

違う。

逃げるのは、もう嫌だ！

もう　　逃げたくない……後ろを向きたくない……

助けてと言われた。

私には出来ることがあると知った。

だったら、迷つてなんかいられない。

迷つ必要なんかない。

やつ、答えは

最初から決まっている。

なのは「私は、力が欲しい。私は、どうすればいいの？」

私は迷わず、力を欲した。

フェレット「僕の言つ言葉を続けて唱えて」

なのは「うん！」

そつ言つて、私は復唱する。

『  
解き放て

我、使命を受けし者なり。契約の下、その力を今ここに

唱えると、不思議と体が軽くなる。

まるで翼を手にした天使の様に。

体に『自由』が手に入った様に。

私は詠唱を続ける。

四

風は空に

星は天に

そして

五

そして、温かな桜色の光が私を包み込む。

なのは『不屈の心』の胸

――  
『.

そして私は白き魔女服に着替えると、杖となつた紅い宝石を握る。

なのは「レイジングハート………セット・アップ……！」

そして私は光の中から現れる。

不屈の心を胸に

今。

なのは「行くよー・レイジングハート…！」

もう、私の瞳と心に      迷いは無い。

だから私は、真っ直ぐ      行くんだ！！！

朝我 S.i.d.e

朝我「！？」

俺が着く頃には、もう遅かった。

なのは「行くよー・レイジングハートーーー！」

彼女は、光と翼を掴んでしまったのだ。

朝我「そんな・・・・嘘だろ・・・・」

間に合わなかつた。

なのはは、運命に引き込まれる様に、魔法の力を手にした。

結局俺は、止められなかつた。

なのはが魔法の力を手に入れるのを防ぐことができなかつた。

## 非日常へ踏み出す一步（前書き）

覚醒してしまったエース・オブ・エース。

その現実に後悔しても、後悔している時間は無かつた。

今はただ、護ることだけを考える。

今はただ、目の前で怒っている事を受け入れ、対応するんだ！

そして俺は  
護るんだ！

魔法少女リリカルなのは～全てを変えることが出来るなら～始まります。

井田耕一 著『腰痛』

朝我  
Side

朝我「なのは・・・」

俺は拳を強く握り締め、後悔していた。

だが、後悔している時間も無かつた。

なのは「あわう……」

朝我「…? まざい…!…!…!」

なのはは影との戦闘で吹き飛ばされた。

## いきなり初めての実戦。

しかもなのはは空戦魔導士。

体が不安定な中で戦うなんて・・・無茶だ！！

だったら・・・だったら俺が何とかしないとダメだろ！！

朝我

『ブリューゲル・ブリッツ  
瞬間魔力換装』

！・！・！

光を超える速度で、空を駆け抜ける。

なのは Side

なのは「え・・・」

私は戦いを始めるとい、すぐに影に吹き飛ばされた。

だけど私はある人に助けられた。

私の私を助けてくれたのは、私が護りたかつた人。

朝我「大丈夫か？なのは」

そして 私が大好きな、一番最初の友達。

なのは「朝我・・・さん」

朝我「なのは・・・ケガは無いか？」

なのは「あ・・は、はい」

そう言つて朝我さんはゆっくりと地上に私を下ろして、電柱に背中をあずける形で座らせました。

朝我「なのははい」という。俺があいつを斬る！」

フュレット「君は・・・

朝我「・・・お前は、昨日の・・・ギリギリ

フュレット「それは・・・奴の中にあるロストロゴギアが目的って言  
えば君は分かる?」

なのは「?/?/?」

ふ、二人は何の話をしてるのぉおおー?ー?ー?ー!?

朝我「なのは、お前はかなり厄介な事に巻き込まれた・・・ってだ  
け、今は説明しとく」

なのは「朝我・・・さん・・・」

突然、朝我さんの声が重いものとなり、更に朝我さんの左手に小さな魔法陣が現れ、そこから刀の柄の部分が出てきました。

朝我さんは迫り来る影の方に体を向け、唱え始める。

朝我『牡蠣かけ露す総光の門』

□

朝我『七惑七星』が招きたる、  
由来艸阜の勢



朝我『廉貞零零、急ぎて律令の如く成せ

四

そして影は朝我さんに襲いかかった。

・・・だが刹那、影はまっぶたつに切られて更に燃え上がった。

朝我『千歳の儀

火車切広光

』

朝我さんの右手には紅い焰を纏つた刀がありました。

なのは「凄い・・・」

フェレット「君は・・・一体・・・」

朝我さんは刀を左手の魔法陣の中に納めて、私達に話した。

朝我「誰も護れなかつた、無力な男さ」

その後、レイジングハートの中に蒼い宝石を納めて私達は海鳴公園の芝生に座つて話を始めました。

朝我 Side

朝我「そんでフェレット。お前は誰だ？」

ユーノ「僕の名前は『ユーノ・スクライア』。僕はあのロストロゴギ

アの回収をするため」「この世界に来んだ」

朝我「やつ君の・・・あの蒼い宝石か?」

セツヒトユウヒとユーノは頷いて更に続ける。

ユーノ「僕の失敗で、この世界に別れてしまったんだ。だから僕はこの世界に来て、あのロストロギアを・・・『ジュエルシード』の回収をしていくんだ」

なのは「ジュエル・・・シード・・・・」

朝我「なのは、分かつたか?」

なのは「うん・・・何となくは

だつたら・・・

朝我「だつたら今すぐなのははこの事全てを忘れて、元の日常に戻  
れ」

なのは「え・・・」

元々なのはは無関係者だ。

それをユーノが勝手に巻き込んだ様にしか俺は思えない。

朝我「この件に関しては俺が解決をせる。だからなのはは日常にも  
ど「『嫌だ』・・なのは」

だが・・いや、やまつと黙りべか・・なのはは反抗した。

なのは「私は何か出来るんでしょ！？私は・・・今はまだ足で纏い  
になるけど、もつともつと強くなるからーーー。」

朝我「セイジじゃない・・・セイジじゃないんだーーー。」

なのは「ーー？」

俺は頭に血がのぼったかのよつに怒ってしまった。

朝我「お前は平和に生きて良いんだよーーこんな、いつ死ぬかも分  
からない世界に、その歳で入る必要なんて無いんだーーだから・・・  
」

なのは「・・・」

なのはは静かに、俺の両手を握った。

朝我「つ・・・なのは・・・」

なのは「私、朝我さんに日常を取り戻してもらえて、本当に嬉しかった。だつて、私はいつ死んでも独りだつて思つていたから・・・。だから、だからそんな私を助けてくれた朝我さんの傍にいたいの!」

朝我「・・・」

真つ直ぐな瞳。

まるで穢れを感じさせない、その純粹な瞳と想い。

いつだつて、この瞳と心は変わらない。

俺が大好きな・・・彼女の心。

そう。俺はいつだつて・・・彼女の瞳と心に憧れていた。

朝我「・・・良い、のか?」

なのは「私はもう・・・決めたんだ。逃げないつて。強くなるつて!」

真つ直ぐな瞳で言われた俺は、何も否定できず・・なのはの言葉を受け入れることしかできなかつた。

朝我「・・・分かった。だけど、一つだけ条件がある

なのは「？」

俺はなのはを抱きしめて言った。

なのは「ふえ！？！？！？」

朝我「絶対に、俺の傍から離れるなよ。魔法は、俺の傍だけで使つてくれ」

もし、最悪な運命がなのはを待つのなら、俺がその運命を変えれる。

だとするなり、俺もなのは自身も、離れ離れになつてはいけない。

それをよく知つてゐから……だから、俺は彼女を護る！

なのは「・・・キュウウウウウ」

朝我「！？な、なのは！？しつかりしろ！…おい！？」

ユーノ「あ・・・なのはここ感するよ・・・」

何故か頭から湯気を出して目をクルクルさせて氣絶するのはだつたとき。

## 雷の魔導士（前書き）

まるで運命に導かれるように魔法の力を手にしたなのは。

その手にした力と、解決させないといけない事件が、俺達の始まり。

そして遂に彼女が動き出す。

それは、背負いし過去と、取り戻したい過去を持つ少女。

彼女との出会いは、俺の中で様々な想いを創り出す。

魔法少女リリカルなのは　～全てを変えることが出来るなら～ 始まります。

朝我 S.i.d.e

朝我「・・・（ 、 ）ハア…」

今日の俺は溜息続き。それもそのはず。

今の俺の現在地が高町なのは家の空き部屋だからだ。

理由はまあ俺が普段野宿してると説明したらこゝに連れられ、「西親に説明したら〇〇だった」と嘆ひひとことこんな感じです。

・・・うん、優しすぎる。

衣食住に困らない点ではなんていい場所なのだけれど悪い。

それでそんな日々が始まって早一月。

なのには学校に出かけている。

ユーノが護衛（役に立つか不明）につけてるので俺は高町家でのん

びつと・・・・はじてない。

朝我「いらっしゃいました、翠屋へようこそ」

俺は翠屋のお手伝いをしていた。

流石に無銭飲食は心苦しいので、せめて何かできないかと考えた結果としてこれだ。

「いつづけ」のイターなど、客を扱う仕事は初なので少し戸惑つが、まあ何とか慣れた。

そんなことの繰り返し。

今日は何事も無ければと、忙しい中祈る。

朝我「！？」

だが、やはりと書つかなんとかうか、現実はそうはいかないらしい。

ジユノルシードの反応だ。

朝我「桃子さん、俺、なのはの迎え行つてきます」

桃子「ええ。店は大分客が減ってきたから構わないわよ。なのはの事、よろしくね（ニヤリ）」

朝我「はい」

そう言つて俺は走つて店を後にした。

・・・・・てか、さつき桃子さんが何か企んでいるような表情をしたような・・・まあいいや。

なのは Side

なのは「え・・・ええええ！？！？！？！？」

ユーノ「うわあ・・・」

私達はジュエルシードの反応した場所に向かいました。

するとそこには巨大な猫さんが一匹・・・しかも巨大。（大事な事なので2回言いました）

なのは「ね・・ねえユーノ君?あれって・・・何でああなるの?」

ユーノ「え・・・えつと、ジュエルシードは想いを叶える力があるんだけど、多分あの猫は『大きくなりたいな』って思った所にジュエルシードがあつて・・・」

叶つちやつたと・・・・・ジユエルシードも夢の叶え方が豪快すぎる

ユーノ「僕は補助をするからなのはは戦つて！」

なのは「分かつた！」

猫さんにはかわいそうだけど、仕方ないよね！」

私は桜色の弾丸を5つ展開させる。

そして杖を振つて放つ。

なのは「ディバインショーター・・・シユートー！」

放たれた弾丸は猫さんに当たりましたが全然効いてないようです（

――）

だけど・・・

なのは「え・・・」

突如放たれた雷の槍が、猫さんに直撃しました。

私は放たれた方向を向くと、空に金髪の髪をして黒いマントを羽織った女の子がいました。

？？？？「バルディッシュと同型の・・・インテリジェントデバイス・・・」

なのは「え・・・・-?」

私が疑問に思つた瞬間、私に向けて雷の槍が放たれた。

私は何とかシールドを張つて防ぐと、その隙に彼女は猫さんを雷の鎌で切り裂いた。

そして猫さんは徐々に小さくなつてジュエルシードだけが残つた。

? ? ? ? 「ジュエルシード . . . 回収

そう言つて彼女はジュエルシードを雷の鎌に入れました。

そして去りうとじていた。

なのは「ー・ま、待つて！ー！」

そして私が飛ぶと、眼前には刃を向けた彼女が・・・

なのは「！プロテクション！ー！」

私は何とか防いで距離をとる。

なのは「い、いきなり攻撃なんて・・・理由ぐらい言つてくれても  
！――！」

？？？？「言つても・・・多分、意味がない・・・

彼女は静かに答える。

そして私に雷の槍を5発放つ。

なのは「――ああああ――！」

私は防ぎきれず、撃墜されてしましました。

? ? ? ? 「・・・『めん』

そいつって彼女は止めと言わんばかりに一発の槍を放つた。

? ? ? ? 「口で言わない時點で、意味なんて無いだろ・・・

？？？？「…？」

なのは「え・・・・・」

薄れゆく意識の中、私が見たのは

朝我「(めん。遅くなつた

なのは「朝我・・・せん」

私を助けてくれた、初めての友達の姿。

朝我 S i d e

朝我「ふう・・・間に合つた」

遅くはなつた。

けれど相手が“彼女”で助かつた。

俺はなのはを木陰に仰向けて寝かせ、ユーノに任せると俺は彼女の  
もとへ向かう。

朝我「待てよ！」

フェイト！』

フェイト「つー?」

俺が名前で言うと彼女は驚いた様に俺を睨む。

フェイト「ビッシュ…私の名前を…」

朝我「知ってるよ。俺は…君の事を、よく知ってる」

護れなかつた人の一人だからな。

フェイト「私は…貴方を知らない」

朝我「そんじや、初めまして。朝我零だ。フェイトは名乗らなくて  
も良い。知ってるから」

フェイト「…」

彼女は静かに俺に刃を向ける。

朝我「…なんの真似だ?」

フェイト「私の敵なら、斬る」

朝我「・・・今はもしかしたら

敵なのかもな

そう言つて俺は左手に小さな魔法陣をだす。

フェイト「なら 倒す！」

そつ言つて彼女は俺に真っ直ぐ切りかかる。

朝我  
『牡蠣かけ露す総光の門』

四

朝我『七惑七星』が招きたる、由来艸阜の勢

』

そしてフェイトの刃が俺に当たる瞬間、フェイトの以外の雷がフェイトの刃とぶつかり合う。

フロイト「...?」

朝我『文曲零零、急ぎて律令の如く成せ

四

そして俺の右手に現れるは、雷の刀。

朝我『千歳の儔

雷切

四

ここに、雷刃と雷切がぶつかり合つ。

雷の魔導士（後書き）

ぶつかり合ひのは一つの雷。

運命を背負う二人の刃のぶつかり合ひは、二人の進むべき運命を変えることとなるのか？

## 雷が背負つ者（前書き）

一つの雷がぶつかり合つ。

それは、お互に叶えたい夢と想いがある一人が振るう刃。

一つの雷光がぶつかり合つ時、運命に変化が訪れる。

一人が背負つ、その想いとは 。

魔法少女リリカルなのは ～全てを変えることが出来るなら～  
まります。

始

## 雷が背負う者

朝我 S i d e

フロイト「はああああああああああ—!—!—!」

朝我一はあつ！！！」「

アドバイスは勢いよく真正面から俺に切りかかってきた。

俺は刀を逆手に持つて振る三

『ノルマニ』

俺が刀を逆手持ちにしたことを恐れたフヨイトは瞬時に下がって雷の槍を放った。

俺はそれを切り裂いて、再び刀を構える。

フェイト「（逆手持ちの刀・・・初めて見る。いきなり飛び込んだら危ない）」

朝我「（だま9歳なのに）、あんなに思考しながら戦つなんて・・・。  
流石フロイト）」

お互いにお互いを分析しながらの戦い。

だが俺は余裕そうな表情で戦っていた。

朝我「まだまだこんなものじゃないだろ？もつと本気で来い！」

フェイト「言われなくとも・・・・！！」

そう言ってフェイトは5発の雷の槍を放つ。

朝我「よしとー！」

俺はバック宙をして避ける。

フェイト「そーじーーー！」

そう言って着地した瞬間の俺に切りかかった。

朝我「！？」

更に背後からは先ほど放った5発の槍が俺の方にターンして迫ってきた。

簡単に言えば挟み撃ちだ。

フェイト「これで・・・！…！」

フェイトは勝利を確信した。

朝我

瞬間魔力換装

』

フェイト「な  
!?」

俺はフェイトの刃と雷の槍が当たる寸前で光を超える速度で移動して回避した。

卷之三

そしてフェイトは自分自身の技で自爆した。

朝我「“現在”<sup>いま</sup>のフェイトじゃ俺は倒せない。まだ・・・まだな」

フェイト「くつ・・・・」

爆風の中から悔しそうな声をだすフェイト。

つて、B→ボロボロじゃないか・・・

朝我「ジユノルシードを狙う理由は?」

フェイト「教える訳には・・・いかない!」

強い口調でそう言ったフェイト。

朝我「・・・・」

そう言ってフェイトは再び立ち上がり、雷の槍を複数展開して放つと同時に切りかかった。

朝我

『瞬間魔力換装』

』

朝我

千鳥  
一閃

』――

フェイト「なー?」

俺は光を超える速度で突っ込み、雷の槍をひらりひらりと避けながらフェイトに一閃を入れる。

フェイトは何か耐えきり、腹部を左手で抑えながら俺を睨む。

フェイト「があつーーー！」

蒼き雷光の一閃がフェイトの腹部を切り裂く。

「 フェイト 」 じ、 して ・ ・ ・ 峰打ちを ・ ・ ・

『 気づいたみたいだな。』

俺は最初からフェイトと戦う時は峰で戦っていた。

それは、フェイトを殺さないため。

刀は振るえば人を殺す凶器となる。

だけど、殺さない様に使うことだってできる。

だから俺は、なのはを殺さなかつた彼女を殺さない。

朝我「 フェイトを殺す理由が俺はない。だから、今日はこのへん

で終わりだ

そう言って俺は雷切を左手の魔方陣に納める。

フェイト「・・私に、何もしないの？」

朝我「何で？」

フェイト「だつて・・敵だつて・・」

朝我「フェイントには背負つものがあるんだろ?..だったら生きる。フェイントには生きる権利があるんだから」

「フェイント」・・・

フェイントは無言で、飛び去つて行つた。

追いかけはしない。  
呼び止めはしない。

必要ないから。

だって、またすぐ会うのだから。

ジユノルシードがあるのなら、俺達は  
また会つ事になるだ  
う。

朝我「……フヒイドの運命も、変えてやりたいの……」

俺は、何もできぬこと。

現在も・・・未来も。

そんなことも知らなかつた俺はフェイトに

告白をした。

フェイトがプロジェクトFで生まれた現実を、10年以上経つても、  
なのは達と恵まれても、背負つたまま・・・忘れられずにいた。  
フェイトの背負つているものに、気づいてあげられなかつた。

俺はJ・S事件の時、フェイトを救えなかつた。

結果は当然の如く振られた。

その理由はきっと、何も知らない俺が嫌だったのだろう。

そんな事も分からなかつた俺は・・・結局フェイトを救えず、誰も救えず・・・失つた。

朝我「俺は

また救えないのかな・・・」

？？？？「ううん。朝我なら、救えるよ」

朝我「！？」

突如、俺の背後から聞こえた・・・懐かしい声。

後ろを向くと、ひらりと金髪の長い髪をなびかせる、大人っぽい女性がいた。

そう　　俺が護れなかつた人の一人。

朝我「フェイト・・・」

10年後のフェイトだった。

フェイト「うん。久しぶりだね、朝我」

朝我「お前・・・どうして・・・」

「フュイト」なのさと同じ様に、朝我の魔力を借りてるの

おい・・・ 胜手ですな。

朝我「全ぐ、10年前のフュイトはあんなに頑固だったとは

フュイト「うう・・・」めんなさい

俺がじと皿で見るとフュイトはジコンとして謝った。

朝我「・・・なんか、いつやつて会話でもある皿が来るなんてな

フュイト「そうだね。『めん、勝手に逝りやつて』

朝我「全ぐだ。そのせいで俺がタイムスリップする羽田になつたんだからな

フュイト「うう・・・」

また凹むフュイト。

朝我「冗談だ。俺が勝手にとつた行動だ

やつぱりフュイトの頭を撫でる。

そうするとフュイトは頬をほんのり赤める。

フェイド「もつ・・・本当に、優しいんだから」

懐かしむような声でそう言いつつフェイド。

フェイド「朝我。私を・・・救つて」

朝我「フェイド・・・」

フェイドは真剣な表情で俺を見つめる。

フェイド「今の私は、本当の真実を知らずに生きてる。そしてこの先、後悔する結末が待ってる。だから・・・だから、運命を変えて、朝我！」

フェイドの強い想い。

それは、他人にいつも過保護なフェイドだからこそなのだろう。

フェイドだって、もし変えられる運命があるなら変えたいと願っている人の一人だ。

だけど、過去は変えられない。変えられる力が無いから。

だからフュイトはその度に後悔することだった。あつた。

執務官だつたからこそ、運命を誰よりも恨んでいたはずだ。

そんなフュイトだからこそ、自分自身ですら過保護なんだ。

朝我「当然だ。俺は絶対に助けるし、運命を  
変えてみせる」

そう。俺は、そのためにこの時代まで飛んだんだ。

そして、力がある。

だつたら答えは決まつている。

助ければいいだけだ。

フェイト「うん。ありがとう、朝我」

朝我「ああ。だからフェイトは、のんびりと自分自身の運命の変化を見届けてくれ」

フェイト「うん。朝我、応援してるから。いつでも“力になつてあげる”からね」

朝我「・・・じゃな」

フェイト「うん。またね」

やつぱりヒカルは消えていった。

朝我「さて・・・そんじや、家に帰るか」

そつと云つて俺はなのはのもとに行き、目をクルクルさせていりなのはをおんぶして家に帰つていつた。

## 雷が背負つ者（後書き）

救えなかつた運命の少女に頼まれたのは、過去の自分を救うこと。  
過去を変える、それが彼の目的なら、答えは決まつている。  
彼は、彼自身の持てる力全てで護る・・・救うと決めているのだから。

## 過去を変えられなくても（前書き）

高町なのはが魔法の力を手にしてじばらぐ。

その間のなのはの成長速度は、朝我とコーノの一人も驚くほどだった。

このままなら、どんどん強くなつて……

だが、そんな今だからこそ……現実を知ることが必要となる。

魔法少女リリカルなのは ～全てを変えることが出来るなら～  
始まります。

過去を変えられなくても

朝我 Side

朝我「…なのは、上行つたぞ……！」

なのは「うん……」

暗闇の夜、俺となのはとコーノのミタジコモルシードの回収に向かつ。

最初の頃は飛ぶことすら不安定だったなのはは、今は自由に飛び回り、そのまま攻撃ができるようになってきた。

なのは「ディバインショーター・・・ショーター……」

なのはは5発の魔力弾を放つと、それら全てが直撃して、敵は消滅。

そのままジコモルシードが現れ、なのははそれを回収する。

朝我「お疲れ」

なのは「うん…」

この頃なのはは調子が良じよりで、俺と訓練をしていても徐々に動きにキレが増したりしてきていた。

それだけあって成功の度に喜びは大きくなつたようだ。

朝我「帰るぞ。夕飯までにな

なのは「うん……」

やつぱりなのはは俺の右手に抱まる。

ユーノは俺の左肩に乗つかる。

朝我

『瞬間魔力換装』  
ブリューゲル・ブリッツ

□

光を超える速度で俺達は家に帰り、一日を平和に終えたのであった。

なのは Side

なのは「はふう・・・生きて返るう~」

私は家に帰り、お風呂の中でのんびりします。

戦う事が何度もあって、『アーティリフレッシュ』の時間は大切だと今一度学びました。

なのは「私・・・強くなってるよね・・・」

湯に浮かぶ自分の顔を見て、自問自答していました。

なのは「いのまま強くなれば、私は朝我さんの様に・・・」

そう。私の目標は、朝我さん。

あの人っこる世界まで進んでみたい。

今そのままなら、行ける気がする。

だつて私・・・強くなってきたらね。

なのは「もつと・・・もつともつと、頑張らなきやー。」

そう言って私は再び気合を入れ直すのであった。

・  
・  
・  
翌日。

朝我 Side

朝我「もう・・・駄目だ。耐えられない」

俺は翠屋から離れて街中をのんびり歩いていた。

本日翠屋はとあるサッカーチームの勝利を祝つ為貸切状態で恐ろしいこととなつてゐる。

俺はかなり無関係者なため、その空氣に耐えられずに逃げてきたわけだ。

朝我「ふう・・・」は何も無ければ、本当に平和な世界だな

魔法の世界に足を踏み込めば、こんな日常は少ない確率でしか無いからな。

さて・・・」の後で時間を潰すか・・・コーノ連れてくれば良かったな・・・

そんな後悔をしていると、俺は感じた。

朝我「・・・つたく、平和ってのはいつも簡単になくなるのか・・・」

そう言って俺は走り出す。

朝我

瞬間魔力換装  
ブリューゲル・ブリッツ

□

朝我「な　　！？」

俺がなのはのいるビルの屋上に辿り着く。

なのはも気付いたのだろう。

そこに辿り着いた時、俺は絶句した。

なのは「あ・・・・ああ・・・・」

なのはは絶望したように座り込み、眼前に広がる光景から目を逸らせずにはいる。

今回のジュエルシードは、巨大な大樹だった。

街の中心部に生えたその根は、海鳴市を大きく覆っている。

朝我「流石ロストロギア……ほんとに、叶えることが豪快だ」と  
で・・・」

ここに来る途中で反応が大きくなつた時点で予想はしていたが。

多分、暴走したんだ。

これだけの大きさと言つことはおそらく、『人間』が発動させてしまつたのだろう。

俺達とは違う一般人にとって、ジュエルシードは綺麗な石や宝石の落し物程度にしか見えない筈だ。

だからこそ、それを拾つてしまつたの当然のことだ。

朝我「さて……ジュエルシードはどうだ……なのは!」

俺はなのはに声をかける。

なのは「や……わ……私……私……」

だがなのはは全身を震わせ、顔は青ざめた様子でいた。

朝我「ユーノ。なのはに何があった？」

答えをユーノに聞いた。

ユーノ「多分、気づいていたんだ。ジュエルシードの反応に……  
だけどなのはは何も出来なかつたんだ」

気づいていて……何も出来なかつた……か。

なのは「気づいてたのに……分かつてたのに……私……」

まるで、あの時の俺みたいだな。

## 回想

これは俺が機動六課に入隊してホテル・アグスタと言つ場所での護衛任務終了後の事。

この護衛任務の概要はまた未来になればわかるが、ティアナの行動が不自然と言うか・・・焦つているよつだった。

もっと・・・早く強くなりたい。

誰でも思つことだ。

だがティアナの場合は、その想いがとても強かつた。

その後、なのはは模擬戦を行うと宣言していた。

その宣言で既に俺は、嫌な予感がしていた。

結果は、予想通りティアナとスバルがなのはに本氣で落とされる。

俺は・・・それを気づいていて、何も出来なかつたんだ。

後悔した。

もしかしたら、俺はその運命を変えられたのではないか？

そう思つと、彼女達に謝罪の想いでいっぱいだつた。

回想終了。

・・・確かにその時・・・フェイトに慰められたんだっけ?

えっと・・・なんて言つてたっけな・・・

・・・ああ、そういう。想い出した。

朝我「なのは

なのは「え・・・」

思い上がるな…………！

なのは「…？」

俺は怒鳴るよつてなのは詰め寄る。

そして俺はフロイトに言われたことを俺なりに言った。

朝我「お前は神様か！？違うだろ！？失敗はいくらだつてあるーこの先、今よりもっと辛い失敗を何度も何度も繰り返す！！でも、それから逃げちゃ駄目なんだ！！現実逃避するんじゃない！変えられない過去があるなら、変えられる未来を変えるんだ！！！」

なのは「朝我……せん……」

そつ。フェイントも言つてくれた。

朝我「なあなのは？なのはの手には・・・力があるんだ。人を救える力、人を護れる力、人と向き合える力。そしてその手の魔法は、打ち抜く力だ。涙だつて、痛みだつてそして運命だつて」

なのは「運命・・・」

なのはの体の震えが無くなつた。

そして瞳には力が徐々に戻つてきた。

朝我「さあ、過去の失敗を撃ち抜いて、成功する未来を掴むんだ！」

## 回想

俺がフェイトに、ティアナ達の件を話した時。

フェイト「朝我。朝我は・・・力があるんだよ。それでも、失敗はする。私だって・・・なのはだつてはやでだつて。誰だつて失敗するから、だからこそ、今ここで現実逃避しちゃいけない。過去は変えられないんだつたら、未来を帰れば良い。今と同じ失敗を、もう一度としないように努力すればいい。そうじやなきや・・・また、同じ失敗を繰り返すよ?」

回想終了。

朝我「これが魔法の世界だ。後は、なのは自身で決断するんだ」

そう言って俺はユーノを肩に乗せて空を飛ぶ。

朝我

瞬間魔力換装

□

なのは Side

なんだろ・・・私。

いつまで・・・に立つたままなんだろ・・・

朝我さんとユーノ君はとっくに戦ってる。

私は・・・戦わないの?

私・・・調子に乗ってたんだ。

力があるから、助けられると思って・・・まだまだ弱いのに・・・  
魔法の力を過信しすぎてた。

私は弱い。だから失敗する。

だけど、だからこそ・・・それを乗り越えることができる。

私には、力があるんだから・・・

なのは「レイジングハート・・・私に、力を貸して！――！」

なのは「レイジングハート、セット・アップ！－！－！」

そう言つて私はビルの屋上から勢い良く飛び、レイジングハートを掲げる。

そして桜色の光が私を包み、私は朝我さん達のもとへ向かう。

## 柔らかな桜光

朝我 Side

朝我『千歳の儂

火車切広光

』

俺はまあ相手が木なので炎の刀である火車切広光を右手に持ち、迫り来る枝を切り裂く。

サーチを初めて何とかジュエルシードの有りかを見つけた。

きつとそれを狙わないどどうにもならないであろう。

朝我「だが・・・俺一人じゃ・・・大技使わないと・・・」

そう言って俺は刀を両手で握る。

両手で握り、力を込める。

ユーノの支援にも限界がある。

俺一人でなんとかしないといけない状況か・・・つたく、最近のはなのはと一緒に戦ってたせいか、本気をあまり出さなかつたからな・・

だが、俺は一人じゃなかつた。

朝我「！？」

？？？「朝我さん！－！」

俺の後ろから近づく、桜色の閃光。

その柔らかな桜光はどんどん俺に近づいて・・・・・近づいて・・・・・  
近づいて・・・・・!?

なのは「朝我さああん!――!――!――!――!――!――!――!――!

朝我「ゴフッ!?

俺の腹部に桜光・・・もとい、なのはが速度を一切落とさずに抱き  
ついた。

おかげさまで俺は腹部からエビの様に曲がってしまった。

朝我「な・・・なの・・・は・・・?」

なのは「(めんなさい)、さつきは混乱してて・・・

いや、出来れば今の突進の事を謝つて欲しいんだけど・・・

なのは「でももう大丈夫です!」

ダメだ・・・今のことに関しては反省してない・・・

朝我「まあいい。もう大丈夫なら、手伝ってくれ」

なのは「うん…」

そう言って俺となのはは構える。

朝我「俺はジュエルシードへの道を作る。なのははその一本の道に  
撃ち抜く力を叩き込め！」

なのは「うん…！！！」

朝我「ユーノ。なのはの傍に…・・・いてやつてくれ

ユーノ「…・・・うん！任せて！」

フレットに任せつづて言われても…・・・だが、信用できる。

朝我「頼む」

そつ言つて俺は全速力で核であるジュエルシード目掛けて切りかかつた。

朝我

瞬間魔力換装

□

光を超える速度で向かうが、敵は無数の枝を俺に向けて鞭の様に放つ。

俺はそれを全て紙一重で避け続ける。

だが敵も対応が早く、枝を重ねて壁のよろづする。

朝我<sup>『</sup>護身破敵とともに、禍災を除かむることを請つ

四

だが俺は刃に焰を纏わせ、その壁目掛けて切りかかる。

朝我『神隠す十拳の如く火産靈び、火車來々、焰羅に送られん！』

全ては、後ろで桜光の魔力をチャージし、俺を信じてその場から動かず、砲撃の準備をしてくれる彼女が安心出来るように。

そして俺は切り裂く。

朝我「壱の閃！――！」

その一閃は枝で出来た壁は燃えるようにして切り裂かれたのだった。

だが壁は更に増え続ける。

俺は切り裂いた勢いを殺さず、そのまま全身を空中で回転させながら更にその壁に一閃を入れる。

朝我「式の閃！……！」

その一閃は先ほどの一閃よりも火力が高く、一瞬にして壁が燃え尽  
きる。

だが敵も対応が早く、更にまた壁が出来、俺はそれを先程よりも威  
力を高めて切り裂く。

朝我「参の祓！……！」

そしてその一閃でようやく核であるジュエルシードとそれに取り込まれたであろう二人の人がいた。

朝我「一人の願い・・・叶うことを探つてゐる」

そう言つて俺は全方向から迫る枝に対し、最大威力の焰の一閃を打

ち込む。

朝我『喰らえ

火天墜衝

！・！・！

そして俺は砲撃の準備を終えたなのはを呼ぶ。

朝我「今だ

なのは！――！――！――！――！

刹那

全ての枝が燃え盛り、灰となつて消えていった。

なのは Side

朝我さんが私を呼んでくれた。

なのは「朝我さん・・・凄い。私達も負けられないよー」レイジング  
ハート!!!!!!」「

その言葉に答えるよつこ、レイジングハートは桜色の光の翼をだす。

なのは「行くよーーー！レインジングハートーーー！」

そして私は溜めた桜色の魔力を遠くにあるジュエルシード田掛けて  
一直線に放つ。

朝我さんが作ってくれた道に、私は最大威力の魔力を入れる。

なのは「

！」

『ディバイン・バスター』

-----.

放たれた砲撃は曲がることなく一直線にジュエルシードを直撃して、

封印した。

そして海鳴市全体を覆っていた木は元通りになりました。

これで、一つの大きな戦いは終わりました。

でもそれは、これから続く戦いの中間地点程度なのかもしれません。

けれど、なんとなると思います。

前に出て戦ってくれる人。

後ろでサポートしてくれる人がいるから。

私は安心して立つていられる。

安心して砲撃の準備も出来る。

二人がいなかつたら・・・私はきっと、何もできない。

だから一人に会えて、本当に良かつたって・・・そう思います。

朝我「なのはー帰るぞー」

なのは「うん!」

ユーノ「二人ともお疲れ様」

朝我「ああ!」

なのは「うそ……」

だからいつか……もっと強くなつて、朝我さんを救へるよつて……  
・やうなりたいって思います。

朝我さんの近くに……いたいから。

## 温泉での出会い（前書き）

時は過ぎていくもの。

そんなことは分かってる。

けれど、それが怖いと感じることだつてある。

俺、朝我零はその一人。

この先の未来で、大切な人達が、命懸けの戦いをする未来を知っているからこそ俺は、時間が経つのが怖くなる。

そんな緊張感、偶には全て忘れて、のんびりと休みたい。

たつた一日だけ、24時間だけでいい。

俺を魔導士じゃなくて　　ただの普通の人。

魔法少女リリカルなのは　～全てを変えることが出来るなら～  
まります。

## 温泉での出来事

朝我 Side

「夢の中だ〜

？？？？？」はあああああああーーーーーーーー

俺は武器を手に、大人のなのはと共にサイドポニーの金髪少女と戦っていた。

なのは「があつーーーーーーーーーーーーーー

朝我「なのはーーーーーーーーーーーーーー

なのはは彼女の拳を防ぎきれずに殴り飛ばされる。

朝我「・・・〇〇〇〇〇〇、本氣でやるしか・・・手段は無いんだな」

そつ言つて俺は火車切広光でも無く、雷切でもなく、『薙刀』を出していた。

朝我「行くぞ

○ ○ ○ ○

俺は武器の名を呼び、一人の少女と戦う。

そして一人は最大威力でぶつかり合う。

そして決着はつき、俺は全身をボロボロにしながらも勝利した。

### 『聖王陛下反応ロスト・システムダウン』

だが、その場所は魔力無効化フィールドと化し、俺達は魔力を練ることができなくなってしまった。

今動けるのは俺だけ。

俺一人でなのはと彼女を背負つて逃げては・・・間に合わない。

そう・・・一人を、見捨てなければいけなかつた。

なのは「朝ちゃん・・・先に行つて」

朝我「！？ふざけるな！お前を置いて行けつてのか！？」

なのは「私は、大丈夫・・・後で・・・おい、かけるから・・・」

朝我「全身ボロボロの体でビリ追いかける気だ！？全員助ける！！」

！」

そう言つて俺は一人を背負い、全身の力を振り絞つて走り出す。

だが魔力も使えない俺は・・・歩く速度と変わらなかつた。

なのは「朝・・・ちゃん・・・私を・・・おい・・・て」

朝我「嫌だな！・・・俺は・・・好きな奴を置いて逃げたくない！？」

！」

なのは「えへへ・・・嬉しい・・・けど・・・」「めんね

こんな状況の中で俺は振られたんだ。

更になのはは・・・最後の力を振り絞つて、俺と彼女を押す。

朝我「なの・・・は・・・」

押された場所には足場が無く、そこに俺と彼女は重力に流されるようになってしまった。

「……」で俺は夢から目が覚める。

朝我「つ…………はあ…………はあ…………」

呼吸が荒い・・・

朝我「嫌な夢を見たな・・・？」

起き上ると俺は知らない部屋の布団に寝ていた。

畳に和風をイメージする部屋・・・

朝我「そつか。俺達は温泉に来てるんだったな

五月になり、ゴールデンウィークとなつたため、高町家と田村一家  
とアリサと俺を加えたメンバーで海鳴温泉へ一泊三日の旅行に出で  
いた。

着いたのが遅く、夜だつたために昨日は到着直後にすぐ寝てしまつ  
た。

俺も疲れていた。

というのも、この時間でアリサとすか達とは初対面で、彼女らは  
俺を見るやいなや『なのはの彼氏なの！？』と言つたりして俺とな  
のはは状況の修復に時間をかけた。

嬉しいのだが、流石に今はそんな考えは無い上に俺は10年後のはには振られているのでやつていつ事を考えたりはしていない。

その上なのはの兄貴さんが妙に反応して・・・俺と決闘がどうとか  
こうとか・・・

桃子さんが何とか止めてくれたが、決闘は何故か『旅行が終わった  
ら』と云つことになった。

なのはの兄貴さん・・・雰囲気や体つきからして、かなりの実力者  
だ。

まあ、やってみてもいいか。

朝我「さて・・・起きて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
？」

一瞬俺はフリーズした。

何故なら一枚の布団に・・・俺+・・・何と・・・将来『管理局の

白い悪魔』と呼ばれるので今は『白い小悪魔』と呼ぶ。

その小悪魔』と高町なのはが俺の布団で寝ていた。

しかも浴衣だけあって妙にはだけている場所があつたり・・・

朝我「まちー！ー！」

そつ思つた俺は毛布を首から下を隠すよつこかけた。

朝我「ふう・・第一の問題は解決」

さて問題は一つ・・・そして最大の問題。

朝我「俺はなのはこ

何もしてないよな?」

そう。問題はここなのだ。

俺はなのはの事が好きだ。

だがそれは10年後のはであつて今ののはではない。

しかし俺は夢で10年後のはのはを見た。

もしかしたらその時に“何か”した可能性がある。

ましい・・・」のままでは俺が『ロリコン』になってしまひ――――。

・・・え?『お前は既にロリコンだ!-』だと?

んなわけないだろ？

朝我「と、とにかく、部屋から出よっ!」

そう言つて俺はタオルを持つて湯に向かう。

それも全速力で。

朝我「ふう・・・

カポン・・と音が聞こえなかつなく、「のんびり出来る温泉。

朝我「やべ・・・気持ちいい・・・」

全身の疲れがゼット落ちていく感覚。

いやあ・・・スッキリするなあ・・・

朝我「ああ・・・じとなのんびり出来る時間・・・やっと出来たな・

・・

この時代に来てから俺は戦ひ田々・・・

未来を変えたために毎日色々やつてたからな・・・

「うつ向もしないでただのんびりと湯に使つのは久しづだ。

朝我「はあ・・・朝風呂つていいな」

温泉を早朝から入るこの幸せ・・・つて、俺は年寄りみたいだな。

・・・?

朝我「あれ・・・今・・・なんか感じた・・・魔力・・・」

それを感じた俺は風呂をあがる。

朝我「つたく・・・俺は心配性過ぎるな・・」

苦笑いしながら俺は服を着て、反応があつた場所に向かう。

なのは Side

私は朝起きると朝我さんがいなくなっていた。

昨晩、私は朝我さんと寝たかったので朝我さんの布団に入つて寝ました。

そして朝起きた私は朝風呂をするために廊下を歩きました。

? ? ? 「んー？ふむふむ…」

突如私の目の前に女性が現れて、私を見て、何やら頷き始める。

? ? ? 「君? 家の子をアレしてくれちゃつてるのは?..」

赤みを帯びた橙色の髪を背中まで伸ばし、翡翠色の瞳をした、私のお姉ちゃんと同い年くらいの人の言葉に、私はどうしていいのか分からなかつた。

なのは「え・・・えつと・・・」

「あんま賢そうでも強そうでもないし、ただのガキに見える  
んだけどな～」

私をジロジロ見て失礼なことを言う女性。

私はこの人何かしたかな・・・

朝我「あれ・・・なのは?」

なのは「朝我さん・・・」

浴衣姿の朝我さんが私のもとに来た。

朝我「そこの人・・・誰?」

「ふ～ん・・・」

なのは「??.??.?」

「ああ～」めん。私の知ってる子に似てただけみたい。「ごめん

「めん…」

そう言って笑顔で謝る女性。

よかつたあ・・悪い人じやなかつたあ・・

? ? ? 「それじゃね～」

そう言って彼女は去りうつとした。

朝我「待てよ！」

なのは・？？？「！？」

朝我さんは女性の首元に雷の刀を向けていました。

朝我「お前・・・何者だ？」

？？？「え？私はただの人で・・・」

朝我「普通の人は初めて会つた子に対して殺意を向けないんだが？」

？？？「！？」

え・・・わ、私、殺意向けられてたの！？

朝我「答える・・・お前は、“人ではない” そ�だろ

使い魔

使い魔？

なんのことだらう？

「…………へえ……私の正体、よく気づけたねえ」

朝我「当たりか……じゃ、お前はあの金髪の子……フロイトの使い魔か？」

「…………だとしたら？」

朝我「…………今は、何もしない」

そう言つて朝我さんは刀を左手に出た小さな魔方陣に入れました。

「…………敵に情けかい？甘いね……後で後悔するよ」

朝我「後悔か……だけど、お前には帰る場所があるだろ？」

「…………」

そつ言い終えると朝我さんは私の左手を掴んで歩きだした。

なのは「あ……」

朝我「また会うときは敵だらうな。けれど、俺はお前らを殺したりはしない。殺す理由がないからな」

そう言って朝我さんと私は女性から離れていきました。

アルフ「もしもシエイト？ こちらアルフ」

私はさつきの男性と子供から離れ、私の主に連絡をとる。

アルフ Side

フェイド「うん。どうだった？」

アルフ「彼女は問題ないけど、あの男性は危険。私の気配に気づいた上に、私の背後をとった」

フェイド「…？・・・そう」

フェイドも驚いた。

けれど私達は迷っていられない。

アルフ「でも、大丈夫。私がフェイドを守るから！」

フェイド「うん・・・ありがと、アルフ」

アルフ「それで、そつちはどんな感じ？」

フェイド「そつちは収穫無し。もうジレジュエルシーードを探してみる」

アルフ「うん。それじゃまた後で」

フェイド「うん」

やつらって私は念話をきる。

そして私は拳を握り締めて見つめる。

アルフ「そうだ。どんな奴が相手でも

奴は、倒す」

フェイトを傷つける

そう言って決意を改め、私はジュエルシードを探索し始める。

## 温泉での出来事（後書き）

守ると誓つ想い。

どんなに強い相手でも、守ると誓つた。

それが、使い魔の存在意味なのだから。

## 再び交わる雷 変えたい運命

フュイト Side

フュイト「へり…」

あれから日没まで山中を探し回った。

けれども簡単にはジュルシーは睨付からない。

ジュルシーが発動されしなければ小むく綺麗な宝石だ。

この広大な山の中から探し出すのは容易じやない。

そんなことば分かつてゐる。

けれど私は・・・どんな方法を使つてでも見つけ出すんだ。

「フュイト（だけど・・・中々見つからなこ。わつわつ、ここに小さな  
ジュルシーの反応があつたから来たのに・・・もつと範囲を広  
げてみるか・・・）」

？？」二三にいたか

フェイト

フェイト「…？」

後ろを向くと、私の名前を知る・・雷の刀を持つ男性がいた。

朝我「悪いな。なるべくこの場所に来るようジユエルシードの反応を出させたり消したりを繰り返させてもらつた」

フェイト「…？」

私は・・・あの人に狙われていた！？

結界魔法を使って私にこの場所を分からせたんだ・・・

フェイト「貴方は・・・何者なの？」

私の事を何故か知つていて、そして強い。

ただ者じゃないのは明白。

朝我「俺は誰も救えなかつた、無力な魔法使い・・・そんなどこだ  
らうな」

フェイド「無力って・・・私を倒したの?」――?

朝我「それは今のお前と俺とは見てきた世界が違う。簡単に負ける  
わけないだろ」

・・・悔しいけど、それは事実。

この人は強い。

・・・けど

フェイド「私は負けない・・・絶対に!」

そう言つて私はバルデイッシュを鎌の形にして構える。

朝我「・・・お前はあのジュエルシードを集め、どうするつもり  
だ?」

フェイド「・・・

私は答えない。

だって・・・あれを求めているのは、私じゃないのだから。

フェイト「はああああああーーーーー！」

私は彼に切りかかる。

朝我「・・・俺は、手伝つてやれないのか・・・」

そつ言つて彼も私に切りかかる。

私は

大切な過去を、取り戻すんだーーーーー！

なのは Side

なのは「...コーコー君...」

ユーノ「分かってる...この反応...すぐに向かおう!」

なのは「うん...」

私とユーノ君は朝我せんとジュールシードの反応がした場所に向かう。

なんで私には何も言わずに行っちゃったの...。

それに・・・どうして・・・こんな嫌な予感がするの?

何か……」これから嫌な事が起ころるかもしねりない。

朝我「はつーーー！」

フェイトが光速で切りかかる。

俺はそれを全て見切つて防ぐ。

だがフェイトは諦めず、光速で俺の全方向から切りかかる。

後ろ、左右、前方、上空、地上。

様々な方向から切りかかられるが、俺は全てに対応する。

フェイト「はあ、はあ、はあ・・・（さつきから本気で打ち込んでるのに・・・掠りもしないなんて、私の速度にここまで対応されるなんて・・・）」「

朝我「これで終わりか？」

フェイト「・・・まだ！－」

そう言ってフェイトは再び切りかかる。

朝我「・・・！？」

だが、俺とフェイトは動きを止め、地上を見る。

地上の川面から青い光が立ち上った。

この反応、間違いなくジュエルシード。

ジュエルシードを核として水は人型となり、水の巨人へと姿を変えた。

あれを倒すには雷切では駄目か・・・

そう思った俺は雷切を納め、火車切広光を出した。

「フェイト」「もう一本の・・・刀」

ああそりか。フェイトには初めて見せたな。

朝我「これが俺のもう一つの刀『火車切広光』。名の通り焰の刀だ」

こいつで蒸発させながら斬るとするか。

朝我「俺は奴を斬るけど、フェイトはどうする？」

フェイト「私も、あれを倒す」

なら・・・目的は同じだ。

朝我「行くぞ！」

そう言って俺は刀身に魔力を込めると魔力は巨大な焰へと姿を変え、そのまま焰の塊を地上にいる敵目掛けて放つ。

朝我『

『炎龍一閃』

！！』

上空からまるで焰の隕石の様に放たれた焰は水の巨人を包み込んで蒸発させていく。

俺が出来るのまゝまで。

朝我「後は フェイト…」

そつとフェイトはジュエルシードを封印した。

そして宙に光なく浮かぶジュエルシード。

朝我「ふう・・・

フェイト・・・

俺が安堵の息も漏らすとフェイトは俺を見つめる。

フェイト「何で私に譲ったの?」

朝我「俺は別にジュエルシードが欲しい訳じゃない。でもフェイト  
は手に入れないといけないんだろ?どんな事情かは知らないけど、  
命張ってるんだ。そんな奴にはちゃんと褒美はあげないとな」

そう言って俺は刀を魔方陣の中に納める。

そして再びフェイトを見つめて、右手をだす。

朝我「俺は

フェイトの力になりたい」

そう。もしフォイトの願いが叶えれば、未来が変わる筈。

だから俺はフォイトの味方になりたいと思つた。

フュイト Side

フュイト・・・

私は、差し出された手に、迷いを持った。

でも、それと同時に想いつことがいっぱいあった。

もしかしたら、この人なら私の事情が分かってもらえるかもしれない。

そしたら凄い心強いし、私は叶えられるかもしれない。

だけど・・・どこかでまだ、迷いがある。

この手を掴んで良いのかって・・・

裏切られるのが怖い。

裏切られるのが怖いなら、最初から関係なんて持たなければいい。

でも・・・・それでも、私は

フェイト「わ……私は……！」

朝我「！？」

だけど、私の答えは、私の使い魔によつて遮られた。

フェイト「アルフ！？」

アルフが、武器を持たない彼に殴りかかったのだ。

朝我

『瞬間魔力換装』

ブリューゲル・ブリッツ

』

アルフは彼に攻撃をしながら、私にさう言つ。

「フュイト」で、でも・・・

アルフ「フュイト・ジュールシードは確保したんだーー…それもどうやらかるよーーーー！」

彼は即ち止まらぬ速度で移動してそれを避けた。

今の状況なら・・・そつせざるを得ないけど・・・

？？？「朝我さんー・伏せてーーー！」

朝我「！？」

彼は少女の声に促されるように伏せると、桜色の砲撃が放たれた。

アルフは驚きながらも即座に対応して私の隣に向かう。

アルフ「ちつ！援軍か・・・」

朝我「なのはーーー？」

なのは「朝我さん、大丈夫？」

彼女は彼に声をかける。

・・・何でだろ？

あの二人を見ると・・・胸がチクチクする・・・

なんで・・・こんなに・・・怒り・・・みたいな感情がこみ上げてくるの？

朝我「俺は大丈夫。それより、俺はフェイトと話が・・・」

アルフ「話しなんて・・・させない！――！」

朝我「ぐつ――！」

アルフは彼の話しを無視して殴ると彼は両手でそれを受け止めるが止めきれずに地面に飛ばされる。

フェイト「アルフ！？」

アルフ「大丈夫・・・このくらいじゃ死なないって」

フェイト「そう・・・」

何で・・・安心したんだろ・・・

なんで・・・彼の事を考へると色々考へてしまつのだなつ・・・

アルフ「とにかく」は一端・・・

フロイト「・・・」

だなび私せこひで、ある事に気がつく。

ジユノルシードが、白いB-1を着る少女の近くへ近づいていた。

私は、それを取りにいく。

なのは「…させない！…！」

そう言って彼女も取りに行く。

私は負けない為に、バルティッシュを彼女に振るう。

なのは「！？」

彼女は対応出来ず、目を閉じる。

これで

・

・

・

だが

「ああああああああああああああ

私の刃から流れる血。

なのは「う・・・そ・・・」

その時、全ての音が消えた気がした。

時間が止まった気がした。

刃を受けたのは彼女ではない。

刃を受けたのは

朝我「ぐ・・・はあ・・・」

肩から腰にかけて切り裂かれ、血を出しながら力なく地上に落下していった・・・そう。

なのは「朝我わああああああああああああああああああああん!!」

彼女を庇つて、私に斬られた・・・朝我と言う男性だった。

## 再び交わる雷 変えたい運命（後書き）

運命は、最悪な道に進んでいる気がする。

二人の9歳の少女は、目の前で人がきられた所を、初めて目の当たりにした。

彼が居なければ、起こり得なかつた今。

だが、彼の参戦により 未来が、最悪の結果に変わつてしまつたのだった。

## 本当に知るべれいと

なのは Side

なのは「・・・」

昨晩の悲劇から時は経ち、今はお昼。

私は朝我さんの部屋で、ベットで眠っている朝我さんを見つめています。

もう・・・何時間経つんだろ・・・

昨晩、朝我さんは私を庇つて切り裂かれた。

私はジュエルシードを無視して、地上に落下していく朝我さんを助けました。

そしてすぐに戻つてユーノ君に治癒魔法をかけてもらいました。

朝我さんの傷は癒えましたが、意識が覚めません。

朝我「ぐ・・・う・・・」

そして何より、朝我さんは今・・・悪夢を見ているみたいなんです。

朝我さんは何かを掴もつと必死に手を伸ばしました。

朝我「い・・・や・・・・・なの・・・・・・なの・・・・・・は・・・

・・・

え・・・わ、私!?

朝我さんは私を呼んでいました。

朝我「逝く……な……なの、は……うう……」

必死にもがくその姿は、いつもの優しい朝我さんではありませんでした。

私は朝我さんが伸ばすその右手を両手で包み込んで、声をかけました。

なのは「私は……」にいます。だから……大丈夫、安心して……」

そう言つと、朝我さんの表情は柔らかくなつて、全身から力が抜けた、再びやすやす眠りにつきました。

なのは「ふう……良かつたあ……」

安堵の息を吐くと、お母さんとお兄ちゃんが肩にユーノ君を乗せて部屋に入つてきました。

桃子「なのは、朝我君……大丈夫?」

なのは「うん。まだ寝てるけど……ゆっくり寝てるよ」

恭也「なのはは大丈夫か?」

なのは「うん。大丈夫」

桃子「そう。最初はビックリしたわよ、先に朝我君は家に戻つてたうえに徹夜してぐつすりなんて」

「そつ。家族皆こまやかに言つてあるんです。

朝我さんと私とコーノ君が、魔法を使つ事を隠すために。

桃子「・・・そつ。それじゃお粥、ここに置いておくわね」

「そつ言つてお母さんはお盆に乗せたお粥を卓袱台の上に置いて私の隣に来て朝我さんの顔を見ました。

恭也「初めて見るな。彼の無警戒の姿」

「なのは」「え?」

お兄ちゃんがそつ言つて私達に言いました。

恭也「彼を一目見て思つた。彼は沢山の者を失つてる。そして、一度と失わない為に、日々緊張感や警戒心を持つて過ごしている・・・。それはきっと、全ての時間でだと思つ」

「なのは」「そんな・・・」

桃子「そつね。確かに今の朝我君の表情は、いつも見ていた朝我君とは全然違うわ。安心してるつて表情ね」

なのは「安心・・・」

朝我さんの過去に・・・何があつたんだろ・・・

・・・といつか私は朝我さんのこと・・・全く知らない。

一緒に戦つてきて・・・一緒に住んで、それでも私は・・・朝我さんの事を、何も知らない。

朝我さんの事を知れば私は・・・朝我さんの役に立てる筈なのに・・・

でも、朝我さんはきっと私には何も教えてくれない。

それは、朝我さんが優しい人だから。

だとしたら今、私に出来る事は・・・

少しでも朝我さんを安心出来るように強くなつて、いつか朝我さんの背負うものを降ろすこと。

昨晩の戦いで、私は一人の男性を切った。

私は朝から一睡もせず、部屋で待機状態のバルディッシュを眺めていた。

アルフ「フェイト・・・」

フェイト「・・・」

フェイト Side

言い訳になるけど、私は彼を切るつもりはなかった。

それも、あんなに深く・・・

ただ白いB<sub>3</sub>を着る私と同年代の少女にかすり傷程度の切り傷をさせる程度だったはずだった。

なのに私は・・・彼に恩があるのに、傷つけてしまった。

私、本当に最低だ。

フェイト「アルフ・・・私、どうすれば良いかな？」

私は・・・どうすれば良いのか分からぬ。

だからアルフに聞いてみた。

アルフ「あいつは敵だよ？ 敵の心配は必要ないさ」

フェイト「敵・・・」

その言葉に私は違和感を持つた。

それはきっと、彼が差し出した右手だった。

もしあの手に迷いを持たなければ私はきっと、彼を傷つけなかつた。

・ あの人、朝我つて言つたかな。

朝我・・・私の事、許してくれないよね。

私はやっぱり、アルフと一緒に全てを成し遂げるしかないよね。

フェイト「アルフ、行こ」

アルフ「うん！」

そう言って私とアルフはジュエルシードを探しに行く。

だが、俺は記憶が曖昧だ。

俺はベットで寝ている。

見覚えがあるなと思い出すとそこには俺がお世話になつてゐる高町家の  
俺の部屋だった。

朝我「・・・ん」

田を覚ますと天井が見える。

朝我 S.i.d.e

確か俺はフェイトとアルフと戦つて

切られた。

そう思い出した俺は自分の胸に手を当てる。

朝我「包帯が巻かれてる・・・既に傷はない・・・」

ユーノの治癒魔法で助けてもらつたってところか。

なのは「すう・・・すう・・・ふみゅ」

朝我「なのは・・・」

そして俺のベッドに体をあずけてスヤスヤと寝ているのは間違いない  
くなのまだ。

首にはレイジングハートが着いている。

レイジングハート「お田覚えですか？」

レイジングハートが点滅しながら俺に声をかける。

朝我「ああ。バツチリだ、今からでも戦える」

レイジングハート「それは良かった。マスターはとても心配しておられました故」

朝我「なのはが？・・・って、そりやそうだよな・・・

なのはとフロイトには・・・辛いものを見せてしまったな。

人が切られる姿。

血を流して倒れていく姿。

そんな姿を、9歳の時に見せてしまった。

朝我「・・・!？」

だが、後悔する時間よりも、ジュエルシードの反応が俺に襲いかか  
つた。

朝我「つたく、復帰直後に出撃つて・・・六課にいた時よりハードだな・・・」

レイジングハート「六課とは?」

朝我「・・・“いつか”分かる」

そう言って俺は布団から起きてなのはを布団に寝かせて毛布をかけて部屋を出る。

朝我「レイジングハート。なのは主を頼む」

レイジングハート「了解しました、朝我様」

そう言って俺は家の窓から飛び降りて飛行魔法で空を飛び、光を超える速度で進む。

朝我

瞬間魔力換装

□

ブリューゲル・ブリッツ

夜のビルが立ち並ぶ街中、魔法使い以外は入れない結界の中に俺は入り、地上に降りる。

そこには金髪でツインテールの少女が、武器を構えて立っていた。

フェイ特「あ・・・あの・・・」

おどおどした様子で俺に話しかけてきた。

フェイ特「あの・・・怪我・・・大丈夫・・・ですか?」

朝我「え・・・ああ、大丈夫。治癒魔法かけてもらつて一日中寝てたら快調だね」

そう言つとフェイ特は安堵の表情を浮かべる。

フェイ特「良かった・・・あの時は、『めんなさ』」

朝我「謝る必要はないさ。あの時はフェイ特だつてああする他なかつた。俺だつてきつとフェイ特と同じことをしていたさ」

「フュイト……ありがと」

朝我「ああ……それ『はあああああ……』……雷切」

それは上空から殴りかかってくるアルフの拳を刃の側面で防ぐ。

「フュイト」アルフ……

アルフ「フュイト……」このことは奥から卑くジユエルシードを  
「！」

「フュイト……」

フュイトは申し訳なげな表情をしながらジユエルシードの反応  
があつた場所へ向かう。

そう言つてアルフは渾身の拳を俺に放つ。

朝我「……………ひぞけんな」

アルフ「！？」

だが俺はそれを右手で掴む。

アルフ「くつ・・・」

アルフは必死に俺の手から離れようと/orするが俺の握力に離れることが出来なかつた。

アルフ「！？」

朝我「ふだけんじやねえぞーーーーー！」

俺は怒りを露にする。

朝我「フェイトを惑わす？お前には見えないのか！？フェイトが・・・  
・ 独りで誰も幸せにならない戦いを続けていることに！-！-！」

アルフ「フェイトは独りじゃない！」

朝我「<sup>おまえ</sup>使い魔がいるってのか？」

アルフ「ああそいつを……！」

朝我「だつたら……何で手を差し伸べてあげないんだ！？あいつは今にも死にそうな……そんな危険な場所にいる。ちょっとしたショックで全てが崩壊するような……そんな場所にあいつはいるんだぞ！？それなのにお前は……お前は他人が差しのべる手を自ら否定してフェイトを殺そうとしてるんだ！！！！どうしてそれに気づかない！？お前は使い魔だろ…………！」

アルフ「あんたに……あんたなんかに、フェイトの何が分かるんだ！！！！！」

そう言つてアルフは回し蹴りを繰り出す。

朝我「俺は 何も知らないよ。フェイトの事、知ってるよう  
で実は何も知らない。そのせいで俺は 失ったんだ」

そう言って俺はしゃがんでアルフの蹴りを避けて懐に雷の一閃を繰り出す。

その一閃を喰らったアルフはショックで氣絶する。

朝我「分かつたら、きっとフェイトを救える。だから俺は、知りたいんだ。フェイトが一体どんな人で

何を背負つて生き

てきたか」

やつて俺はフロイトのもとへ向かう。

そこには既になのはがいて、フロイトと戦っているのだった。

本当に知るべき」と（後書き）

分かつてあげたい。

皆が何を背負っているのか。

それを知れば、俺は運命を変えられたに違いないから。

運命を変えて・・・誰も失わない世界に進みたいから・・・

## これから

朝我 Side

俺はアルフとの戦闘を終え、ジュエルシードの近くに向かうと、なのはとフェイドが夜の空を飛び回っていた。

お互いの魔力弾・槍を放ち、お互いにそれを避ける。

そしてお互いの砲撃を放つてぶつかり合ひ。

お互いに一歩も譲らぬ対決となっていた。

朝我「なのは・・・強くなったな」

最初の頃はフェイドに完敗だったなのはがこの超短期間でフェイドと互角に渡り合えるまでに成長している。

それは彼女の素質もそうだけど、それよりも何より、決断しているからだと思つ。

人は想いの強さで、いくらでも成長できる。

そして今のなのはは、もっと強くなる。

この戦いを終えて、また一つ強くなるだひつ。

だが、二人の間に割り込むよつにして、ジユエルシードは空高く、  
その力を発現させた。

朝我「この膨大な力・・・次元震が起ころる！」

そんなことをお構いなしになのはトフュイトはジュエルシードに突つ込む。

朝我「二人とも・・・駄目だ！――！」

俺は必死に声をだす。

だが時既に遅し。

なのは・フュイト「――？」

二人のデバイスはジュエルシードの強力な力によってヒビだらけになつた。

そして二人は衝撃波によつて飛ばされる。

なのは「ぐううつ・・・・・」

フェイト「バルディッシュ・・戻つて」

そう言うとバルディッシュは待機モードになり、フェイトはジュー  
ルシードに向かつて飛ぶ。

そしてフェイトはジューエルシードを両手で掴んだ。

朝我「まづい！・・・！」

俺は即座にフェイトのもとにいく。

フェイト「ぐうううううううう・・・・・・・」

フェイトは苦しみながらも必死にジュエルシードを抑える。

朝我「ぐ・・・」

フェイト「朝我！？」

俺はフェイトの手を包み込むように握った。

俺にも走る激痛。

朝我「ぐ・・・止ま、れ・・・止まれ・・・止まれええええ  
ええ！――！」

そう言つて俺は全身の魔力をジュエルシードに叩き込む。

朝我「これ以上、俺の大切な人を  
あああ――――――！」

苦しめんなあああああああ

フェイド「…?」

その魔力に、俺は想いを込める。

俺が今まで変えられなかつた運命を変えるのを邪魔させる奴は絶対に倒すと誓い。

朝我「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

フェイト「・・・」

それから数分、どうにかジュエルシードは静まってくれた。

朝我「はいこれ」

そう言つて俺はフェイトにそのジュエルシードを渡す。

フェイト「な・・・何で・・・また」

朝我「今回なお前の手柄だ。だったらお前が持つてけ」

フェイト「・・・」

そう言つと俺は立ち上がり、なのはのもとに向かう。

朝我「今日はこのくんこじといふ。お互に武器が万全になつてから・・・また」

そう言つて俺はフェイトと別れる。

そしてフェイトはアルフを連れてその場を後にした。

朝我「なのは、大丈夫か？」

なのは「う、うん。それより朝我さんはどうなの？昨日の傷・・・」

朝我「ユーノのおかげで大分良くなつた。あと、なのはが看病してくれたおかげでな」

やつてなのはの頭を撫でる。

なのは「ふにゃ・・・」

朝我「さて、やつと家に戻つてレイジングハートの修復だ」

なのは「うそ」

だが、この戦いで発生した次元震は、次元航行中の戦艦を、魔法の文化の無い地球上に送り込む結果となるのだつた。

そして家に戻った俺となのははユーノと共に今後の活動の話しをする。

朝我「次元震の発生・・・か

ユーノ「どうかしたの?」

朝我「いや、なんか・・・嫌な予感がしてな」

ユーノ「・・・」

それはユーノも感じている様子だった。

そう、何かが近づいている気がする。

なのは「??.?.?.?.」

なのははさりぱりみたいだけどな。

朝我「取り敢えず」からは今回の反省点を踏まえて、慎重に行動しないとな。なのはみたいに突撃思考も少しは考えないとな

なのは「うう・・・」めんなさい・・・

じと皿でなのはを覗くとなのはせしゅんとして謝った。

朝我「（六課じゅ、俺がなのはに謝つてばかりだつたのにな・・・）

「

そう思い出すと、不思議な感覚だつた。

ユーノ「ジュエルシードは相手側と僕たちの方でも少しずつ集まつてきてる。これからは一層戦いが激しくなるかも知れない」

朝我「確かに・・・」

結局、俺たちとフロイト達は最終的にはどちらがジュエルシード全てを持つかで争わなければならなくてのは分かつている。

それは決まった運命である。

・・・その運命を変える方法は・・・いや、この戦いを無くしたら、何かを失うんじゃないかな？

だとしたら、無闇に全てを変えるのは危険か・・・

・・・てか、今だに管理局が動いていないのが気になるな・・・

これだけ俺達の戦闘があつたに加えて今回の次元震だ。

誰も何も動かないなんておかしい。

だとしたら・・・もうすぐ、来るか・・・

そしたら俺は  
いのだろう。

管理局とフェイ特の味方をすればい

俺は機動六課の魔導士だった。

階級は2等空尉だった。

なのはとフロイドより一階級下だ。

元々は管理局で囑託魔導士をやっていたのだが、何があつてか俺の名前がハ神はやての耳に入つたらしく、俺を採用することになった。

そつ。結局は俺は管理局の人間だとことじつことだ。

この時代は違うが・・・それでも俺自身がそうであることは変わりない。

だとしたら、この先必ず介入していくであろう管理局。

そしてきっと叶えたい願いの為に精一杯のフロイド。

俺はどちらの味方をすればいいのだろう・・・

なのは「朝我さん、大丈夫?」

朝我「え・・あ、ああ、病み上がりだからちょっと疲れた。今日はもう、寝るな」

なのは「あ、はい。それじゃ、おやすみなさい」

朝我「ああ、おやすみ」

そう言って俺は自分の部屋にまどりのだった。

朝我「· · ·」

そして俺はなのはのデバイスが治るまでの数日、ずっとそのことを  
考え続けるのであった。

## 「ラボの章」白き修羅&IKKA（前書き）

今回は毎度お馴染み白き修羅先生との「ラボ」です。

TPP問題があろうとも、一次創作を諦めないで頑張りつー！

## 「リボの章」白鬼修羅&IKKA

朝我 Side

朝我「・・・」

俺は海鳴公園で一人、仰向けで空を見ていた。

とこうのも、今日は平田でなのはは学校に行っているため、俺は何もやることがないのだ。

翠屋の手伝いと思ったのだが、今日は桃子さんに用事があったため、店は休みで店は誰もいない。

・・・つまり、暇なのは俺だけ。

朝我「あれ・・・俺つてもしかして・・・」

仕事なし。学業なし。・・・やることなし。

朝我「・・・」

ああ・・・なんか凹む。

翠屋で本格的にバイトするのも良いかな・・・

朝我「この時代に飛ぶ時に計算するのを忘れていたな・・・」

まさかタイムスリップすると一ートになるとは・・・

朝我「・・・ジユエルシード・・・見つからしないな・・・」

それがもう一つの謎み。

ジユエルシードの反応は、まるでなのは達の復帰を待つかの様に反応なし。

海鳴の捜索範囲をもつと拡大させて、海鳴の隅々まで調べないと駄目か・・または海鳴以外の場所にあると考えるか・・・

朝我「まあどうせよ、レイジングハートの復活を待たないことにには、こちひも動けないか・・・」

そつとて溜息をつくと、俺は口を開じて昼寝をしようとした。

？？「あれ・・・朝我！？」

俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

朝我「え・・・その声」

俺は起き上がりつて声の主を見た。

？？「ああ、やつぱり朝我じゃないか！？」

朝我「龍牙！？」

俺と紅き修羅は再会した。

朝我「お前、どうしてこの時代せかいに?」

龍牙「ああ、まあ・・・色々とな」

朝我「?」

龍牙の意味深な言葉にはてなマークが出る俺だつた。

龍牙「てか、お前も何でここにいるんだよ?お前は六課にいるんじやなかつたのか?」

朝我「まあ・・・」

龍牙「?」

今度は龍牙がはてなマークを出してしまつた。

龍牙「まあ、久しぶりに会えて嬉しいな」

朝我「ああ。俺も、お前に会えるなんて思つてもみなかつたからなあ・・・」

そう言って俺と龍牙は過去を思い出す。

## 回想

これは俺、朝我零がまだ六課に入る前の・・・未来の物語。

皆もご存知の通り、スバル・ナカジマ、ギンガ・ナカジマの一方が被害にあつた、空港火災事故があつた。

その事故に俺も救出に参加していた。

いや、ほんとは無関係者だったのだが、空港に“待ち合わせしている人”がいたもんで、その人の降りた空港が災難なことに火災現場だった。

まあ待ち合わせしていた人は実力はあるので心配はないのだが、迎えに行つてたのでついででつてことになった。

だが待ち合わせしていた人は空港から脱出していたらしく、俺はそれを知らないまま避難が遅れた人の救出をしていた。

その空港火災の時、俺は龍牙に出会った。

朝我「誰かいませんかあ！――！」

崩れた岩を畝切で切り裂きながら進んだ。



『機神双獸擊』

朝我「な！？」

突如目の前を、獣の形をした何かが通つて、その後に一人の男性が姿を現した。

？？「お前は？」

朝我「俺は朝我零」

龍牙「俺は時空管理局『特務機動隊』隊長。真崎龍牙中将だ。よろしく」

それが、俺と龍牙の出会いだった。

龍牙「なるほど。つまり朝我は友人探しの為にここに来て、偶々ここにいたと？」

朝我「ああ。だけど・・・この時期に火災・・・それも空港って・・・」

龍牙「ああ。“不自然”だと、俺も思う」

俺と龍牙は共に救出作業を続け、作業が終わると二人で話し合つていた。

龍牙「今回火災が発生した空港の設備は完璧だった。だが、俺たちが出動せざる事態になつた」

朝我「問題はそこだ。俺たちが出動する程危険な火災が発生出来るのか？それも、質量兵器などが無しでだ」

疑問は、更に疑問を生んで、俺たちは悩み続けた。

今回の空港火災事故は『事故』として終わらせるのは間違っている気がしたからだ。

龍牙「まあそのへんは俺らの方で何とかするさ。協力ありがとな」

朝我「いや、いやいやいや」

やつらひつりお互いに握手して、俺達は別れた。

回想終了。

朝我「結局、あの事故の事は原因不明のまま・・オレらは終わったな」

龍牙「こつちはまだ調べ中。まあこの世界に来たから、それを調べる必要が無くなるけどな」

朝我「・・・俺が、無かつた事にすればいいってことか?」

龍牙「そこはお前に任す」

そんな会話をしていると、俺はふと気になつた事を口にする。

朝我「お前つて今、どこの住んでるんだ?」

龍牙「俺は“別の世界”的ハ神はやての家に居候してゐる」

朝我「・・・は!?

物凄く驚いてしまつた。

え？ なんで？ ナンテナノカナ、セツメイシャガラナイトオハナシシ  
ヤガリマスヨ？

龍牙「そ、そんな怖い顔で聞くな（ - ー - ） 説明するから」

俺は龍牙から今までの話しひを聞いた。（詳しく述べて…じ  
やなくて白き修羅先生の作品見ないとわからなによ）

朝我「ホントに色々あつたんだな」

龍牙「ほら、俺が説明したんだから、お前も説明しろよ。お前の今  
日までを・・・」

朝我「・・・ああ」

少し考え、そう答えて・・・俺は話した。

朝我「俺の世界では、『高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、ヴィータ』の4人が死亡した」

龍牙「な……！」

俺の一言に、龍牙は驚きを隠せずにいた。

それでも俺は話しを続ける。

朝我「その後、俺はこの時代に飛んで……今、ジュエルシードを集めてる」

龍牙「ジュエルシード……」「

龍牙にとつては懐かしくして色々な事の始まりだった・・・ジュー  
エルシード。

朝我「俺・・・知らなかつた。なのはもフュイトもはやても・・・  
皆、幸せに生きてきた訳じやないんだつてこと・・・大切なものを  
失い続けてきたことを・・・」

龍牙「・・・そうか」

俺の表情を見てか、それとも俺の話しを聞いてか、龍牙はそれ以上  
聞いてこなかつた。

朝我・龍牙「・・・」

お互にあまり良い空氣では無くなり、無言状態になる。

だが、その空氣を碎いたのは龍牙だつた。

龍牙「気晴らしに、戦わないか?」

朝我「え?」

龍牙「どうせこの世界で本氣とかあまり出してないんだろう? 気分転  
換に一発どうだ?」

ニヤリと、でもなにか考えている訳でもなくて、ただ純粹に手合わせした表情を彼をした。

だから俺も、それを受け入れた。

朝我「ああ。良いだろ?」

そう言って俺と龍牙は空へ飛んだ。

雲の上に立つ様に浮き、俺たちは一定の距離を保つて向き合つ。

俺は左手に小さな魔法陣をだして唱える。

朝我『牡蠣かけ闇す総光の門 七惑七星が招きた』『長いわあ  
ああ！……！』『つわつ！？』

龍牙は待ちきれなかつたのか、唱えてる最中の俺に殴りかかつた。

俺はギリギリで避けて距離をとる。

朝我「ちよつと待て……せめて武器を出させりよ……」

龍牙「うつせり……お前の祝詞長すぎて読者が飽きるんだよ……！」

そう言いながら龍牙は物凄い速度で殴りかかる。

俺はそれを避け続ける。

朝我「読者とか気にしてたら……俺が負けるだろアホ！……！」

そう言つて俺は龍牙の右拳を左手で掘んで右手で殴りかかった。

龍牙はそれを左拳を放つてぶつけ合つ。

そしてお互に距離をとつて俺は再び魔法陣をだす。

朝我「由来艸阜の勢 文曲零零、急ぎて律令の如く成せ

」

龍牙「だから、長いつて……！」

そう言つて龍牙は俺に殴りかかった。

だが俺は龍牙の拳を避けながら祝詞を唱えた。

龍牙「何！？」

朝我『 千歳の儀、雷切！』

そして俺は雷切を取り出し、龍牙に切りかかる。

龍牙「せいつ……！」

朝我「！？」

だが龍牙は拳に魔力とは別の何かを纏わせて刃と拳をぶつけた。

そして龍牙は体を回転させて回し蹴りを放つたので、俺は素早く後ろに下がって刀を構え直す。

朝我「龍牙。お前の出してるそれ……なんだよ？」

龍牙「俺の纏つてるこれは魔力じゃなくて『霸氣』だ。霸氣は变幻自在でな・・・こんな風に・・」

そう言つて龍牙は霸氣を獣の様な形状にして、俺に放つた。

龍牙

『』

機神双獸擊

『』

！！

迫る獣に対し、俺は抜刀術の構えをとり、蒼き雷を集めた。

朝我

『千鳥一閃』

! !

巨大な雷と巨大な霸気がぶつかりあつた。

朝我「・・・」

俺は髪の毛が丸焦げ・・・

龍牙「・・・」

龍牙は髪の毛全部が電気でボツサぼさに跳ねていた。

龍牙「……どうだ？ 気晴らしになつたか？」

朝我「まあな。少しは本氣出せたし・・・偶には良いな。本氣つてのも」

龍牙「そうだろ？ なのはとかはいつだって全力全開で困るけどな」

朝我「全くだ」

そう言って笑い合ひ。

龍牙「そんじや、俺は仕事に戻るかな」

朝我「ああ。頑張れよ」

龍牙「それはいつのセコフだ。変えなきゃいけない・・・未来があるんだろ?」

朝我「・・・」

龍牙「だつたら恼んでる暇なんて、無いだろ? 本当は過去なんて変えていいもんじやない。それをお前は変えようとしてる、変えることが出来る。だつたら迷つ必要なんてないだろ? お前のやりたいようこやればいい」

その言葉が、深いほど俺の中に響いた。

龍牙「お前の創りたい未来を作ればいい。世界は、お前の行動次第でいくらだつて変えることが出来るんだから。ただ、どうすればいいかって考える時間が短いんだ。だとしたら、お前が今まで経験してきたことの全てを思い出せば良い。後は・・・体が勝手に動いてくれるから」

朝我「・・・お前、その若さで何おつかと臭い事言つてるんだよ」

龍牙「つむねせえ」

やつ置いて龍牙は去つて行つた。

朝我「・・・ま、頭ではわかってるんだけどな・・・」

やつ置いて俺が家に帰る頃には、世界は夜になつていた。

現在を変えて、未来を新たに作る。

それが朝我が目指していること。

迷つてなんかいられない。

失つた悲しみがあるから。

だから、迷う必要はない。

朝我「さて・・・行くか」

そつまつて、ジュエルシーードを探しに向かう。

“一人の少女”と、過去に囚われた一人の悲しき女性を救つ為に

「ハボの章」白毛修羅&IKAKU（後書き）

IKAKU「更新遅かったですけどいかがでしょ？…」（ビザ顔）

相良「うわ・・ウザ」

朝我「これは確かに・・・ウザイな」

IKAKU「朝我にも言われたよ」――「

## 助ける理由 助けたい理由 前編

フェイト Side

フェイト「うひ・・・ひ・・・ぐあ・・」

高次空間内に浮かぶ要塞『時の庭園』の玉座の間に、私はいた。

？？？？「たつたの四つ。これは・・・あまりにも酷いわ」

そう言って、私は魔力のロープで両手を縛られ、宙に吊された私を見据える。

フェイト「ぐ・・・じめん、なさい・・・母、さん」

この人が私の、母さん。

プレシア「フェイト、あなたは私の娘。大魔導士『プレシア・テスタロッサ』の一人娘」

私の正面に立つた母さんは、私の顎を持ち上げ、瞳を覗き込む。

プレシア「不可能なことなどあつては駄目。どんなことでも。やつ、どんなことでも、成し遂げなければならぬの」

母さんは私の心に刷り込むかのように、ただひたすら言葉を紡ぎ続ける。

フレシア「こんなに待たせておいて、この程度の成果では、母さんは笑顔あなたを迎える訳にはいかないの。わかるわね？ フェイト」

フェイト「・・・はい、わかります」

フレシア「だから、覚えて欲しいの」

その声と同時に、母さんの握る杖が、鞭へと姿を変える。

フレシア「もう一度と、母さんを失望させないよう！」

そう言つて母さんは鞭で私の全身を傷つけ始める。

それは、私への罰。

私は、母さんをやられることで、罪を償うしかない。

私と母さんの目的の邪魔になつてるのは、間違いなくあの男・・・  
朝我だ。

あの人に、私は一度も勝てた事がない。

それに、あのを本気にさせる」ともできないなんて・・・

このままじゃ、母さんの期待に答えられない。

フレシア「起きなさい」

いつの間にか気を失つてしまつていたのか、その一声に私の意識は覚醒する。

フレシア「ロストロゴギアは、母さんの夢を叶える為に、どうしても必要なの」

フュイト「……はい……」

私は、母さんの目的を知らない。

知る必要がないのかかもしれない。

けれど、私は取り戻したいんだ。

“あの日々を”

朝我 Side

朝我「レイジングハートはもう大丈夫なのか?」

なのは「うん。もう全開で動けるよ。」

それは何よりだ。

レイジングハートもレイジングハートで凹んでたからな。

朝我「つて事は・・・そろそろジュエルシードが動くか・・・」

ユーノ「朝我。その予想は当たりだよ、今さつきジュエルシードの  
反応があつた」

ほら来た、予想通り。

文字通りシナリオ通りってどこか。

朝我「よし。行くぞ！」

なのは「うん！」

そつと聞いて俺達はジュエルシードのもとに向かう。

今回のジュエルシードは大木だった。

木に埋め込まれたジュエルシードに呼応し、枝を腕のように振り回

している。

そこには既にフェイトがいて、無謀にも一人で戦っていた。

朝我「フェイト！？！」

俺は火車切広光を出して俺たちに迫る枝を切り燃やしながらフェイトのもとに向かう。

フェイト「朝我！？」

フェイトは驚いて俺を見る。

だが、その隙に枝がフェイトの死角から迫る。

フェイト「つー？」

気づいたときには既に避けるには間に合わない。

朝我「フェイト！？」

今ままじゃフェイトの命が！？

・・・でも

朝我「絶対に助ける。俺が

必ず！！！！」

そう言つて俺は火車切広光を左手の魔法陣に納め、その魔法陣から  
新たな刀を出すために祝詞を唱える。

朝我『牡蠣かけ闇す総光の門』

』

俺は静かに、瞬間魔力換装を発動させながら唱える。

朝我「七惑七星が招きたる、由来艸阜の勢

』

そして魔法陣から柄が姿を表す。

蒼く染まるその柄を、俺は掴む。

朝我『破軍零零、向いて我が手に帰還せよ

』

「フュイトーー?」

その瞬間、フュイトのと俺はいた場所がお互いにチェンジされた。

俺は迫る枝を切り裂く。

蒼き刃が、姿を現して

朝我『千歳の儔、

蜻蛉切とんぼきり

四

四尺もの長く、青みがかつた刃に、蒼き柄の刀。

刃はまるで鏡の様に、周りの景色を写し、刃が見えずらしい。

フェイト「今……何が……」

何が起こったのか理解出来ないフェイトに理解できたり話す。

朝我「俺のこの刀、蜻蛉切は刃に写った場所と俺の居場所を交換する事が出来る。それが第一の能力」

説明していると6本の枝が俺を覆う様に迫る。

フェイト「危ない！！！」

フェイトが声をかける。

朝我「安心しろ。蜻蛉切のもつ一つの能力を見せてやる」

そつ言つて俺は刃に迫り来る全ての枝を吹き飛ばした。

そして

放つ。

朝我『結べ

蜻蛉斬り！！！』

そして俺はフェイトの背後に現れ、背中を合せて武器を構える。

その刹那、全ての枝は切り裂かれる。

だが俺は、まるで何事もなかつたかのように立っていた。

フェイト「何が……」

なのは「凄い……」

朝我「

蜻蛉帰り

「

フェイト「つー?」

朝我「これが蜻蛉切の2つの能力だ」

まず一番最初にフェイトと俺の場所を入れ替えて、最後に俺がフェイトのもとに向かった技は『蜻蛉帰り』

蜻蛉切の刃に[写]ったものと俺の位置を入れ替えると、俺自身を入れ替えた場所へ帰らせる技。

簡単にいえば転移魔法に近いものだ。

そして攻撃に使った『蜻蛉斬り』は、刃に[写]った対象を全て切り裂く事が出来る技。

刃に[写]るものであればなんでも切ることが出来るが、幽靈や魔力を切り裂く事はできない。

更にはロストロギアを切り裂く事も出来ない。

性能が良い刀なのだが、転移何かの繰り返しをし過ぎると体力を多く消費してしまう。

朝我「さて、説明は済んだ。後は

奴を切り裂くぞ」

フェイト「……うん！」

俺とフェイトは背中を合せ、武器を構えて、大木に向かつて切りかかる。

フェイト「プラズマランサー・・・ファイア！－！－！」

そう言ってフェイトは雷の槍を5発放つ。

俺は槍の先頭を突き進む。

大量に迫る枝。

俺は蜻蛉切の刃に枝ではなく俺自身を[写]す。

』

俺は数秒前にいた場所に戻つてそのまま突っ込む。

全ての枝は雷の槍とぶつかり合つて消滅する。

俺はその隙に蜻蛉切の刃にジュエルシードを巻き込んだ大木そのものをして放つ。

朝我<sup>アサガ</sup>止めだ

結べ、蜻蛉斬り

！！！  
四

刹那、大木は全て粉々になるまで切り裂かれて消滅する。

そしてジュエルシードだけがその場に残つた。

朝我「・・・」

俺はジュエルシードと蜻蛉切を魔方陣の中に納めて、フェイトを見つめる。

フェイト「・・・」

そしてなのはが遅れてユーノを肩に乗せて来る。

なのははフェイトを見つめる。

フェイトもなのはを見つめる。

俺は一人の間に入るよう立ち、話す。

朝我「フェイト。俺たちに、全てを話してくれないか？」

フェイト「それは、出来ない。私はただ、譲れない想いがあるから」「譲れない想い・・・九歳の少女の決意は、とても大きなものに感じた。

なのはも、自分の想いを伝える。

なのは「私達だって譲れない。だって  
イトちゃんの想い・・・駄目?」

知りたいから。フェ

「フェイト」・・・

フェイトは、その質問に答えるように無言でバルディッシュを鎌にしてなのはに向ける。

なのは「・・・分かったよ。私が勝つたら、聞かせてもらひから

「フェイト」・・・

俺は一人の邪魔をしないように、少し一人から離れる。

俺は、フェイトを救いたい。

けれど、俺にフェイトの想いを開かせる力がない。

それは、10年経つても親友の想いが消えなかつたなのはしかいな  
い。

俺には・・・出来なかつた事だから。

なのは・フ・ハイト」・・・・・

そして二人は同時に突っ込む。

『ストップだ！！！！』

だが二人の対決は、二人の中心部に出来た水色の魔法陣をだす一人の黒いB」を着た少年によつて妨害される。

朝我「あいつは……」

転移魔法によつて突如として現れたその少年は、左手でバルディッシュを掴み、右手に握った杖でレイジングハートを止めた。

鋭い視線で俺達三人を見据えるこの少年は

執務官。

朝我「遂に・・・来たか」

俺は・・・決断することになる。

クロノ「時空管理局執務官』クロノ・ハラオウン』だ。詳しい事情を聞かせて貰おうか

管理局のおれ人間は、フェイトの味方をするか、管理局の味方をするか。

どちらかを

決断しなければならなくなつたのだ。

## 助ける理由 助けたい理由 前編（後書き）

今回登場した武器、蜻蛉切の説明。

そもそも蜻蛉切は刀ではなく『槍』ですが、この作品はオリ武器として、刀にしてみました。

技は・・・ホライゾンのパクリです。

蜻蛉切は基本的にはカウンター専用の刀なのですが、今回は大木の放つ枝の数が半端なく多いので、攻撃しながら使用しました。

## 助ける理由 助けたい理由 後編

朝我 Side

クロノ「全く、何を考えているんだ君達は？」

二人のデバイスを受け止めながら、呆れたように溜め息をついてそう言った。

クロノ「ロストロロギアの前で戦闘行動なんて、この街を消すつもりか？」

朝我「別にそのつもりで戦った訳じゃない。こちらにも“事情”があつてな」

クロノ「その事情に、この街を巻き込むとしていたんだ」

確かに、その通りだ。

この戦いは一人の想いをかけた戦い。

そこに街を巻き込む必要はない。

・・・だけど、俺は・・・

クロノ「まずは2人共武器を引くんだ。このまま戦闘行動を続けるなら、僕は君達を倒さないといけない！」

その言葉に答えるようなのは達は地面に降り立つ。

クロノの話を聞いたと口を開いたその瞬間 橙色の閃光が、  
降り注いだ。

クロノが咄嗟にシールドを張つてそれを防ぐ。

閃光の雨が收まり、空を見上げた俺達の視界に映つたのは、フェイ  
トを主とする使い魔

アルフ「フェイト、撤退するよ……そこから離れて……」

橙色の魔力を集束させ、フェイトの邪魔をするものを排除しようと  
するアルフだった。

フェイトは飛び上がる。

クロノはそれに反応して杖を向けるが、アルフの再度の攻撃に距離  
を取らざるを得なくなる。

フェイト「・・・

フェイトはジュエルシードに手を伸ばす。

それを見たなのは即座にフェイトのもとに迫るが、間に合わない。

クロノ「はっ……」

フェイト「つー!?」

だが、クロノが放った水色の弾丸が、フェイトに当たり、フェイトは地面に落下する。

朝我「フェイト  
！」

だが、俺はここで迷つた。

ずっと迷っていたんだ。

けれど俺は・・・俺は・・・・・

俺は管理局の人間で、管理局の味方でなければならぬ。

それは、正しい選択なのか？

今、フェイトに手を伸ばせば、俺は管理局を裏切ることになる。

この答えが分からなくて・・・

『今の私は、本当の真実を知らずに生きてる。そしてこの先、後悔する結末が待ってる。だから・・・だから、運命を変えて、朝我！』

『朝我』

『瞬間魔力換装』  
ブリューゲル・ブリッツ

! ! !

俺は

フェイントの手を握んだ。

なのは「フェイトちゃん……朝我さん……！」

アルフ「フェイト……！」

なのはとアルフは心配そうに声をかける。

朝我「大丈夫だ！ フェイトは無事だ」

そして俺は雷切を右手に持つて、氣絶しているフェイトをゆっくりと地面に仰向けで寝かせてクロノを睨む。

クロノ「……なんのつもりだ？」

朝我「何故フェイトに攻撃をした？」

クロノ「先に僕の質問に答え『五月蠅い。俺の質問から答える』・

・執務官として、それがベストだと判断した

ベスト……な。

朝我「少なくとも、9歳の女の子に攻撃をして落とさせた時点で  
ベストなんて思わない」

そう言って俺は雷切に魔力を込める。

雷切はそれに答える様に蒼き雷を纏う。

クロノ「・・・戦つと言つなら、僕も容赦はしない」

そう言ってクロノはデバイスを俺に構える。

なのは「朝我さん・・・」

なのはは心配そうに俺を見る。

朝我「大丈夫だよ。すぐ“帰つてくる”」

そう言って俺は左手にいつも魔法陣とは違つ、血のよつて赤い魔  
法陣を出して　　唱えた。

朝  
我  
『

『  
赤  
い  
夜  
』  
アイ・  
スペー  
ス

』

その瞬間、世界はガラスが割れた様に砕け、俺とクロノの2名は誰もいない、真っ赤な夜の世界に立っていた。

クロノ「なつ！？」「ここは！？」

クロノは状況を理解出来ない様子で周囲を見渡す。

朝我「この世界は俺が選んだ者しか入ることの出来ない特殊な場所。この赤い夜は時間軸が存在しないため、もとの世界の一瞬の世界だと思えばいい」

クロノ「……ここが、誰も・・・街も巻き込まない場所か」

朝我「・・・」

普段俺が使わなかつたのは、ジュエルシードの範囲が広すぎて特定出来ない為、どこまでを赤い夜に入れれば良いのか分からなかつたからだ。

朝我「さて・・・始めよつか。お話を・・・な」

そつ言つて俺は左手に魔法陣を出して雷切をしまい、新たな刀を出す準備をする。

クロノ「・・・」

クロノは水色の魔法陣をだし、弾丸を6つ程だした。

きつと様子見だらう。

朝我「様子見なんてしてゐる余裕・・・お前にあづるとども~」

そう言って俺は唱える。

朝我『牡蠣かけ闇す総光の門

』

朝我『七惑七星』が招きたる、由来艸阜の勢

四

クロノは徐々に露になる刀へ恐れたのか、全ての弾丸を容赦なく放つた。

朝我『巨門零零、急ぎて律令の如く成せ

』

だがクロノの放った弾丸は全て俺の右手にもたれている刀によって  
切り裂かれる。

朝我  
『千歳の壽

小鳥丸天國こがらすまるあまくに

四

俺の右手にもたれるは、漆黒の直刀。

クロノ「君が使うその武器・・・一体なんだー!?」

朝我「・・・魔力を変換して力に変える刀。ただ、それだけだ」

そう言つて俺はクロノに切りかかる。

朝我「さあ、お話の時間だーーーー！」

クロノ「つー?」

俺は一瞬にしてクロノの懷に入り込み、下から上に刀を振るう。

クロノ「くつーーーー！」

クロノは咄嗟に自分のデバイスを盾にするように構えて俺の一閃を防ぐ。

だが俺の力に耐え切れず、上空に飛ばされる。

朝我「ふつーーーー！」

俺は抜刀術の構えから一気に踏み込んでクロノに一撃を放つ。

朝我

『

草木一切、

そうもくいっさい

天帝のものなれば

いづくか鬼の棲なる

すみか

べき

一の閃

』

クロノ「ぐああああああああ！」

一閃はクロノに直撃し、地面に真っ逆さまに落下していく。

俺は追撃をかけるため、勢い良くクロノに向かつて落下する。

朝我「よくも・・・フェイトを傷つけてくれたな・・・その罪は、とても重い――――――」

そう言つて俺は刀に魔力を込める。

止めをさすために。

『止めてください！』

朝我・クロノ「！？」

だが、俺の目の前に一本の矢は放たれた。

朝我「なつ  
！」

俺は驚く。

『兄ちゃん、ここまでなのだ……。』

朝我「何で……」

なんで……元気いるんだ！？

黒く長い髪に、薙刀を持つ少女と、赤い髪に赤いマフラーをして蛇矛を持つ子供。

そして

『もう、十分ですよ』

ピンク色の長い髪をし、一本の剣を持つ少女。

朝我「桃香・・・愛紗・・・鈴々」

そこに

3人と、3人を中心<sup>1</sup>に4人の女達と、一人の男性が  
いた。

## 助ける理由 助けたい理由 後編（後書き）

はい。とつとう恋姫の方々登場です。

蜀の登場ですが、その他キャラは出る予定です。

赤い夜・・・これは基本的に「*eye*s」が元ネタですが、これは時間軸が存在しない朝我零専用フィールドであるだけです。

ジュエルシードをはじめとするロストロギアはこのフィールドでは存在できないので今回はクロノとお話用に発動しました。

次回は何故蜀の方々が赤い夜に入れたかを説明します。

## 管理観と一つの決断（前書き）

今回、新オリキャラ登場します！

あと前回の通り、色々説明します。

## 管理局と一つの決断

朝我 Side

朝我「なんで・・・皆が」

クロノ「誰だ君たちは!？」

その質問に赤が混じつた様な黒い色の髪の少年が答える。

夜我「俺は『夜我零』。そして引き連れたは名高い武将の血族。『蜀』の武将の血族の者を連れて、我が戦友の戦に加勢しに参った」

そう言って夜我は俺を見て、俺に言つ。

夜我「もう、そこまで良いだろ? これ以上は、ただの暴力だ」

俺は頭が冷め、刀を魔法陣の中に納めた。

朝我「・・・」

朝我『

解除

』

そう言つと、赤い夜はガラスが砕け散る様に壊れ、元の世界に戻つ

た。

クロノ「つ・・・戻ったのか

なのは「朝我さん！――！」

なのはが俺を呼ぶ。

フェイトが居ないとこりを見ると、アルフが連れて逃げたんだな。

朝我「なのは、俺は大丈夫だ。さて・・・」

そして俺は夜我のもとに向い、夜我と話しを始める。

朝我「何故、俺のいるここに来た?」

夜我「・・・・・」

夜我はなのはを一度見てから俺を見直して話しを始める。

夜我「お前が失った者を考えれば、お前が何をするかくらい・・・ 分かるに決まってるだろ」

朝我「・・・・」めん

素直に謝った。勝手に消えてしまつた事を。

夜我「謝るのは俺じゃなくて、桃香達じゃないのか?」

朝我「そうだな」

そいつ言って俺は桃香達の前に立つて、謝った。

朝我「ごめん。勝手にいなくなつて」

桃香「・・・・」

すると桃香はやつくりと俺のもとに近づく。

俺は、叩かれるのだと思つた。

覚悟はしていた。

だけど・・・

桃香「朝我さん！！」

朝我「え・・・」

桃香は、俺に抱きついてきた。

俺の胸に顔を埋め、泣きながら話す。

桃香「・・・心配、したんですから・・・」

朝我「桃香・・・」

俺は反省の意味も込めて、桃香を抱きしめて、頭を撫でながら言つた。

朝我「ごめん。桃香」

桃香「…無事で、良かつたです」

愛紗達は俺と桃香の光景を見て、安心したよつに微笑む。

なのは「あの…朝我さん」

朝我「ん?」

なのはが恐る恐る近づいて俺に質問する。

なのは「そこの人達は?」

朝我「…」

あ…どう説明するべきなんだろ?

未来から来たつて言つて訳にもいかないしな…

夜我也同じ事で悩んでいる顔をしている。

クロノ「皆、その話は後にして、そろそろ僕の話を聞いてもらおうか」

お、ナイスタイミングでクロノが出た。

朝我「そつだな。取り敢えず、お前らの話しひを聞いておいつ

クロノ「聞きたい事は沢山あるが、詳しいことは僕たちのもとで話  
しをしてもらいたい」

ところ「とほ、管理局の戦艦にでも乗るのか・・・

「？」「？」「咄さん。どうも」

全員「「「・?」「」

突如、クロノの隣にモニターが現れ、そこから緑色の長い髪をした  
女性が姿を現した。

なのは「だ、誰?」

夜我「あの人は・・・」

朝我「ああ。リンクティ・ハラオウンだな」

そつ言うとクロノは驚いた様子で俺を見る。

クロノ「君たち、艦長を知ってるのかー?」

朝我「知ってるよ。俺達は・・・な

夜我「・・・」

そう答えて、リンディは話を進める。

リンディ「自己紹介の必要は無さそうね。では、早速私達の戦艦『アースラ』に来てもらいます」

朝我「構いません。ですが、この人数ですが・・そちらは大丈夫ですか？」

リンディ「心配はいりません。こちらは広いですから」

なら安心して入れるかな。

朝我「分かりました。では今からそちらに向かいます」

リンディ「ええ。では」

そう言ってモニターは消えた。

クロノ「じゃ、着いてきてくれ」

朝我「ああ」

そう言って俺達はクロノに続く。

夜我「朝我、なのはが何も理解出来てないようだが?」

なのは「??.?.?.?.?」

朝我「時空管理局の次元航行船の中だ。乗るのは久しぶりだな」

なのは「??.?.?.?.?」

そして俺達は場所が変わり、とても広い空間に送られ、歩き出すクロノの後についていく。

朝我「え？・・・あ」

そうだった、この時代のなのはは魔法に入つたばかりだったな。  
いきなり時空管理局やら次元飛行船とか言われて理解できる小学3年生もいかないか・・・

朝我「ごめん、取り敢えず説明はユーノと一緒に説明をせりあいつ  
上」

ユーノ「さういふとユーノは俺の頭の上に乗つかつて説明を始める。

ユーノ「えつと・・・簡単に言つと、いくつもある『次元世界』を  
自由に移動する為の『船』だよ』

なのは「・・・」

あ、なのはがフリーズした・・・

鈴々「動物が喋つたのだ！？」

とか考へてると鈴々がユーノに興味を示したようだ。

朝我「あ～・・・悪い、ここからはユーノの代わりに俺と夜我で説  
明するか」

そつ言つて俺はユーノを掴んで鈴々に渡した。

鈴々「わ～！ とっても可愛いのだ…。」

翠「ホントだ、可愛いなー。」

一本に結んだ茶髪の少女『翠』もそつまひヒローに興味を示していた。

残りのメンバーは俺と夜我の話題に集中しているようだ。

朝我「そんじゃなのは。取り敢えず説明の続きだけど、『世界はひとつじゃない』って知ってるか？」

なのは「え・・・、うん。星がこいつぱこあるから・・・何となくなるほどね、火星とか彗星とかそいつなので理解したのか。

夜我「星を世界と例えて説明すれば、この戦艦はその星全てに干渉出来るって事なんだが、それで理解できるか？」

なのは「う、うん、なんとなく・・・」

俺と夜我はなのはの反応に苦笑いしながら言へ。

朝我「まあ今は全てを理解しなくてもいい」

夜我「9歳には早すぎる話しだったからな」

そつまひヒロの不満そうな顔をしながら歩く。

まあいつかわかるから・・・今は悩んで欲しいな。

星「それで、主」

俺を主と呼ぶ青い髪に白い服を着る少女は『星』

朝我「ん?」

星「そちらのお子様は、主の娘ですか?」

朝我「は?」

意味不明だ。俺の娘がなのは?ありえん。

朝我「俺は19歳だ。なのはは9歳。10歳で俺が子供を作るわけないだろ」

星「冗談です」

ですよね。星はよくR-18レベルの会話をしだしそうになるから困つたものだ。

クロノ「B」は解除しても良いぞ?」

なのは「あ、はい」

そりゃうどなのはは私服へと姿を戻した。

クロノ「君も、元の姿に戻つてもいいんじゃないかな?」

「ああ、もういえばやうですね。ずっとこの姿でいたから逃げてました」

「うわあ、うわあ！」  
というとユーノは鈴々と翠の手から離れて地面に着地すると緑色の光に包まれた。

そして光から現れたのは金髪の少年だった。

ユーノ「二人にこの姿見せるの、久しぶりになるのかな」

なのは「え・・・ええええええええ! ? ! ? ! ? ! ? ! ? !」

朝我一  
五月蠅い

# 夜我 — 魅きすきだ

なのはかオーバーリアクションをとる。

エリノーあれ?なのにはは・・・初めてたたたけ?」

用或「反或「「（一）

ちゃんと説明しとけよ。そして覚えてろよと心の底から思い、溜息をつく俺と夜我だった。

鈴々「動物が人になつたのだ！」

翠「へえ～そんなことも出来るんだな～」

桃香「わ、私にはさつぱりなんですけど・・・（・ー・・）」

3人も驚いているが、星と愛紗は『おお～』と言つだけで特になにもない。

他の彼女達も驚いている様子だな。

クロノ「君達の事情はよく知らないが、艦長を待たせてしているので、出来れば早めに話を聞きたいんだが」

なのは「い、いめんなさい」

朝我「そりだな。悪かった」

そう言つて俺達は再び歩き出す。

朝我「と、うか、紫苑と朱里はここに来ても大丈夫なのか？」

あと一人、紫色の髪で俺たちにとつては母親の様な存在の人『紫苑』

鈴々と同じくらいの小柄の身長で金髪の髪に帽子をかぶった少女が『朱里』

紫苑「ええ。私達は問題ないですよ」

朱里「ここに来る人達は、それぞれ準備を整えてからきましたから」

朝我「……そつか」

結局、俺のせいで皆を巻き込んでしまつことになつたな。

朝我「……悪い。責任は、きつちつと取るからな」

紫苑「それは、お体ででしようか？」

朱里「はわわ！…そ、そんにやこと…」

朝我「紫苑。朱里が慌てるぞ～」

そつ言つて俺は朱里と紫苑から逃げた。

クロノ「艦娘、連れてきました」

そして俺達はリンクティのもとに行く。

なのね「へ・・・・」

夜我 一  
あ  
・  
・  
・  
・  
」

朝我「こ、これは……」

全員絶句した

はつきり言つと、かなりシユールな光景が広がつていた。

アーティ戦艦は洋式

靴を履いたまま床へ、壁も床も金屬製。

だがこの部屋は壁際に数々の盆栽が飾られ、床には座敷が敷かれる  
上に茶道の道具一式が揃い、あげくの果てには鹿威しまで置いてあ  
つた。

愛紗「和なのは分かるのですが・・・」これは・・・」

桃香——これはこれで凄いね……あはは……」「

桃香、無理に笑う必要はないぞ。

星・まあ・人それを」と言へることで……」

いや、無理に正当化せらる必要もないつて。

「お疲れ様。皆様どうぞどうぞ、楽にして」

朝我  
—あ・・・はい・・・「

なのは「失礼します・・・

夜我「ああ・・・」

ユーノ「はい・・・」

俺たちは恐る恐る座る。

朝我「桃香達は少し」と待つてくれ

桃香「はい」

愛紗「分かりました」

そつ言つて俺たち4人がリンクティさんのもとに向かつ。

リンクティ「初めましてね。私はこの次元航行船アースラの艦長をしています。自己紹介はそれくらいでいいわね」

そつ言つてリンクティが頭を下げ、礼儀正しく挨拶する。

なのは「えと、高町なのはです」

ユーノ「ユーノ・スクライアです」

朝我「朝我零。よろしく」

夜我「夜我零だ」

リンクティ「そう、それじゃなのはさんにはユーノ君に朝我君と夜我君。

詳しい事情、聞かせて貰える?」

朝我「・・・始まりはきっと、俺が初めてユーノに出会った所から  
だろ?」

そう言つて俺が全てを話した。

ジュークエルシードの話を聞いてリンディは納得したようすで話す。

リンディ「なるほど。貴方がジュークエルシードを見つけたんですね?」

ユーノ「はい。僕の一族は発掘などが主な活動だったのでそれで、  
僕が責任持つて回収しようと」

リンディ「立派ね」

クロノ「だが、無謀でもある」

クロノのバッサリとした言葉に、俺はムカツキを覚える。

朝我「良いだろ、無謀で。お前みたいに安全な方向にしか物事を考  
えられないチキンよりは、自分の責任はしっかりと取らうとしたユ  
ーノの方が、カッコイイに決まってる」

そう言つとユーノは恥ずかしいのか頬をポリポリとかいてクロノは

チキンと言われた事に驚いていた。

夜我「まあだが、管理局も人手不足。無駄な犠牲者は出したくないから・・・こんな軟弱な思考になつたのだろうな」

夜我の言葉に俺達は納得したように頷く。

リンディ「それは否定できないわね・・・」

そしてなのはがどうと質問を俺達にしてくる。

なのは「あの・・・そもそもロストロロギアって何なんですか?」

朝我・ユーノ・夜我「「「・・・え?」」」

なのは「?」

朝我「な・・・なのは。お前・・そんなことも知らないでずっとあんな激しい戦いをしてきたのか?」

なのは「う、うん」

夜我「・・・これはこれで才能だな」

ユーノ「やつ、だね」

朝我「(、ヽヽ)ハア...」

てなわけで再びなのはに説明。

夜我「遺失世界の遺産つて俺たちはそう言えればわかるんだけど、それだけじゃなのはには分からないよな・・・」

朝我「次元空間の中には、いくつもの世界があつてな、それぞれに生まれて育つしていく世界、その中に、極稀に進化し過ぎる世界が存在する。医学の技術が進歩しすぎた世界。や魔法の技術が進歩しそぎた世界。進化し過ぎたそれらが、自分達の世界を滅ぼしてしまつて、その後に取り残された、失われた世界の危険な技術の遺産。それらを総称して、ロストロギアと呼ぶ」

なのは「・・・」

朝我「ま、簡単に言えばその世界に存在するその『世界の技術の結晶』俺たち魔法の住人が生み出した技術の結晶と言えば『デバイス』とかかな?」

なのは「なるほど。分かった気がします」

朝我「ああ。まあ最初はそれでいいわ」

説明が終わった所でリンクティと話を続ける。

リンクティ「あなた達が探しているロストロギア、ジュエルシードは次元干涉型のエネルギーの結晶体。いくつか集めて特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層さ

え巻き起<sup>ハ</sup>す危険物「

朝我「それを証明するかのよ<sup>ハ</sup>」この前次元震が発生した」

リンクティ「ええ。ですからこれよりロストロギア、ジユエルシードの回収については、時空管理局が全権を持ちます」

朝我「な・・・!?

夜我「ほう・・・

なのは・ゴー・ノ「え・・・」

なのはとゴー・ノは驚き、俺と夜我は『そう来たか・・』と思つた。

クロノ「今回のことは忘れ、それぞれの世界に戻つて元通りに暮らすといい」

なのは「で、でも・・・」

続けて言つたクロノに必死に食い下がるなのは。

クロノ「これはランクSS+の危険なロストロギア、しかも、次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入して貰うレベルの話しじゃない」

なのは「・・・」

なのははようやく、自分が関わっている事件の重大さに気づいたみたいだな。

・・・だけど。

朝我「今頃引き下がれってのは、納得いかないな」

そう言つて俺は立ち上がりて出口に向かって歩き出す。

朝我「俺は“俺の救いたい人の為”に戦う。ジュエルシードは、そのきっかけでしかない」

そう言つて俺は桃香達を連れて部屋を後にする。

夜我「ま、あいつはそう決断したんだ」

あいつが部屋を出て、残されたオレらが話しを進める。

リンディ「彼に・・なにがあつたの？」

クロノ「あの瞳<sup>め</sup>・・誰かを失つた人の瞳をしていたが・・・」

そうか、この人たちも、失っているんだつたな。

夜我「あいつは、好きな人を失つた。それも・・・何人も」

なのは「え・・・」

クロノ「なるほど・・・」

リンディ「詳しく聞かせてもらえるかしら?」

夜我「断る。“現在”<sup>いま</sup>全てを話せば、あいつは全てを・・・また失う事になるかも知れないからな」

そう言つて俺もその部屋から出てこいつと並ぶ。

夜我「俺は朝我の戦友として、あいつと共に戦う。邪魔をすれば  
斬る」

やつ言い残して、俺は部屋を後にする。

あの時の様な姿

夜我「そうだ。俺はもう一度と、あいつの  
を　　見たくないから」

そう言って俺は朝我達と、また歩き出す。

## 管理局と一つの決断（後書き）

大切な人を何人も失つた、大事な戦友がいる。

あの時の俺は、あいつに何もしてやれなかつた。

その後悔があつたから・・・俺は、今度は・・・絶対に・・・

あいつの望む結末を作る手伝いをする。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

おまけ説明

夜我零 19歳

朝我零の名前がほぼ同じだが、その理由は後、判明する。

戦闘スタイルは朝我と同じく刀を使つてゐる。

そして朝我と同じく過去に飛び能力を持つ。

この能力と空間魔法を混ぜ合わせて他人の空間に干渉した。

その他能力の説明は後、説明する。

### 3人の進む道

なのは Side

ユーノ「だから僕もなのはも、そちらに協力させて頂きたいと」

リンディ「協力・・・ねえ」

私とユーノ君はリンディさんにそう言って、説明をする。

ユーノ「僕はともかく、なのはの魔力はそちらにとっても有効な戦力だと思います。ジュエルシードの回収・あの子達との戦闘。どちらにしてもそちらとしては便利に使えるはずです」

ユーノ君がリンディさんを納得させる話を続ける。

リンディ「ふむ。なかなか考えてますね。それならまあ、いいでしょ」

クロノ「か、母さ・・・艦長!..」

何とか承諾を得ることができました。

リンディ「手伝って貰いましょう。こちらとしても、切り札は温存したいもの。ね?“クロノ執務官”」

そつ言うとクロノ君は渋々納得してくれました。

リンディ「その代わり、条件は一つよ。両名共、身柄を一時時空管理局の預かりとすること・指示を必ず守ること」

なのは「わかりました」

そして通信は切れました。

リンディ Side

リンディ「それにしても、彼はいなかつたわね

クロノ「はい」

朝我零・・・彼の瞳は、本当に悲しそうだった。

一体、どんな辛い世界を生きてきたのだろう？

きっとそれは、私達にはとても重い世界。

こんな私たちも予想できない・・・そんな世界。

リンディ「もしかしたらなのはさん達と共に事件を解決させれば、  
彼の真実に近づけるんじゃないかしら？」

クロノ「分かりません。ですが・・・」

クロノも分かつてゐるみたいね。

リンディ「ええ。この事件、ただのロストロギアを巡つた戦いでは  
ない」

手遅れになる前に、手を打たないと・・・

フェイト Side

アルフ「ダメだよ・・・時空管理局まで出て来たんじや、もうどうにもならないよ!逃げようよ、一人でどうかにさ?」

アルフから、そんな弱気な発言が出る。

フェイト「それは・・・ダメだよ」

傷付いた私の治療を終えたアルフ。

アルフ「だつて、雑魚クラスならともかく・・・あいつは一流の魔導師だ!!!本気で捜査されたら、ここだつていつ特定される。あ

の鬼婆だって、訳わからんことばっかり言つ上、フェイトに酷いことばっかりする」

フェイト「母さんのこと、悪く言わないで」

アルフの本音だと思つけど、いくらアルフでも許せない。

アルフ「言つよ！！！だつて・・・だつてあたしは、フェイトのことが心配。フェイトが悲しんでるとあたしも悲しいし、フェイトが泣いてると、あたしも泣けてくるんだ！！フェイトが泣くのも悲しむのも、あたしは嫌なんだよ！！！」

私、そんなに心配かけてたんだ・・・

フェイト「・・大丈夫だよ。アルフが辛いなら私、もう泣かないし、悲しまないから」

アルフ「つ！」

そう言つと、アルフは苦しそうに言つ。

アルフ「あたしは、フェイトに幸せに笑つてて欲しいだけなのに！――！」

そんなアルフの想いが、私は嬉しかった。

フェイト「ありがとうアルフ。でもね？私、母さんの願いを叶えてあげたいの。母さんの為だけじゃない。きっと、自分の為に。だから、あと少し、最後までもう少しだから、私と一緒に頑張つてくれる？」

アルフ「・・・うん」

フロイト「ありがとう。アルフ」

そうだ。あと・・・少し。

あと少しど、母さんの願いが叶つんだ。

その為なら、例え誰が敵でも・・・負けられない。

朝我  
Side

朝我「はああああー！ー！ー！」

俺と愛紗は赤い夜の中で鍛錬に明け暮れていた。

ジエラルドの反応が無いため、暇なのだ。

俺は雷切をだし、愛紗は『青龍偃月刀』と呼ばれる薙刀を出して戦つていた。

朝我「はあ、はあ・・・」

愛紗「やはり、流石ですね」

朝我一いやまだまだよ

そう言って汗を右腕で拭いながら再び刀を構える。

桃香「二人とも！頑張れ！」

朱里「はわわ！ふ、一人とも、気をつけてくださいーーー！」

3人の応援をよそに、俺と愛紗は刃をぶつけ合う。

朝我「せいつ！－！」

薙刀の刃先と雷切の剣先がぶつかり合い、大きな衝撃はを出す。

そして少し距離をとつて、武器を構える。

愛紗、ご主人様。本田はこの辺でよろしいかと」

ノルマニヤの歴史と機器を継む

朝我 - そ二「たな」

そこまで俺も刀を納めた

そして赤い夜も解説した

朝我「さて・・・と。夜我はどうした?」

桃香「あの青い宝石探しに行きましたよ?」

朝我「ジユエルシードな。いい加減覚えろ」

桃香「え・・・・えつとお・・・じゅ、ジユホールペ〇ト?」

朝我・愛紗・鈴々・朱里「「「違」」」

別のタイトル出たぞ！？

桃香「わ、分かんないもん〜（ ； ； ）」

朝我「（ 、 、 ）ハア…」

変わつてないな・・この天然な性格。

夜我「悪い。遅くなつた」

朝我「お、帰つてきたか」

噂をすればなんとやうと晝わんばかりに夜我が戻つてきた。

朝我「どいまで行つてたんだ？」

夜我「ジユエルシードを探しがてり、泊まれる家を探してたんだ」

朝我「おお・・・見つかつたか？」

夜我「ああ。既に翠達は中で荷物整理してる。ちよつと手伝つてくれ」

おいおい、どんだけ荷物あるんだよ・・・

朝我「分かつた。愛紗、鈴々！行くぞ！」

愛紗「はい！」

鈴々「分かったのだーー！」

そつ言つて俺と愛紗と鈴々と夜我は知り出す。

桃香「いっしりしゃーーい・・・・・つて、私と朱里ちゃんはど  
うするのーー？」

朝我「二人も走れ！」

朱里「う、運動は苦手ですーー！」

桃香「ちよつと待つてえええヽ( 、 、 、 )ノ」

そつ言つて俺達は新たな住処に移動するのだった。

その間にも、事件は動き出す。  
ジユエルシード

この先、更に激しい戦いが・・・俺たちを待っている。

## 純白の一閃

朝我 Side

朱里「王手です」

朝我「負けた・・・これで〇勝1〇敗・・・〇一ニ」

新たな家に住み、翌日、夜我と愛紗と星の3人がジュエルシードを探している間、俺と朱里は将棋をしていた。

主人公ともあらう俺が一回も勝てないと言つのはどうこうことだ?

朱里「ご主人様は『先の先を読む』『裏の裏をかく』と言つ事が出来いませんから」

朝我「裏の裏つて表だぞ?」

朱里「ですから、裏と言つ非常識だけに囚われず、表と言つ常識もしつかりと見る必要があるということです」

なるほどな。そう言つのも大切か・・・

朝我「よし。もう一戦だ」

朱里「さ、流石に少し休みましょうよ・・・」

朝我「え・・・あ、そうか」

何だかんだで10回も戦つてれば疲れるよな。

朝我「ごめんごめん。それじゃ休憩だな」

そつ言つて俺は将棋一式を片付ける。

紫苑「一人とも、お茶ですよ」

その間に紫苑は俺と朱里がいたテーブルの上に湯のみを持ってきた。

中にはあつたかいお茶が入つている。

朱里「ありがとうござります」

朝我「ありがとうございます」

将棋一式を片付けた後、席に戻った俺は紫苑が煎れたお茶を飲む。

朝我「ふう・・・和むな・・」

だが、お茶を飲むと思い出すのは・・・リンクティが口にしていたどう考えても甘つたるいであるひつお茶っぽい飲み物。

朝我「・・・」

ふと、テーブルの端に置かれていた角砂糖の小さな山。

朝我「（入れたら どんな味がするんだ？）」

試したい欲求が俺の中で溢れていた。

朝我「・・・」

そして俺はゆっくりと右手を砂糖に伸ばす。

紫苑「止めなさい」

朝我「「めんなさい」」

俺は即座に席に戻る。

だつて紫苑がゼロ距離で弓の矢を俺に向けるから・・・

朱里「「主人様・・・それはちょっとどうかと・・・」」

朝我「「はい。ほんと「めんなさい」」

素直に謝つてお茶を啜る。

すると俺の右ポケットが振動しだす。

朝我「電話だ・・・えと・・・夜我か」

黒いスライド式の携帯を取り出して電話に出る。

朝我「もしもし?夜我、どうした?」

夜我「いい情報だ。ジュエルシードのありがが分かった。場所は既にメールで送つてあるからそこに来てくれ。俺達は先に行つてる」

朝我「ありがとう。今すぐ向かう」

そつ言つて俺は電話を切つて朱里と紫苑に言つ。

朝我「二人とも、今ジュエルシードが見つかった。今から向かうぞ」

朱里・紫苑「はい」

そつ言つて俺達は家を出る。

夜我 Side

俺たちは森の中にある小さな湖に辿り着いた。

湖に現れたのは超巨大な鰐。

湖の水を全身に纏ついて、その姿は水の龍にも見える。

夜我「あれ・・・多分今日の夕食だな」

愛紗「本当ですか!?」

星一あれでひれ酒でも飲むのもありか・・・」

そんなこんなで俺達は武器をだす。

夜我一愛紗星行くぞ！」

愛紗  
— はい！

星へ行くぞ！！

そハ言ハテ後継ト星は左右から攻撃を開始する

槍と薙刀が左右から降り下ろされる。

だがそれは、水を切り裂くだけでまたもとに戻ってしまった。

愛紗 — 何!?

星一ふむ・・・水か匱にもなつてゐるのか・・・」

二人は奴から少し離れる

夜我「水を纏つて時点で奴は完全防護が完成したとなると・・・」

雷で感電させるか、炎で蒸発させるかの一つか・・・

両者ともにそれは朝我しか出来ない仕事か・・・

・・・いや、他にも手はあるか。

夜我「二人とも、少し下がってて」

愛紗「・・・分かりました」

星「・・・」

二人は俺の後ろに下がる。

そして俺は右手に緑色の小さな魔法陣を出して唱える。

夜我  
『 牡 篷 かげ 開 す 總 閻 の 門 』

四

朝我と同じ祝詞。

夜我『七惑七星が招きたる、

由来艸阜の勢

』

すると俺の背後に白い巫女服を着た女性が現れる。

夜我  
『月 下 零 零、  
切 ら ず し て 月 夜 に 舞 い 上 が れ

△

そして俺は純白の柄を掴む。

夜我『千歳の傳

姫鶴一文字

』

俺の手には、白い鞘に白い柄の刀があった。

そして俺の背後にまるで靈の様に透けた美女は俺に言つ。

? 「夜我様、本日はどのような加護を求めますか?」

夜我「“鶴”俺に飛翔の翼と切り裂く力を」

鶴と呼ばれた白く長い神をした巫女は両手を広げ、天に唱える。

鶴『我が聖約の主に、飛翔の一閃を』

そう言つて、俺の全身を純白の光が包み込む。

鶴「では夜我様。」武運を

そう言つて鶴は光に包まれ、刀に吸い込まれる。

夜我「さて・・・いやつーーー！」

俺は刀を両手で持つて力強く踏み込み、前方に突っ込む。

そして純白の光を刃に乗せて、降りおろす。

夜我

『白一文字』

□

そして純白に染まる斬撃は雲まで伸び、その一閃は真っ直ぐに降りおろされ、水を纏つた鰻を一刀両断にする。

夜我「ふう・・・」これで終わりか?」

愛紗「流石ですね」

星「うむ。問題ない」

そう言って俺たちは集まり、斬り裂いた後を見る。

夜我「・・・な!?」

だが、切り裂かれた後、二つに分かれて再び水の鰻に戻る。

愛紗「2体に増えた！？」

星「何故だ！？」

夜我「……まさか、ジュエルシードの影響を受けた鰐は複数いるのか！？」

それが集合して一体の巨大な鰐へとなつた……

夜我「つたく、3人の同時攻撃でまた別れたら厄介だな……」

やつぱり……あいつが必要なのか……

鰐『~~~~~!!~!!~!!~』

鰐は全身に纏つた水を高圧水流にして俺たちに放つた。

夜我「まずい！！！」

そう言つて俺は一人の前に立つて、抜刀術の構えをとる。

その一閃は、相手の放った水流とぶつかり合う。

鞘から出していく瞬間、膨大な純白の光が放たれる。

夜我

『白龍・一閃』

！…！

夜我「ぐつ！・・・・・ジユエルシードの力か・・・・」

普通の高圧水流の比じやないレベルの威力だ。

愛紗「夜我殿！」

星下大丈夫か！？

夜我一ぐ・・・ちよつとあつい・・・」

そういう二人は俺の心中を支えてくれた。

夜我  
……………  
ありがとニ」

そう言つて俺は右手の刀と、左手の鞘にも魔力を込め、2刀流にして放つ。

そしてなんとか相手の攻撃を切り裂いた。

夜我「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

愛紗「なんて力・・・」

星「予想以上だな・・・」

確かにそうだ。

まさか「」まで押されるなんて・・・やっぱり相性なのか・・・

夜我「ちつ・・・」

俺は立ち上がり、再び刀を構える。

まだ、戦いは始まつたばかりだ。

そして純白の光を刃に纏わせ、刀を構える。

『悪い！遅くなつた！！』

夜我「……やつと来たか……」

聞こえる、戦友の声。

朝我「すまない。だが、もうびりにかなるぞ」

夜我「ふつ……そうみたいだな」

朝我は朱里を連れてきてる。

朱里「私が、皆さんを勝たせます」

助かる一言だ。

ま、朱里の戦略があれば・・・行けるな。

朱里「夜我さん、敵の情報を教えてください」

夜我「ああ。奴は数体の鰻がジュエルシードに飲み込まれた成れの果てだ。湖の水全てを纏っている上に、切れば増える」

朱里「なるほど・・・」

朱里は目を瞑つて、考える。

朱里「朝我さん。夜我さん。私が策を考えている間に時間を稼いでくれますか?」

夜我「もちろん」

朝我「任せろ、夜我・・・行くぞ!」

夜我「ああ!」

そう言つて朝我は火車切広光を持つて、俺と共に向かつた。

朝我「紫苑！弓で援護してくれ！」

紫苑「はい！」

そう言つて紫苑は矢を連續で放つ。

朝我「行くぞ・・・」

夜我「喰らえ・・・」

朝我

『』

夜我

『』

炎龍

『』

白龍

『』

凸

凹

そして俺は純白の一閃を。

朝我は炎の一閃を。

朝我・夜我

！！！『』

一閃

！！！

同時に放たれた一閃は巨大な鰐をまっぱたつにする。

俺の切った奴は分裂してもとに戻る。

だが、朝我のは燃え尽きて焦げ散った。

朱里「・・・」

そして朱里は策が整つたのか、瞳を開け、俺と朝我に言つ。

朱里「お二人とも、私の指示通りに動いてください」

そして  
られる。

諸葛亮の血族、朱里の戦略が

俺たちに告げ

番外編 ちょ・・・ちょつと待てええええ！—！—！

俺達は今、全力全開で戦つていた。

その相手は

阿部 A 「やらないか?」

阿部B「やらないか?」

阿部「やらないか?」

阿部D「やらないか?」

阿部E「やらなーいか?」

阿部 F 「やらないか?」

阿部G「やらなーいか?」

阿部H「やらなーいか?」

阿部工「やいひなこか?」

阿部G「やいひないか?」

阿部K「やいひないか?」

阿部L「やいひないか?」

阿部M「やいひないか?」

阿部O「やいひないか?」

阿部P「やいひないか?」

阿部Q「やいひないか?」

阿部R「やいひないか?」

阿部S「やいひないか?」

阿部T「やいひないか?」

阿部U「やいひないか?」

阿部V「やいひないか?」

阿部W「やいひないか?」

阿部X「やしないか?」

阿部Y「やしないか?」

阿部Z「やしないか?」

阿部高和と戦っていた

阿部B「も、もっとだあ／＼／＼／＼

阿部A「あああ／＼／＼／＼

そんな事を言いながら俺達は刀を持って切り裂いて行く。

夜我「ジュエルシード怖いわ……」

朝我「ジュエルシードの影響で増えたんだ！……」

別に触られてもいいのに精神的ダメージが多い。

朝我「千鳥一閃！」

夜我  
——白一文字

強力な一閃を同時に放つ。

阿部「あ、ああああ／＼＼＼＼＼

阿部D 「す、すつゞく、良いです／＼／＼／＼

この繰り返しだ。

そして遂に追い込まれた。

朝我・夜我「はあ、はあ、はあ・・・」

阿部「「「「「「やうひないか??.?.?.」」」」」」

朝我

夜我「· · ·」

朝我「しゅ、朱里！？大丈夫か！？」

朱里「はうつーーー！」

ある日、朱里が本を読んでいて突然大量の鼻血を吹いて倒れていた。

夜我「なんの本を読んでたんだ?」

タイトル『阿部さんとハーレム、やらないか?』

夜我「…………」

朝我「?」

夜我が突如固まつたのでその本のタイトルを読んだ。

タイトル『阿部さんとハーレム、やらないか?』

朝我「火車切広光!…………」

そしてこの本は灰になりましたとや。

阿部「やらないか?」

番外編 ちょ・・・ちよつと待てええええーーーー！（後書き）

月森 和樹先生から貰つたので使つたみました。

朝我・夜我「「殺す気か!?」」

相良「朱里の夢じやなかつたら終わつてたな」

IKA「貰つたら使うのが俺のポリシーだーだー！」

阿部「やらないか？」

朝我・夜我・相良――また出たああああああああ――！」

## 勝利の裏に策あり（前書き）

今日は長いです。

更に新たな刀がまた登場。

・・・ 一体どんだけ刀あるんだお前ら・・・

勝利の裏に策あり

朝我 Side

朝我「朱里、俺たちはどうすればいい?」

俺達は朱里を護る様に円形に囲み、中心にいる朱里の策を聴いた。

朱里「この戦いで鍵を握るのは、朝我です。<sup>（こしゅうじたせき）</sup>」主人様の炎の刀・・・あれで止めをさすしかありません」

朝我「分かった」

朱里「夜我さんは巨大な一撃で地面を削つて敵を追い込んでください」

夜我「任せろ」

朱里「愛紗さんと星ちゃんは朝我さんの一撃まで防衛してください」

愛紗「分かった!」

星「心得た」

朱里「紫苑さんは私の前で姫さんの援護をお願いします」

紫苑「ええ。分かったわ」

そして朱里は羽毛扇を持ち、言ひ。

朱里『では

始めてください……』

そう言つて俺達は朱里の言つた戦術どおりに動く。

朝我

『

俺は火車切広光を右手で持ち、抜刀術の構えをとり、瞳を閉じて止まる。

朝我『我が災厄の焰、我求めしは裁きの焰なり

』

そして俺は焰を全身に纏わせ、唱え続ける。

夜我 Side

俺は走り出す。

そして新たな刀を呼び出す。

夜我  
『 牡籠かけ闔す総闇の門

』

2体の巨大鰐が放つ高圧水流を紙一重で避けながら唱える。

夜我『七惑七星が招きたる、由来艸阜の勢

』

そして左手から現れる小さな魔法陣から徐々に柄の部分が出てくる。

夜我

『  
二  
我  
零  
零、

夜を照らせし二日月となれ

』

微かに緑色が混ざった黒い柄が徐々に姿を現した。

そして2尺半程の長い刀が俺の右手に持たれる。

刀に魔力を込めるとなれば、緑色の光が刀身を纏う。

夜我「・・・行くぞーー！」

俺は刃を地面に向けたまま走り出す。

刃は地面を切り裂き、その速度は徐々に増していく。

そして敵の周囲を高速移動して、相手の動きを止める。

夜我「今だ！－星－愛紗－！」

星・愛紗「はーーーーー！」

そう言って星と愛紗は敵の真上からまるで龍の様に突っ込んでくる。

愛紗

星

青龍

子龍

五  
五

愛紗・星

『逆鱗刀』

『

二頭の龍は巨大な敵を喰らい、そのまま一つに纏めて天に上げる。  
そして龍は姿を消し、俺が発生させた竜巻に飲まれた敵は舞い上がり、朝我の丁度真上に落下していくのだつた。

仲間が、呼んでいる。

夜我

朝我

星

主

俺を、  
呼んでいる。

愛紗「

「ご主人様！！！！！」

俺を、頼りにしている。

朱里「

ご主人様！！！！！！！」

皆が、俺の為に作ってくれた勝利への戦略を

紫苑「

ご主人様！！！！！！！」

必ず繋いでみせる！！！！！

朝我

！」

獄炎閃

・裂斬極焰刃

『

れつざんじくえんじん

刹那、焰の無数の斬撃が360°から一体に纏まつた巨大な鎧を包み込んで、切り裂いた。

そして巨大な爆発が発生して、ジュエルシードが二つ・・・刀を納める魔法陣の中に入った。

朝我「・・・」

火車切広光も納め、俺は皆に笑顔で言つ。

朝我「終わりだ。皆、お疲れ！」

そつとつて俺達は家に帰る。

俺には出来ない事がある。

頭が良くない俺の変わりに、戦略をたてて、その通りに動いてくれる人がいる。

だから俺は、俺の本領で戦えるんだ。

朝我・夜我「ほ、ほんとに夕飯が鰻づくし……」

この日から3日間、毎日鰻料理だったのは余談である。

勝利の裏に策あり（後書き）

『大典太光世』

積み重ねた死体の一體の胴体を切斷し三体目の背骨で止まつたといわれている刀。

柄は微かに緑色が混ざつた黒。

2尺半程の長い刀。

魔力を込めると緑色の光に変化する。

この刀で発動させた技は『3回』までしか発動出来ず、3回発動すると刀は崩壊する。

ただし崩壊して24時間でもとに戻る。

## キャラ設定 2

朝我 零

> i 3 6 4 3 4 — 3 6 1 8 <

1、刀

『火車切広光』

シンプルに炎・焰を発現する刀。

使用者の感情や魔力量によつてその火力は変動する。

『雷切』

雷を発現させる刀。

遠距離・近距離のどちらにも対応しているため、よく使われる。

『小鳥丸天国』

闇を発現させる刀。

刀の中で特に攻撃威力の高い刀となつてゐる。

『蜻蛉切』

刃が濡れた様に、まるで鏡の様になつてているのが特徴。

この刀身に写された人・物質・物体・気体・液体などの攻撃を『反射・転移・切り裂く』の3つが可能になる。

基本的にはカウンターに使用される刀。

夜我 零

基本的に容姿は朝我と変わらない。

ただし性格や声は全然違う。

# 1、刀

『姫鶴一文字』

白き刀。

発現した瞬間、『鶴』と呼ばれる巫女が現れ、夜我に求める加護を与える。

この加護を使うと『切られた者回復』なども可能になる。

ちなみに鶴は夜我に強い想いがあるらしい。

『大典太光世』

積み重ねた死体の一一体の胴体を切断し三体目の背骨で止まつたといわれている刀。

柄は微かに緑色が混ざつた黒。

2尺半程の長い刀。

魔力を込めるとき緑色の光に変化する。

この刀で発動させた技は『3回』までしか発動出来ず、3回発動すると刀は崩壊する。

ただし崩壊して24時間でもとに戻る。

更におまけ情報。

桃香・愛紗・鈴々・朱里・星・紫苑・翠達は恋姫のキャラ達ですが、決して劉備達本人では無い。

その血族として生まれた者として扱っているのである意味オリキャラ。

まあ一次創作なのでオリジナリティが原だらうがどっちでも良いけどね。

たつた一つの命だから

なのは Side

朝我さん達とは別にジユエルシードの搜索を初めて10日が経ちました。

私達が回収できたジユエルシードは2つ。

少ないけど、フェイトちゃんも朝我さんも集めていると言つじとは、いつかきっと・・・一度に全て揃う日がくる。

フェイトちゃんやジユエルシードを探すべく、エイミーさんが搜索範囲を広げたり、クロノ君があちこち奔走して頑張ってくれているから、大丈夫だと思つけど。

ユーノ「大分數も減つてきたし、もしかしたらこの先見つけるのは結構長く掛かるかもね」

ユーノ君の話に私は納得する。

私はジユエルシードの事やフェイトちゃんの事を考えると、ふとあの人々の事が気になりました。

『あいつは、好きな人を失った。それも・・・何人も』

夜我さんが言った、朝我さんの過去。

好きな人がいた事に私は驚いた。

誰なんだろうって、凄く気になる。

けれど、聞いたらいけない。

だって、その人達を失ったんだもんね。

失いたくなかった人を失う辛さは、よくわかる。

それが多ければ多いほど、傷は大きくなるってことだって・・・分かる。

だから、今は聞かない。

今の私に、朝我さんの過去に触れる権利はないから。

けれど願うのは あの人があんまり泣くのになれる  
と。

今はまだ事件があるけど、事件が終わったら、ちゃんとお話しして・  
・癒してあげたい。

私に出来る事は分からぬけど・・・いつか、きっと

『Hマークジョンシーーー』 捜索域の海上にて、大型の魔力反応を感じ  
知!』

そのアーティストを聞いた私達は、すぐにブリッジに向かった。

ブリッジに向かった。

何か・・・嫌な予感がする。

朝我 S.i.d.e

朝我「…………こも駄目か・・・」

俺は愛紗・鈴々・朱里・紫苑の4人を連れてジュエルシードの搜索を行なっていた。

海鳴から少しづつ距離を離れるように搜索していた。

朱里「他の一つの勢力もジュエルシードを見つけている筈です。で

すから少ない数を見つかるのは難しい筈です」

朝我「だな。海鳴周辺だけでも広いと言つて、元の通りに、残りわずかの物を見つけるのは簡単じやないよな」

分かつてゐるけど、やつぱり急かしてしまつのは・・・短気なのだろうか？

愛紗「短気は短気と並んで葉があります。慎重」

朝我「・・・そうだな。ありがとうございます。愛紗」

愛紗の言葉に俺は少し落ち着き、再び搜索を開始する。

紫苑「夜我様からの連絡はまだなのですか？」

朝我「ああ。1時間置きに連絡をひいてあるからもう来るかな・・・」

そう言ひて俺は携帯を取り出していく。

俺と夜我は一手に別れての搜索。

夜我が無茶しないよつこと、1時間置きに連絡しつづけておこる。

鈴々「お兄ちやんは心配性なのだ」

朝我「夜我が俺に心配かけすぎるだけだ」

セツニツヒツヒツ（・・）ニヤニヤしながら俺を見て歩き出す。

朝我「な・・・なんだよ？」

愛紗「いえ、別に」

鈴々「なんでもないのだ」

朝我「い、いや、なんかあるだろ！？」

紫苑「さて、なんのことじょいね？」

朱里「なんでじょい？」

そう言つて5人は先に進む。

朝我「ちよ、ちよつと…置いてくなつて！」

そう言つて俺は慌てて追いかけると、携帯が小刻みに振動した。

朝我「！？」

俺はすぐに開いて電話に出た。

朝我「もしもし？夜我か！？」

つと思つたが、声は男ではなく、女の子の声だつた。

なのは『もしもし朝我さん！？なのはですー。』

朝我「なのは・・・ビーハしたんだ？」

なのは『今すぐアースラに来てもらひて良いですかー？大変なんですー！』

朝我「・・・分かった」

やつ言つて俺は電話を切つて、すぐにアースラに向かつた。

そしてアースラにたどり着いた俺達はすぐさまブリッジに向かう。

そこにつくと巨大なモニターを全員が見ていた。

朝我「なのは！ クーノ！」

なのは「朝我さん！」

ユーノ「朝我！」

そう言って一人が俺の隣に来る。

俺はそのままリンディとクロノのもとに来る。

クロノ「来たか」

リンディ「貴方がたを呼んだのは他でもないわ。ジュエルシードよ。

それも・・・強大な

そつ言つてリンディとクロノはモニターに目を向けた。

俺達もモニターを見る。

朝我「なつー？・・・」・・・これ・・・」

俺達は目を疑う映像を見た。

「フェイド、アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ、今導きのもと降りきたれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル

海鳴市の沖合から離れた場所でフェイトが足元に極大サイズの魔法陣を展開し、バルディッシュを手に詠唱を始めていた。

雷が魔法陣を這い回り、黒雲が雨を降らせ始める。

アルフ「（ジュエルシードは多分海の中。だから、海に電気の魔力流を叩き込んで、強制発動させて位置を特定する。そのプランは間違つてないけど……でも……でも……）」

フェイト「 撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス 」

詠唱を終えると同時に、宙に九個の巨大な黄色い球体が浮かぶ。

そこに一つ目が開き、放たれた雷が輪の用に連なり、魔力を集束させていく。

フェイト「はあああああああああ…！」

フェイトがバルディッシュを魔法陣の中心に突き入れた瞬間、雷が弾け、轟雷が海に降り注ぐ。

フェイ特「はあつ、はあつ、はあ・・・見付けた！…！」

撃ち込まれた巨大な魔力に呼応し、ジュエルシードが発言した。

青白く輝く竜巻が六個発生し、大気を搔き乱す。

アルフ「（これだけの魔力を撃ち込んで、更に全てを封印するなんて。）」  
「（んなの、フェイ特の魔力でも、絶対に限界を越えてる！…）」

フェイ特「空間結界とサポートをお願い！…！」

アルフ「ああ、任せといて！…！」

アルフ「（だからこそ誰が来ようが、何が起きようが、あたしが絶対守つてみせる）」

六個の竜巻が収束し、巨大な一つの竜巻へと姿を変える。

フェイ特「行くよバルティックシユ！…頑張ろつ！…！」

そう言ったフェイ特は一人で竜巻に向かっていった。

朝我「あの馬鹿・・・」

リンディ「なんとも呆れた無茶を・・・」

ブリッジに飛び込むと同時に、迎えたのはリンディのそんな声だった。

モニターに映された竜巻と巨大な魔力の氣配、そしてフェイトを見た瞬間、俺は全てを理解した。

あんな無茶、生きて帰るつもりなんて無いってやつがすることだーー！

クロノ「無謀ですね。間違いなく自滅します。あれは、個人が出せる魔力の限界を越えている」

朱里「あんなに無茶をするなんて・・・正気の沙汰ではありません」

クロノや朱里の言つとおつだ。

冷静な判断・・・と言つては程遠く、作戦・・・と言つて葉では納得できないほどの無謀さ。

あのままじゃ・・・フェイントは・・・

なのは「私達がすぐに現場に」――」

朝我「ああ――」

やつ言つて俺達は移動しようとした。

クロノ「その必要はないよ。自滅しなくても、力を使い果たした所で叩けばいい」

移動しようとした俺たちに、クロノが非情に告げた。

なのは「でも――――」

クロノ「今之内に捕獲の準備を――」

そつ言つと艦内の者が準備を始めようとした。

その瞬間、俺の右手に持たれる刀を中心に放電された蒼き雷が機器に当たるか当たらないかの位置で止まっていた。

全員「「「「「」」」」

朝我『 牡蠣かけ闔す総光の門 七惑七星が招きたる、  
由来艸阜の勢 文曲零零、急ぎて律令の如く成せ 千  
歳の壽 雷切！！！！！』

クロノ「何！？ つ！？」

更に愛紗と鈴々がクロノの首に刃を向ける。

リンディ「・・・」

リンディの背後は、紫苑の矢が。

朝我「抵抗はやめる。そもそもば、この戦艦と艦長及び執務官の命は無い！！！」

なのは「朝我さん！？」

朝我「なのは、フェイトの所に行つてくれ。俺も後で向かう」

なのは「・・・」

なのはは心配そうな表情で俺を見る。

俺はそんなんのはを安心させるために、ユーノに言ひ。

朝我「ユーノ、なのはを頼んだ」

ユーノ「・・・分かつた！」

俺の想いを悟ってくれたのか、ユーノは真剣な表情で俺にそう言い返した。

朝我「・・・なのはーー！」

なのは「？」

ユーノと共に転送ポートの上に立つなのはに言った。

朝我「なのは、お前の想いを・・・フェイトに伝えてあげる。お前の想いは、フェイトを・・・変える筈だからー！」

なのは「・・・うん！」

そう言つて、なのはとゴーノは向かった。

朝我「頼んだ。後で・・・向かつから」

そう言つて俺はクロノ達を睨みながら言ひ。

朝我「お前らは、あいつの姿を見て・・・何とも思わないのか？」

そう聞くと、リンクが答える。

リンク「これが一番の選択よ。そして、これが私達管理局の決断であつて・・・どんなに残酷でも、これが現実よ」

朝我「これが現実・・・か。どうやらお前らの目は節穴だらけみたいだな」

そう言つて俺は雷切で放出させた雷でハッキングをかけ、先程の映像を出していった。

朝我「お前らには見えないのか？フェイトの

瞳の奥

そつ言つて俺達はフェイトの真剣そうな表情と共に、その瞳を見る。

朝我「あの瞳は、誰よりも強い想いの表れだ。あいつは無茶をしても、取り戻したい“何か”があるんだ。命を捨てても……命を無駄にしても、取り戻したい……そんな想いがあるんだ。そんなことにも気づけず、ただ『無茶をした馬鹿』と判断して処理しようとしているお前らは、ほんとに肩野郎どもだな」

クロノ「……それでも、罪になることは変わりない。それに、一番確実に捕まえる事が出来る方法だろ？」

朝我「例えフェイトの行動が罪になろうとも、それを背負いながらも……あんなに真剣に、一途に努力する姿が……お前らには汚く見えるか？」

クロノ「……」

朝我「あんなにボロボロになって、ズタズタになって、それでも取り戻したい……手に入れたい奇跡がある。たつた9歳の女の子が、命張ってるんだぞ！？たつた一つの命……無駄にしてでも頑張つてんだぞ！？それを罪！？確実に捕まえる！？ふざけんな！！そんな侮辱以外の何物でもない汚い手段で終わらせようなんて……絶対に俺たちがさせない！！！！！」

そう言つて俺は雷切を納め、一人で転送ポートに乗る。

朝我「愛紗、鈴々、朱里、紫苑。ここは任せた」

愛紗「御意」

鈴々「了解なのだ!」

朱里「はい!」

紫苑「かしこまりました」

そつと見送られながら、俺はフェイトのもとへ転送される。

朝我「誰かの為に頑張る奴・・・そいつに手を差し伸べたくなるのは、人として当然だ。そうだよな フェイト」

俺は助ける事が出来なかつた、10年後のフェイトに向かつて・・・  
そう言つた。

## 記された雷刃（前書き）

今回はオリジナルの戦いになります。

更に朝我が本氣モードに…?

というかチートモードに入ります。

なんか…これこそチートと云ひの感じのチートになるかと（…）

## 託された雷刃

朝我 Side

俺はなのは、フェイト、アルフ、ユーノのいる場所に向かうと、4人は驚くことに共闘していた。

アルフとユーノが離れた距離でチーンバインドをかけて巨大な竜巻を縛る。

なのはが遠距離で砲撃、フェイトが攻めていた。

だが、竜巻の力は強大で鎖が解けそな程だった。

朝我「ぐつ・・・なんて暴風だ・・」

巨大な竜巻は、大きな津波や大雨・・暴風も発生させている。

油断したら吹き飛ばされるな・・・まさかジュエルシードがここまで強力な力を放つとは・・・

俺は雷切を手にフェイトのもとに向かつ。

朝我「フェイト」

フェイト「朝我・・・」

朝我「大丈夫か？」

フェイント「うん……あの子が、魔力をくれたから」

なのはが、フェイントに魔力を与えたらしい。

でも、これでなのはの魔力も減った。

さて……ここまで強い奴、どう倒すか……

朝我「フェイント、俺がおとりになつて敵をかく乱せ。その隙に一撃を」

「フェイント」・・・

フェイントは無言で頷く。

朝我

瞬間魔力換装

』

そつぱうと俺は光を超える速度で海面から竜巻とは逆向きに回転しながら上昇していく。

朝我「ぐうううーーー！」

竜巻に逆らうと轟つことまつ、竜巻と戦うのと回り。

俺は雷切で竜巻を切りつけながら回転、上昇していく。

そして俺が雲まで上昇し、フロイトとののはが同時に砲撃を放つ。

「ホイト」サンダー。  
「デイバイン」。  
「」。

「フヒイト、レイジィイイイイイイイイイイイイイ！」

なのは「やつた・・・

フエイト・・・

二人は喜び、俺も一息つく。

だが

ユーノ「！？なのは！……！」

アルフ「フェイト！……！」

なのは・フェイト「！？」「

消えた消滅した筈の竜巻が再び発生。

海水を纏いながら竜巻はなのはとフェイトに向かって槍のよつに向かつた。

なのは「つー？」

フェイト「間に合わな・・・」

**俺は瞬間魔力換装でなのはとフェイトのもとに向かう。**

だが竜巻の速度はジユエルシードの影響で予想以上の速度をだし、追いつくのがやっとの速度。

「おまでは間に合わない。」

朝我「もつと・・・・・もつと・・・・・速く・・・・・速く――!――!

俺は全ての魔力を使つて全速力で向かう。

それでも、届かない。

! ! ! ! !

ソニック・ムード

なのは・フヨイト「「！？」

ユーノ・アルフ「「！」

4人は、驚くべき光景を見た。

『雷刃武装・セットアップ』

そこにいたのは、黒いマントに黒い長袖と白い縦のラインが入ったズボンを履き、

『雷刃の刀・エクレール』

なのは「朝我さん……！」

両手にもたれた、黒いフォルムの蒼い雷の魔力刀。

そして普段は黒い髪だったはずの彼は、青みを帯びた金髪になつて  
いた。

フェイト「朝我……」

朝我「……これは……」

俺は、自分の姿を見て驚いた。

突如変化した姿。

なんの前触れもなく発生した雷。

一体これは……

でも……感じる、懐かしい魔力。

これは  
フェイトの魔力だ。

朝我「まさか・・・」

俺は一つの仮説にたどり着くが、現状を打破してからそれは考えることにし、俺は竜巻に向かう。

朝我

瞬間魔力雷刃換装

『

刹那、蒼き閃光が竜巻を複数回切り刻む。

なのは「つー？」

フェイト「速いーー？」

ユーノ「でも・・・速すぎる・・・」

アルフ「あの光・・・まるでフェイトじゃないかー？」

4人が驚く程の速度を俺はだし、竜巻が消える程まで切り裂く。

そして切り裂きながら再び雲まで上昇、そして俺は二刀の刃に蒼と  
黄色の雷を纏わせ、真上から一気に振り落とす。

朝我

『

! ! ! ! !

稻妻切り裂く神の一閃

トライデント・トル・スラッシュ

』

一刃の一閃は交わり、竜巻を、海を、落雷を、雲を、切り裂いた。

そして発生する、巨大な爆発。

俺達は黄色き閃光に包まれる。

朝我「・・・フェイド」

俺は田の前にいる10年後のフェイトと話をしていた。

朝我「この姿……この魔力。なんでフェイトの力が俺に……」「

フェイト「多分……これだよ」

そう言ってフェイトは俺の魔法陣の中からジュエルシードを出した。

3つの……ジュエルシード。

朝我「これが?」

フェイト「覚えてる? ジュエルシードは、願いを叶えるって」

朝我「ああ……まさか! ?」

フェイト「うん。多分……私の、朝我を助けたいって気持ちが叶つた結果だと思つ」

フェイトの……想いか。

ジュエルシードも、そんな風に想いを叶えてくれるんだな。

朝我「ありがとう。力……貸してくれて」

フェイト「ううん。感謝するのは私の方。なのはと私を助けてくれて……ありがとう」

素直に感謝されると、少し照れるな。

朝我「……お前の力、これからも使わせて貰つよ」

フェイト「うん。これくらいしか、私にはできないのは残念だけど・  
・・」

朝我「いや、十分だ。だから見ててくれ。俺たちを・・  
れからも」

フェイト「うん」

そつぱつて、フェイトは光と共に消えていった。

そして残つたのは、俺達と残り全てのジュエルシードだった。

## 託された雷刃（後書き）

『雷刃武装・セットアップ』

朝我のB-Jに+としてフェイトの羽織っていた白いマントを羽織り、更に髪が青みを帯びる蒼。

これはフェイトの黄色い雷と朝我の蒼き雷が混ざった影響である。

この時朝我の魔力ランクは朝我のSランクとフェイトのS+ランクが掛け合わざり、魔力ランク測定不能（魔力ランクEX）となる。

『雷刃の刀・エクレール』

雷切とバルディッシュが混ざり、蒼い雷刃と黄色い雷刃の一ノ刀流の刀となる。

『ブリューゲル・アクセサリ・ムーブ  
瞬間魔力雷刃換装』

ブリューゲル・ブリッツ  
瞬間魔力換装とフェイトのソニックムーブを掛け合わせて生み出された超高速魔力移動である。

『トライデント・トール・スラッシュ  
稻妻切り裂く神の一閃』

Stsのフェイトの『トライデント・スマッシュ』を一刀の刃に。

朝我の『千鳥一閃』を一刀の刃に。

二刀の一閃を交わらせ、対象に向かって放つ最強雷刃技。

その一閃は、まさに雷の神の如し。

## 届かない手（前書き）

あ、クリスマス番外編の件ですが、全く進んでいませんすみません  
m (ーー) m

## 届かない手

リンディ Side

激しい光でモニターが見えなかつたけれど、光が消え、現状が明らかになる。

空に浮かぶ、ジュエルシードが6つ。

まさか・・・彼一人で倒したっていうの！？

愛紗「流石はご主人様」

彼女達が喜ぶ様子を見ると、彼がどれほど信頼されているかは分かる。

リンディ「まさか・・・これほど強いなんて・・・」

？？「あいつが強いのは当然だ。なんせ失ったのは  
やないのだからな」  
一人じ

リンディ・クロノ「！？」

私達の背後に突然現れた朝我さんそっくりの少年。

朱里「夜我さん・・・」

夜我「よつ。お前らの魔力を追いかけて来んだけど、まさかここに

来るとはな・・・まあいい。愛紗達はもう離れていいわ」

そつと私達に武器を向けていた彼女達は夜我さんの隣に並ぶ。

クロノ「君達は、自分たちが何をしていたのかわかつてゐるのか!？」

夜我「別に。俺達は悪いと思つても反省はしない。これが・・・悪くても正しこと思つてゐるからな」

そつと彼らはモニターに目を向けた。

夜我「あいつの為なら、どんな無茶でもしてやる。あいつが・・・あいつしか、変えられないんだ」

そつこいつと、モニターに大きな変化が発生する。

全員「「「「「...」」」」

なのは「私・・・友達に、なりたいんだ」

そう言つてなのははフェイトに左手を差し出す。

曇っていた空に、一筋の光が差し、光はなのはを照らし・・・そして、徐々にフェイトに近づいて行つた。

俺は武装を解除して、二人のその光景を見つめていた。

『次元干渉、別次元から、本艦及び戦闘区域に向けて、魔力攻撃来  
ます！！』

全員「……！」

朝我「魔法攻撃……なつ！？」

その瞬間、曇天の空に、雷が現れた。

渦巻く雲の中に広がる闇。

そこから、紫色をした雷が降り注いだ。

フェイト「か……母さん……」

朝我「母さん……」

瞬間、紫色の雷がフェイトに向かつて襲い掛かる。

朝我「！？蜻蛉切！……！」

俺はフェイトから少し離れ、蜻蛉切の刃にフェイトを彫した。

朝我

蜻蛉  
帰り

！――――――

刹那、俺とフェイトの位置は入れ替わり、フェイトに向かっていた紫色の雷は俺に襲いかかった。

巨大な電気の弾ける様な音を出しながら、俺に強力な雷が襲いかかる。

なのは「朝我さん……。 もやつ……。」

なのはは俺に近づこうとするが、様々な位置から襲い来る雷に身動ききが取れずについた。

朝我「なのは、俺は良いから自分を守れ！！」

なのは「・・・うん！」

そいつてなのはは自分の真上にプロテクションを張り、迫り来る雷を防いでいた。

フェイト「朝我！？」

朝我「フェイトも、俺はいいから・・自分を優先しろ！」

そいつてなのはは自分に迫る雷を避け続ける。

そしてじぱいくして、雷は止んだ。

なのは「朝我さん！――！」

朝我「ぐつ・・・うつ・・・」

俺は全身に火傷の痕が残り、水面の上で膝をついていた。  
ゴーノ「待つて！今すぐ治療を！」

そいつてゴーノは俺に治癒魔法をかける。

緑色の光が、俺を包み込んでいく。

朝我「すまない。迷惑かける」

ユーノ「迷惑なもんか。人を護るために出来た、男の傷だよ

朝我「・・・」

少し照れることを言われ、俺は頬をポリポリかいてしまつ。

フュイト「つー?」

だがそれだけでは終わらなかつた。

フェイトの足元に紫色の巨大な魔法陣が展開され、光を放ち始める。

ユーノ「あれは・・・転送魔法!?」

なのは「え!?!?」

フェイト「母さ、あの句を・・・。」

アルフ「くっそ、あの鬼婆!...」

朝我「!?!?フェイト!...」

俺はユーノの治癒を途中で中断させ、  
瞬間魔力換装ブリューゲル・ブリッツでフェイトのも

とに向かった。

朝我「フェイト・・・フェイトオオオオオオオオオオオオ！－！－！－！－！」

俺は全力で腕を伸ばす。

フエイト「朝我……！」

フエイトは俺の手に気付いた。腕を伸ばす。

フェイトの苦しそうな・・・悲しそうな・・・何かを怖がる表情を見て、俺は必死に手を伸ばす。



だが、フェイントは紫色の光に包まれ、3つのジュエルシードと共に姿を消した。

俺は空を掘み、バランスを崩して水面の上に落水する。

朝我「つぐ・・・・くつそ・・・・・」

俺ははうつ伏せに倒れながら、掘むことのできなかつた右手を見つめる。

アルフ「ぐつ！－！」

アルフは悔やみながりも、空中に浮かぶ残り3つのジュエルシードに手を伸ばす。

朝我「つぐーーー！」

俺は蜻蛉切を再び握り、刃にアルフを<sup>写</sup>す。

そう言つてアルフは俺に殴りかかる。

そして俺とアルフの位置は入れ替わり、俺はシニエルシートを手にする。

アルフ「なつ！？」

アルフ「それを渡せええええええーーーーー！」

なのは「朝我さん！！」

ユーノ「朝我！！」

二人が俺に声をかける。

それもそのはず、俺の体力は既に限界を超えてる。

先程の雷と、ブリューゲル・ブリッツ瞬間魔力換装・・・そして先の戦いで消耗した体力。

更には蜻蛉帰りの連続使用。

体に負荷を与えすぎた。

朝我「（避けれないか・・・っ！）」

俺は目を閉じて、覚悟した。

なのは「ディバイン

バスター！！！！！」

アルフ「つ！？」

だが、なのはが咄嗟に俺とアルフの間に砲撃を放ち、アルフを警戒させる。

ユーノも魔法陣を展開させて構える。

俺もギリギリながら刀を構えて、絶対的不利を証明する。

アルフ「・・・・・ウフ――!――!――!――!」

アルフは悔やみながらも去つていった。

朝我「つく・・・そ・・・・・」

なのは「朝我さん！――！」

そして疲れ果てた俺の意識は

ここで途切れた。

## 届かない手（後書き）

『ブリューゲル・プリツツ』　『蜻蛉帰り』の短所。

ブリューゲル・プリツツ  
瞬間魔力換装

一瞬だけ己の魔力を爆発的に高め、自らに取り込み固定することによって自身が弾丸のようになつて移動することが出来る身体能力の強化魔法。

時空間すらも歪めるほどの魔力爆発が発生するほどで、そのスピードは光速をも凌駕するが、魔力消耗が激しいので長時間の使用には向かない。

更に魔力爆発による衝撃や、身体の限界を超える速度での移動などで、多用すると体力も減る。

『蜻蛉帰り』

刀身・刃などに『』されたものと自分の現在位置を入れ替える技。

だが発動した瞬間、自分の現在位置の変化に対応するために脳が情報整理するために脳に大きな負荷がかかるので連続使用は10回が限界である。

IKA「こんな感じだった予定ですが、せっせと紹介しつければよかつたですね」

## 罪を背負ひ事の意味（前書き）

今回は朝我の過去を少しお話します。

近づいてまた何か「ワガボカ番外編をやろうかな」と計画中（それ  
はともかく寒い）

## 罪を背負ひ事の意味

No Side

戦いから3時間程が経ち、朝我はアースラの病室の個室で寝ていた。そこには戦いの後に駆けつけた桃香達は病室の壁に背をあずけて立っていた。

なのはとゴーノは椅子に座つて朝我を見つめていた。

夜我「皆・・・・つて、揃つてるみたいだな」

しばらくして、夜我はクロノとリンクディの2名を連れて病室に入る。

なのは「あの・・・朝我さんは・・・」

心配そうな表情で夜我達に質問するのは、夜我は安心するようにと優しい笑顔で言つ。

夜我「安心しろ。命に別状はない。ただ、今までの疲れが一気にやつてきた・・・つてところだ」

そう言つと夜我は朝我の額にジトコパンを食らわせてから皿へ。

夜我「つたぐ、毎日さくに寝ないでジューエルシード、ジューエルシード・・・三度の飯よりジューエルシードじや、体がボロボロになつて当然。それも先の戦いは激しそうだ」

ゴーノ「どうしたの？」

夜我「簡単なことだ。ここには、身も心もボロボロだったんだ

その一言には心配そつた表情で朝我を見つめ直す。

桃香「朝我さん・・・」

愛紗「あの時と・・・今も変わらなかつたのですね」

鈴々「お兄ちゃん・・・無茶し過ぎなのだ」

そう言つて、皆も同じ表情をする。

それだけ、朝我の事が心配なのだろう。

クロノ「でだ。話してくれないか？彼に・・・何があつたんだ？」

夜我「・・・そうだな、少しだけ・・・話してやるよ」

そう言って夜我は、朝我の過去を・・・話し出す。

夜我「朝我は好きな人を助けられなかつた。護れなかつたんだ」

俺は六課にいた頃の朝我の話をした。

夜我「あいつは不器用で無愛想だつた。そのせいで友人と呼べる友人はいなくてさ、チーム戦とか点でダメで、いつも単独行動しかしなかつた。更にあの時の朝我の魔力ランクはA.A。周りにはオーバーSランクの同期が何人もいたから、あいつは孤立していた」

クロノ「ちょっと待て！ オーバーSが多数いる部隊なんて聞いたことがない！！」

夜我「その辺は無視してくれ。それに、これは“今の話しじゃない”

そう言つて再び話しが続ける。

夜我「そんなあいつに、ずっと話しかけて・・・接してくれる人が何人かいた。それが・・・あいつの好きだった人達だ」

～あの時～

？？？「また、一人でいるの？」

やつぱり舌をかける栗色の髪の女性。

？？？？「一緒にお皿どうつかな？」

やつぱり来れる金髪の女性。

？？？？「せや、今度家来るか？」

やつぱり舌をかけてくる茶髪の女性もいた。

朝我「俺、

の事、好きです」

あこつは好きになつた想いを伝えた。

けれど想いは届かず・・・

????? 「えへへ・・・嬉しい・・・ナビ・・・」「あんね」

????? 「気持ち嬉しいけど・・・私じゅ、無理だよ」

????? 「「」あん・・・嫌いなわけないけど、受け取れんよ

そう言って3人に振られた。

そして“ある事件”によつて、3人は死亡した。

回想終了。

夜我「あの時の朝私は・・・見てるのが辛かつた。悲しみにくれ、何も食べず、寝ることもなく、ただ与えられた業務だけをこなす・・・まさに機械のよつになつて・・・段々やせ細つていった

なのは「え・・・」

なのはやユーノ達は、驚きの表情で俺を見る。

だが俺はそれを他所に話しを続ける。

夜我「弱々しくなつていったあいつの姿。ほんとこあいつはあのう人に事が好きだつたんだなつて思った」

そう言つと、なのはの表情が少し変化した。

・・・なるほど、なのはの想いは変化してたか。

もし・・・この時代のなのはが朝我に告白したら・・・どう答えるのだろうか・・・

夜我「それを一度に失つたからこそ、あいつの悲しみやその傷は大きかつたんだ」

俺は忘れない、あの時の・・・朝我の悲しみに暮れる姿を。

（再びあの時）

3人の葬式には、両親も駆けつけた。

俺や桃香達も勿論行つて。3人を送つた。

だが・・・朝我はその日、ボロボロだつた。

3人のうちの一人の家族・・・兄に殴られていたんだ。

兄「お前が……お前のせいだ……なのはは……」

朝我「ぐつ……がつ……ぐふつ……」

降りしきる雨の中、黒い服を着た一人の姿。

そしてボロボロになつていいく朝我。

だけど朝我は……表情一つ変えず、ただ彼女の兄の拳を受け続けた。

俺は止めに入らうとしたが、朝我は俺に念話で『手を出すな』と言つて、兄が止めるまで続けた。

朝我は、まるで血ち傷つくことを望んでいたかのようだつた。

まあそれでしか、自分を満足させることが出来なかつたんだらうつな。

それからしばらく、あいつは3人の関係者・・・同僚とか上司とか部下とか家族の人全てに会いに行って謝罪の日々を送った。

当然、あいつを受け入れてくれる人なんて極僅かの人のみで、大半は朝我に『人殺し』『お前のせいで死んだんだ』『お前の様な足で纏いがいたから』『この役たたず』って言ってたらしい。

回想終了。

夜我「あいつは、背負つてきた全てを償う為に向かつたけど、やっぱり償いきれないんだ」

なのは「そんな・・・」

なのはは悲しそうな表情をする。

夜我「なのは、これが・・・『失う』って言つことの責任だ。後悔する数が多い程、背負うものが多くて、一人で償うには重すぎる荷を背負わないといけなくなる。それを、今のうちに覚えとけ」

なのは「・・・はい」

クロノ「なるほど・・・だから、あんな事をするのか」

リンディ「それだけ、大切な人だったのね」

夜我「そうだ。だからあいつは、やり直す為にここにいるんだ」

ユーノ「やり直すって・・・」

??.「おい・・・」

全員「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

皆がその声に、驚きの声をあげる。

夜我「朝我・・・」

朝我が、田を覚ました。

朝我「おい・・・何勝手に喋つてんだよ」

夜我「悪いな。だけど、全ては話してない」

朝我「そういう問題じゃ・・・無いだろ」

そつと上半身だけを起き上がりせる。

朝我「今の話しあは氣にするな。忘れてくれ」

そつと朝我は起き上がり立てる。

なのは「朝我さんー?」

クロノ「無茶をするな。まだ回復していない体で・・・」

朝我「五月蠅い。無茶してでも・・・やりたいんだ『ふざけないで  
ください!!!!!!』つー?」

その瞬間、朝我の頬を力いっぱいに叩く、なのはの手の音が響きわ  
たった。

朝我「なの・・・は

朝我はヒリヒリと痛む叩かれた場所を抑える。

なのは「忘れる」となんて・・・出来ないよ。今まで、一緒に戦つて・・・頑張ってきたんだもん！今更大切な事を聞いて忘れるなのて・・・出来ないよ・・・」

そうつ言って朝我の胸に顔を埋めて泣き出す。

朝我「・・・だけど、なのはには関係ない」

なのは「関係無くても・・・私は力になりたいの！・・・私は、朝我さんの力に・・・なりたいの！！！」

夜我「つ・・・」

俺は、懐かしさを感じた。

それは、六課にいた頃のなのはに言われたあの言葉。

『お願い。私には・・・出来ないから、だから・・・朝ちゃんの  
傍にいてあげて』

『俺が?出来るかな・・・』

『うん。それで・・・朝ちゃん、やつと戻るから・・・助けて  
あげて』

『夜我君。『めん、朝ちゃんの事・・・振ったんだ  
・・・やうか』

夜我「・・・」

朝我「・・・すまないな、それじゃ・・・少しだけ」

そう言って朝我は、なのはを抱きしめた。

二人の距離が、近づいた光景だった。

## 罪を背負つ事の意味（後書き）

今回はまあ朝我の過去を夜我が勝手に話してしまったと言つておきますね。

Stasなのはの想いや初期なのはの想いは変わらないですね。  
わがままだつたり・・・全力全開だつたりと・・・

次回と後一話終えて“多分”決戦となります。

## 記された言葉と、彼女なりの答え（前書き）

今日はちょっと長じ回になるかと思こますので、多分飽きる人が続  
出…？

…うん。最近寒くて脳みそもカツチカチの可能性（－－－）

## 母わらわの言葉と、彼女なりの答え

フロイト Side

フレシア「フロイト……起きなさい」

私は母さんのもとに戻された直後、母さんからのお仕置を何時間にも渡つて受けた。

だけどそれは、私が悪いから……

母さんの声で、私はまだみから覚める。

フロイト「はい、母わらわ」

見上げると、母さんがジュエルシードを広げて、言った。

フレシア「あなたが手に入ってきたジュエルシードが九個。これじゃまだ足りないの。最低でもあと五個、出来ればそれ以上。急いで手に入れて来て　　母さんの為に」

フロイト「……はい」

起き上がると、私は気になら」と書いた。

フロイト「アルフは……？」

フレシア「ああ、あの子なら逃げ出したわ。『怖いからもつ嫌だ』

つて

その言葉を聞いて、悲しさと同時に嬉しさが込み上げてくる。

アルフにはいつも苦労掛けてばかりだから、別の場所で幸せに暮らしてくれるのなら、それでもいい。

ここから先は、アルフまで巻き込むわけにはいかないから・・・

フレシア「必要ならもっと良い使い魔を用意するわ。忘れないで、あなたの本当の味方は母さんだけ。いいわね・・・フュイト」

「フュイト」・・・はい

そう言って私は、再び部屋を出て行つた。

夜我 Side

夜我「クロノ、話しつてなんだ?」

翌日、俺はクロノとハイミーの2名に呼ばれた。

朝我は病室で桃香達に監視されてる・・・『愁傷さま』と。

クロノ「ああ、丁度今・・・』フェイト・テスタークッサ』の情報が手に入ったから説明しようと」

夜我「それだつたら朝我達も呼べばいいじゃん

クロノ「いや、今はまだ・・・彼らに伝えるのはどうかと判断したから、まずは君に伝えてから判断してもらおうと思つたんだ」

なるほど・・・それほど重要だつてことか・・・。

俺も、朝我も知らない・・・フェイトの過去と、フェイトと並んで「人の少女の正体。

クロノ「まず、『テスター・サ』と言つ名で判明したよ。彼女の母の名は『プレシア・テスター・サ』と言う人だ。26年前は中央技術開発局の第三局長でしたが、当時彼女個人で開発していた次元航行エネルギー駆動炉の実験を行い、失敗。結果的に、中規模次元震を起こしたことによつて、中央を抜けて地方へと異動になつたとする」

夜我「だがその後、行方不明になつた……とか？」

そう言つとクロノ達は無言で頷く。

夜我「……それ以外の家族の情報は？」

エイミィ「駄目。そのへんは何も無いの」

夜我「そうですか……分かりました。ありがとうございました」

そう言つて俺は部屋を出る。

ジュエルシードは願いを叶えると言われている。

例えば・・・誰かを失つたとか・・・

この中規模次元震・・・ここで何かがあつたのではないか?

『結果的に、中規模次元震を起こしたことによつて、中央を抜けて地方へと異動になつたとある』

俺は、ある仮説を立てていた。

夜我「・・・まさか・・・な

それを多く集めれば、大きな結果が出るはずだ。

だが、それが証明されたのは、まだ朝我一人を置いて他にはいない。

朝我が発動した・・・あの武装。

あれ以外、ジュエルシードが叶える願いなんて・・・誰かを傷つけることしかできない。

だとしたら・・・ジュエルシードは他の存在意義があつたのでは？

例えば・・・そう、起こり得ない奇跡を起こす・・・とか。

まさか・・・な。

俺はやはり、一つの仮説をたてて・・・その仮説を疑ってならぬ。

夜我「もしかしたらジュエルシードは・・・存在しないはずの・・・  
“あの場所”への道なのか！？」

そう思った俺は、クロノ達が教えてくれた情報を、朝我達には教えない決め、再び歩きだした。

朝我「もう大丈夫だつてば」

愛紗「体が良くなるまでの辛抱です」

朝我「はあ・・・暇だあ」

朝我 S.i.d.e

桃香「とか言つて、また無茶すると困るんです！」

朱里「そうですよ。」<sup>1)</sup>主人様は今後の戦いの鍵を握つてるんですから、休む時はしっかりと休んでいただきないとお」

そう言わると、自分と言つ存在の大切さを感じる。

朝我「あれ、そつ言えばなのはは？」

星「彼女なら鈴々と翠の2人と共に一度地球に戻られました」

朝我「そつか・・・何にもなれば良いんだけどな・・・」

正直言つと、俺は焦つていた。

今、フェイトは無事なのかと・・・無事であつて欲しいと、心の底から願つていた。

届かなかつた手・・・それだけが、俺を苦しめたけど・・・

『関係無くても・・・私は力になりたいの！！私は、朝我さん  
さんの力に・・・なりたいの！！』

朝我「・・・変わらないんだな」

桃香「え？」

朝我「あ、いや・・・なんでもない。ただの独り言」

そう言って、俺は天井を見上げる。

桃香「なんか、嬉しそうですね」

朝我「え？」

愛紗「と言いますか、ご主人様・・・変わりましたね」

朝我「何が？」

星「確かに・・・なんというか、角が消えて丸くなつたような・・・  
そんな様な感じだな」

いや。さっぱり分からぬ。

紫苑「あの子に抱きつかれて嬉しかったのですか？」

朝我「ちよつ！別にそんなんじゃない！」

そつ言つて弁解するが、桃香や愛紗は疑いの眼差しで俺を見る。

桃香「・・・そなんですか」

朝我「桃香！？ち、違うからな！別に下心があつたわけじゃないでだな！？」

愛紗「ですが、あの時の（）主人様の行動は、如何なものかと」

朝我「そ、それはあ・・・」

徐々に（何故か）追い込まれていく俺。

朝我「こ、この話はもう良いだろ！？」

桃香・愛紗「良くな（ない）・ありません）」

そつ言つて俺は1時間かけて二人を落ち着かせる努力をした。

・・・って、朱里達は止めるの止めてくれたって良いだろ・・・

なのは Side

すずか「なのはちゃん!—良かつたあー元氣でーー!」

昼休みと同時に、すずかちゃんが駆け寄ってきて喜んでいた。

なのは「うふ。ありがとー、すずかちゃん。・・・アリサちゃんも

セツヒトアリサちゃんを見ると、腕を組んで顔を背けていた。

「アリサ「ま、まあ、元気みたいでよかつたわ」

なのは「いやせは・・・」

すずか「あはは・・・」

そんな久しぶりに見る態度に、私は今までの緊張が溶けたみたいに笑った。

なのは「とりあえず戻つて来れたんだけど、まだやらないちゃいけないことがあるから戻らないといけないんだ」

私は近い内にアースラに戻らないといけない。

それは、ジユエルシードの事・・・フハイトちゃんの事があるから、またすぐにモビルJとになっちゃう。

それでも、この事件が解決すれば・・・また平和な日常に戻れるはずなんだ。

すずか「・・・大変だね」

アリサ「でも、決めたんでしょう？」

すずかちゃんが心配げに、アリサちゃんが諦めたように問いかける。

なのは「うん、大丈夫」

もひ、後には戻れない。

そんな世界まで、来てしまった。

朝我さんは、こんな今を望まない為に、私を何度も説得した。

けれど、これは私が選んだ・・・決断したこと。

間違いとは思っていない。

すずか「放課後少しくらいなら遊べる?」

なのは「うんー。」

アリサ「それじゃ集合場所は家にしましょ。新しいゲームもある  
し」

アリサ「そういえば、タベ怪我してる犬を拾つたの」

なのは・すずか「「犬?」「

アリサちゃんがそう言つて、私とすずかちゃんは聴き直した。

アリサ「うん。変わった子なんだけど、凄くいい子。よかつたら会つてあげて」

なのは「うん」

私は放課後を楽しみにしながら、勢いよく頷いた。

そして私はフーレット姿のユーノ君を連れてアリサちゃんの後をついていく。

すずか「で、アリサがタベ拾つた子ってのは?」

アリサ「あ、ほら着いた。この子よ」

私達を守る檻の前から声に、視線をそぞろに向けると。

なのは・ユーノ「「！？」」

私とユーノ君は、アリサちゃんが言つていたその『犬』を見て驚いた。

なのは『アルフさん？』

アルフ『・・・あんた達か』

私達は念話で話しを始める。

なのは『フロイトちゃんは？』

アリサ「あれ？元気なくなっちゃった。どうした？大丈夫？」

すずか「傷が痛むのかな？そつとしどいてあげようか」

なのは「あ、ユーノ君が興味あるみたいだね」

そう言つて私はユーノ君を置いてアリサちゃんと一緒に部屋に戻りました。

でも念話は繋いだまま。

ユーノ君は前にアリサちゃん達に紹介してるので、今言われても驚きません。

アルフ《あなたがここに居るということは、管理局の連中も見てるんだ  
だひうね?》

クロノ《時空管理局、クロノ・ハラオウンだ》

やつひとクロノ君が念話に入つてきました。

《どうも事情が深そうだ。正直に話してくれれば、悪こようにならない。君のことも、君の主、フュイト・テスター・サのことも・・・》

アルフ《話すよ・・・全部》

素直にアルフさんは答えました。

アルフ《だけど約束して。フェイドを助けるつて。あの子は何も・・・

・何も悪くないんだよ》

やつひとアルフさんは素直に全てを答えた。

朝我 Side

クロノ「朝我、全部聞いたか？」

朝我「ああ。そういう事かよ・・・」

アースラの中で、俺はアルフの話しを聞いた。

クロノ「君達の話と、現場の状況、そして彼女の使い魔、アルフの証言と現状を見るに、この話に嘘や矛盾はないみたいだ」

朝我「まああの状態で嘘なんてつく訳ないけどな」

そう言つて俺は率直な質問をする。

朝我「プレシア・テスタークサは逮捕出来るか?」

クロノ「勿論可能だ。今までの証言、アースラを攻撃。これだけあれば、逮捕の理由にはお釣りが来る」

クロノも怒つてゐるのか、言葉の端々に怒りを滲ませながら即答する。

朝我「なるほど……な

俺は軽く体調が良くなつたかを確認するために両腕を振つたりして確認する。

うん、問題はなさそうだ。

クロノ「僕たちは艦長の指示があり次第、プレシアの逮捕をする」とになる。君達は、どうする?」

君たちとは、俺や夜我そして……なのほどコーンへの質問だ。

朝我「俺は決まつてゐる。『今回は』管理局の味方をする」

夜我「俺は朝我についていく……それだけだ

朝我「お、来たか」

俺たちの間に夜我も入ってきた。

朝我「後は・・・なのは」

なのは「私の想いは、決まってるよ。フェイトちゃんを

けたいの」

助

朝我「なのは、頼んだ。俺はなのはの不可能を持つてく。だからな

俺は、役不足だ。

だけど、ホントの意味で助けてあげられるのは・・・なのはしかい  
ない。

朝我「・・・ああ

のは、可能だけを持つて、あいつを助けてやつてくれ……」

なのは「・・・うそ……」

そして

翌日。

海鳴臨界公園にて、なのはは・・・待っていた。

フェイト」・・・

悲しい運命を背負つ

独りの少女を。

なのは「ただ捨てればいいってわけじゃないよね・・・逃げればいい  
ってわけじゃ、もつとない」

なのははレイジングハートから持てる全てのジュエルシードを出す  
と、フロイトも同じようだ。

なのは「きっかけは、あいとジコエルシード。だから賭けよつ、お互いが持つてゐる、全部のジコエルシードを……」

そう言つて再びジュー・エル・シードをお互いのデバイスに仕舞つ。

それから。私たちの全ては、

なのは「それからだよ。全部  
まだ始まつてもいない」

そして彼女達は、  
B・Jを着る。

なのは「だから、本当に自分を始めるために、始めよ!」

そしてお互いにデバイスを構え、空を飛ぶ。

なのは

『-----』

最初で最後の本気の勝負

はれなみの葉とい、彼女なりの答え（後書き）

とつとつひるの回まで来ましたね。

来年のなのはの映画までにはA、Sに入つて良こと今まで行きたい  
なつて目標ですよほー。

戦う者と、戦いを見る者（前書き）

よつやくじにまで来た！！（一ヶ月ちょっと）

劇場版でも大人気+なのはの評判が一瞬だけ下がったあの決戦！

前売りを10枚ほど貰つて何度も僕は見ましたが・・やはりあれは  
鳥肌たつ。

戦う者と、戦いを見る者

ホワイト Side

「いいじめでも晴れ渡る青空。

そこに広がる草原に、仲良く並ぶ人影が二つ。

・・・そつか、こには・・・

田の前で花の髪飾りを作る女性を見て、私は理解した。

これは、#日の夢。田の前にいるのは母さん。

いつも優しかった、私の母さん。

私の名前を優しく呼んでくれた、母さん。

フレシア「出来たわ。ねえ、とても綺麗でしょう

アリシア」

え・・・アリシア?

違つよ母さん、私は フェイトだよ?

フレシア「ああいらっしゃい。 アリシア」

母さんの呼び掛けに、私が近寄つていく。

その頭に髪飾りを載せた母さんは、桜の様に柔らかく微笑んだ。

フレシア「ほら、可愛いわ。ねえ アリシア」

母さんの笑顔を見た私は、ただ無言で微笑む。

まあ・・良いの・・・かな?

母さんが笑つてくれるなら。

私の名前を呼ばれないくらい、大したことじやない。

そう言つて私は、求めていた笑顔の母さんに、満面の笑で返した。

フェイト「・・・全て、幻想だよね」<sup>ゆめ</sup>

そう言って私は白いBを着た桜色の光を放つ女の子を見つめる。

私に何度も何度も声をかけてくれた子。

フェイト「（それでも私は・・・あの笑顔の母さんが・・・大好きだから）」

そう言って私はバルディッシュを構えた。

（絶対に  
負けない！）

朝我 Side

朝我「・・・」

俺はなのはとフェイトの戦いをクロノ達と共に見ていた。

エイミィ「しかし、ちょっと珍しいよね。クロノ君がこうこうギャンブルを許可するなんて」

クロノ「なのはが勝つに越したことはないけど、あの一人の勝負自体。どちらに転んでもあまり関係ないからね」「

そう言いながらクロノはエイミィのアホ毛の手入れを手伝つ。

朝我「なのはが戦闘で時間を稼いでくれている内に、フェイトの帰還先追跡の準備をしておくだつたよな？」

クロノ「ああ。・・・頼りにしてるんだからね。逃がさないでよ？」

取り出したヘアスプレーを吹き、エイミィの髪をブラシで整えながら咳く。

エイミィ「おおー！任せといて！！

と、胸を張つて言つが、整えたはずのアホ毛が再びその姿を露にする。

エイミィ「あう・・・」

朝我「（ 、 、 ） ハア…」

夜我「かつこつかねえな・・・

そつ言つて俺と夜我は盛大に溜息をつく。

エイミィ「でもあること、彼女に伝えなくていいの？・フレシア・テ・スタロッサの家族と、あの事故のこと

そう言つと、クロノは今まで以上になのは達を真剣に見る。

クロノ「勝つてくれるに、越したことないんだ。今は、なのはを迷わせたくない」

朝我「・・・そう、だな」

夜我「・・・」

俺達は再び、なのは達を見る。

朝我「今は・・・願うしか・・・無いんだよな、俺は」

そう言つて、自分の無力さを・・・悔やみながらなのはを見ているのだった。

フェイタ Side

フェイタ「・・・強い」

それが、素直な答えだった。

あの子と初めて出会った時、凄く弱かつた。

正直、私の相手ではないほど・・・

けれど、今日の前にいるあの子は・・・私と互角に戦っている。

こんなに短い期間で、こんなに強く成長するなんて・・・思つてみなかつた。

『友達に、  
なりたいんだ  
』

私なんかの為に・・・」今まで強くなつてくるなんて・・・

「ホイト」（・・・考えるな）

そう言つて私は再びあの子を見つめる。

「ホイト」（やられる前に・・・やるーーーーー）

バルディッシュを構えた私は、足元に極大の魔法陣を描いた。

なのは「――？」

バルディッシュを構えると同時に、足元に極大の魔法陣が展開される。

なのは「つー？」

私は動こうとしたした瞬間、周囲に現れては消える魔法陣が展開され、私は動くことが出来なくされてしまった。

私の周囲に雷が集束し、いくつもの弾丸を生み出していく。

なのは「ぐつ・・・」

ビービーかじよりとした瞬間、両手を光り輝く輪で拘束される。

アルフ《ライトニングバインド　！？やばい、フュイトは本  
氣だ！！》

ユーノ《なのは…今からそつちに・・・》

なのは「駄目…………！」

アルフ《でも、フュイトのそれは本当にやばいんだよ…》

なのは「でも…これは、私とフュイトちゃんの問題だから…」

」

フェイト「…………アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ち掛けられ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

詠唱を終えた私は、あの子を見る。

これだけの魔法を展開しているにも関わらず、あの子は私を真っ直ぐに見つめていた。

フェイト「フォトンランサー・ファランクスシフト……撃ち碎けファイア……！」

私の声に応え、雷の槍が四方八方から襲い掛かる。

あの子に激突し爆煙を上げるが、それでも私は執拗に雷を叩き込む。

フヨイト「はあ、はあ、はあ・・・」

最後の一発を、駄目押しどばかりに叩き込んだ。

そして爆風が去るのを待つた。

N o S i d e

なのは「うひ終わると、バインドつてのも解けちゃうんだね」

そう言ってなのはは爆風の中から現れ、レイジングハートを構え、魔力を集める。

なのは「次はいつの

レイジングハート」「ディバイン

」

なのは「 番だよーーー！」

レイジングハート」「 バスター」

そつとつてなのははフュイトちゃんに砲撃を放つ。

フロイトはプロトクションで直撃を防ぐのです。

フロイト「（直撃……でも、耐えきる。あの子も、耐えたんだから…）」

セツヒツしてフュイトは全力で防ぐ。

「フュイト」はあ、はあ、はあ、はあ・・・  
何とか防ぎきるが、まだそれだけでは終わらなかつた。

「フュイト」?

上を向くと、なのはは空氣中に散りばつた魔力を一点に集結させていた。

なのは「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション……！」

レイジングハート・スター・ライト・ブレイカー

その声とともに、まるで小さな流星の様に、なのはのもとで桜光が集まる。

そして小さい球体が、徐々に徐々にその大きさを増していく。

「フ…イト」・・・「…！」

フ…イトは動こうとするが、先ほどなのなのはの様に、バインドにかかるで身動きが取れなくなつた。

なのは「これが私の、全力全開！――――！」

そしてなのはは

その想いを、全力で放つ。



そして溜にたまつた膨大な魔力は一直線にフェイトに向かっていく。

バインドで身動きの取れないフロイトは、そのまま直撃を受けることとなる。

朝我「・・・」

夜我「あ、おい・・朝我！」

突然、朝我はアースラから出ていった。

それを追いかける夜我。

そう、決着が着いた。

高町なのはが、決戦に勝った瞬間だった。

戦ひ者と、戦ひを見る者（後書き）

今日は内容に一切の深みが無いですね（普段からないけど）

ああ・・・今日は一〇日。

クリスマスまであと一週間くらいかあ・・・

## 裏切りの運命（前書き）

この勢いだつたら来年までにはA、Sに入ってるかなあ・・・  
まあSatoshiまで行つたらvideoとかforceをやるかやらな  
いか分からぬ。

## 裏切りの運命

朝我 Side

朝我「なのは、フェイト」

なのは「あ・・朝我、さん」

朝我「おっと・・・」

なのは達のもとにつくと、なのはは安心したのか、俺の胸に倒れた。

なのは「い・、めんなさ」――――――

朝我「いや、お疲れ様。夜我！」

夜我「大丈夫、気絶してただけみたいだ」

夜我はフェイトを抱きかかえてくれている。

フェイト「う・・・ん・・」

なのは「フェイトちゃん・・・」

フェイトは田を覚ますと、バルティックシユを持つてなのはに会った。

フェイト「・・・私、負けたんだね」

なのは「うん」

フュイト「それじゃ……」

そう言つてバルティッシュの中からジュークホールシード全てが出てきた。

夜我「飛べるか?」

フュイト「・・・」

フェイテは無言で頷き、夜我の腕から降つるよつに飛ぶ。

クロノ『なのは、朝我、夜我。ジュエルシードを確保してそれから  
彼女を・・・』

ハイミィ「待つて  
来た!――」

朝我・夜我「「つーっ」」

すと空に浮かぶ雲が渦を巻、渦の中心から再び紫色の雷が襲い来る。

朝我「っく・・・ハイミーー。」

俺は誰よつも速く反応して顎を抱えてその場から離れる。

朝我『

ブリューゲル・ブロッツ  
『瞬間魔力換装』

』

エイミィ《既に見つけてるよー!転送を始めるからー》

そつ言ひつと俺達の足元に発生した転送魔法陣をだして、アースラに転送された。

リンディ『武装局員、転送ポートから出動!!任務は、『プレシア・テスター・ロジサの身柄確保』です!』

そつ言ひつとがくの武装局員の返事と共に、転送されていった。

フレシア「がはつー！」

大量の血を床に吐きながら、どうにか奪取したジュエルシードを見遣る。

フレシア「次元魔法は・・・もつ私の身体が持たないわね」

口元を拭い、隣に飾られた円形の水晶に視線を送る。

フレシア「それに、今までこの場所も掴まれた。  
あの子じゃダメだわ・・・」

フェイト、

そう言いながら血の付いた手を見る。

フレシア「そろそろ・・・潮時か・・・」

朝我 Side

俺たちは驚きを隠せない状況だった。

フレシアのもとに何人もの局員が向かった。

だが、フレシアの抵抗によって全滅。

今はこちらに再び転送されようとしていた。

そしてフレシアは大きなカプセルの中に入る金髪の少女を見ながら俺たちに言つ。

フレシア『私のアリシアに

近寄らないで！――』

朝我「アリシア・・・？」

夜我「フェイトにしか見えないな・・・」

そう、その子の姿はフェイトと瓜一つ。

眠りについている様子は、まさに眠れる姫。

フェイト「アリ・・・シア・・・」

朝我「・・・」

フェイトの姿は、手に手錠がかけられ、白い服に変わり、バルデッシュが待機モードで手に持たれる。

そして戦いの後だからか、はたまたアリシアと言ひ少し女の登場からか、弱々しいものとなっている。

プレシア「もう駄目ね、時間がないわ。たった九個のロストロギアでは“アルハザード”に辿り着けるかどうかはわからないけど・・・

「

愛おしげにカプセルを撫で回しながら、プレシアは呟く。

プレシア「でももういいわ・・・終わりにする。この子を亡くしてからの時間を・・・」

こちらに視線を向け、何かに取り付かれたかのように独白を続ける  
プレシア。

プレシア「この子の身代わりの“人形”を、娘扱いするのも

全員「「「「「！」？」？」？」」

全員が驚く。

朝我「人形……だと？」

プレシア「そうよ。人形とはそこにいるあなたのことよ  
エイト」

プレシア「せつかく『アリシアの記憶』をあげたのにそつくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない  
私のお人形」

お前の人形？

エイミィ「最初の事故の時にね、プレシアの実の娘　　『アリシア・テスタークサ』を亡くしている。彼女が最後に行っていた研究は、使い魔とは異なる、『使い魔を越える人造生命の生成』」

エイミィが悲しそうな表情でそう言った。

夜我「そして、死者蘇生の秘術。『フュイト』って名前は当時、彼女の研究につけられた開発コードだ」

朝我「なつ・・・・・？」

そんな・・・それじゃ・・・フュイトは・・・

・・・いや、その前に！？！

朝我「おい夜我、何故その話を俺にしなかった！？」

俺は今、その事実を初めて聞いた。

フレシアが実験の失敗をした・・・それまでは聞いていたが、それ以外は何も聞いていない。

夜我「すまない。だが、話したらお前が何をするかくらい・・誰だつて見当はつく

朝我「・・・・」

確かに、俺だつたらすぐにフレシアの場所をつきとめ、攻めていただろう。

フレシア「よく調べたわね。そうよ、その通り。だけど、駄目ね。ちつとも上手いがなかつた。作り物の命は所詮作り物。失つたも

「の代わりにはならないわ」

朝我「つ！」？」

当たり前のじつをいたまう」カラシアの話は続く。

「アリシア」「アリシア」はもつと優しく笑ってくれたわ。『アリシア』は時々我が儘も言つたけど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた。『アリシア』は、いつでも私に優しかった

朝我

「アリシアの偽物よ。せつばかりあなたは、アリシアの記憶も、あなたじや駄目だった」

なのはが涙ながらに訴えるが、それでもプレシアは止まらない。

ブレシア「アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけのお人形。だからあなたはもう要らないわ。どこへなりと消えなさい

朝我・夜我  
—いい加減にしろ！！！！！！！！

俺と夜我は、怒りの限界だった。

朝我「何勝手に私物にしてんだてめえ！！！フェイトはお前の『物』じゃねえ！！！フェイトはフェイトだ！！！フェイトの存在はフェイト自身のものであつて、誰の物でもないんだ！！！！ましてやフェイトは人形なんかじゃない！！！」

夜我「お前の身勝手に生命そのものまで巻き込みやがつて・・・でめえ、一つの過去の為にどれだけのものを犠牲にすれば気が済むんだ！！！！！」

プレシア「五月蠅い！！！私の・・・私の何を知つてるところのー？」

朝我「知るかよ！！！いや、知りたくもない！！！『家族』を誰一人として幸せに出来てねえじやねえかよ！！！！！」

プレシア「フェイトは、私の人形であつて・・・家族じゃないわ。血もつながつていなのよ」

朝我「違う。血が繋がるから家族じゃない！！苗字があるから家族じゃない！！！生み出されたから家族じゃない！！！」

俺は思い出しながら言つ。

六課にいたころ、俺を家族の様に接してくれた・・・優しき部隊長達の姿を。

朝我「家族に嘘も真実もない！！家族は一緒にいるから家族なんだ！！！男と女が結ばれて夫婦！そして生まれる息子や娘が出来て一つの家族！！息子や娘が結婚してまた家族！！その家族が結婚して家族だ！！！そして家族と家族が集まつてこの世界が生まれてんだ！！！」

俺はフェイトを抱き寄せながらそう言つ。

俺にとって、今のフェイトも・・なのはも、コーノも・・家族だ。

朝我「今ここにいるフェイトは・・この世に生まれた時点で、人として生きる権利を得たんだ。いくらだつて友達を作つてもいい、人を好きになつてもいい、恋人を作つてもいい、将来、結婚してもいいんだ。そして 家族を作つても・・家族になつても良いんだ！――！」

フェイト「…？」

フェイトは驚いてようやく俺を見る。

抱かれているせいか、少し頬が赤いが、俺は気づかずプレシアを睨む。

夜我も、俺と同じように怒りで口調が悪くなっている。

そして俺は、一番の想いを伝える。

朝我「俺はこの世の全てがフェイトを否定しても、フェイトは大切な一人の女だつて言ってやる！！だつて、フェイトは人だから・・・一人の9歳の女の子なんだから！――！」

だがフレシアは、無表情になつて呟つ。

フレシア『ならいい』ことを教えてあげるわ、フュイト。あなたを作り出してからずっとね、私はあなたが

フレシアは一際歪んだ笑みを浮かべ

プレシア  
『

大嫌いだったのよ』

それは、誰もが分かっていて、誰もが聴きたくなかった事実。

だからこそ、誰も口にしなかった事実。

そして、誰も信じないでいようとした事実。

だが、その事実は・・・もつとも聞いてはいけない、独りの運命の  
女の子の耳に入ってしまった。

「フェイド」・・・

フェイドの瞳から光が消え、ゆっくりと倒れていく。

朝我「フェイドっ！」？

間一髪、床に触れる前に抱き留めたが、その手からバルディッシュ  
がこぼれ落ち、

俺の中には、プレシアへの怒りしか・・・無かつた。

それはまるで  
フロイトの心の様に。

バルデッシュは、砕けてしまった。

エイミィ「た、大変大変！…ちょっと見てください……屋敷内に魔力反応が多数！！」

夜我「何！？」

モニターをみると、そこには多数の敵と呼べる機械の様な兵隊がいた。

エイミィ「庭園敷地内に魔力反応、いずれもAクラス！……総数…・どんどん増えています…！」

夜我「あれは…」

朝我「…」

俺達は、決断した。

朝我「なんだ?」  
なのは「朝我さん」

そつと云つてなのはとゴーノはクロノとともに向かっていく。

クロノ「分かつてゐる。行くぞ」  
朝我「クロノ達は・・・頼む」

夜我「心得た」

朝我「夜我。愛紗達と共にプレシアのもとへ。俺はフュイトを一度  
病室まで運ぶ」

なのは「フロイトちやんのこと……後は、お願ひします」

朝我「つー？」「

それは、なのはとフロイトの決戦の前に、俺がなのはに伝えたこと。

なのは「私は、あれしか方法が無かつたけど、朝我さんには朝我さんの方針があるはずだから・・・」

そう言ってなのははクロノ達の後について行った。

朝我「俺なりの・・・」

そう言って俺はフェイトをアルフと共に病室に連れていった。

## 運命を変えてくれる人（前書き）

早くもうこの回まで来ましたねえ～

皆さんの「意見」「感想もあって、結構いい具合に出来てるのでは？」  
（え

そんなこんなで風邪が増えつつあるこの冬を乗り越えながら小説を  
書きますかね。

## 運命を変えてくれる人

朝我 Side

アルフ「フェイト・・・」

朝我「・・・」

俺たちはフェイトを病室に連れて寝かせる。

目は光を失い、この世に絶望している日だった。

朝我「俺も・・・こんな感じだったのかな・・・」

アルフ「?どうかしたのかい?」

朝我「いや・・・俺も前までは、今のフェイトのようだったのかな  
つて思つてさ」

アルフ「・・・何が・・・」

朝我「その話は事件が終わつてからだ。今は・・・フェイトに話があ  
る」

そう言つて俺はフェイトを見つめる。

アルフ「・・・それじゃ、私は行くよ。邪魔になりそつだしね

朝我「……そうしてくれると、少し助かる」

流石、フェイントの相棒だけあるな。

考えてくれて……一番の方法を選んだ。

アルフ「……フェイントの事……お願い」

そう言って、アルフは病室を出た。

朝我「さて……と、フェイント……大丈夫か?」

フェイント「……」

フェイントは返事をしない。それだけ……ショックなんだ。

俺に出来る……フェイントを助ける方法か。

なのは……俺は、どうすればいいかな?

迷わなくて良いよ。

なのは《・・・言葉は誤解を生む。けれど、誤解を生まない様にすること》だつて出来るし、もし言葉に迷つたら、行動すればいいと思うよ。私は、言葉では伝えられないから、行動で伝えたもん』

朝我「・・・そ、か。ありがと」

なのは《「うん。頑張つて・・・フェイトちゃんを、助けてあげてね》

そう言つて、なのは再び姿を消した。

朝我「・・・」

俺はフェイトの額に手を添えながら言つ。

朝我「フェイト。俺には、家族を裏切られた気持ちが・・・よく分からない。だけど、失った悲しみなら、苦しい程分かる。俺も・・・結構失つてるからな」

苦笑いしながらそう言つて、フェイトは掠れる声で俺に質問した。

フェイト「それじゃ・・・どうして、笑つてゐの・・・」

朝我「・・・それは、皆が・・・俺の傍にいてくれたからだよ」

（回想）

俺が大切な人を失つてしばらく、俺は寝ることを忘れた。

食事をすると言つことを見れた。

ただ仕事をすると言つことしかしなかった・・・まさに機械、人形のようだった筈だ。

そんな俺の事を心配して、いつも傍にいてくれたのは・・・桃香や、夜我達だった。

夜我「朝我！今日も張り切つて頑張るぞ！――！」

そつと俺の背中を押してくれた。

桃香「今日は私が料理を作りますね！今日の為に覚えたんですよ！楽しみにしてください！！」

そつと俺に美味しい料理を作ってくれた。

愛紗「たまには私と共に鍛錬などいかがですか？」

そつと俺の体を動かしてくれた。

鈴々「お兄ちゃん！今日は鈴々と一緒に遊ぶのだ！！」

翠「お、あたしも混ざつていいか！？」

そつ言つて俺を外に出させた。

紫苑「ご主人様、本日は私と共にお酒でもいかがですか？」

星「私も共にメンマと共に一杯」

そつ言つて俺に酒を飲ませて俺を強引に酔わせて眠らしてくれた。

朱里「ご主人様。この書類は私がやりますよ～！」

そつ言つて俺への負担を減らすために努力してくれた。

皆、俺なんかの為に、必死で頑張ってくれた。  
だから俺は・・・出ることができたんだ。

漆黒の闇の世界から・・・抜け出す事が出来たんだ。

（回想終了）

朝我「人は弱い。だから、誰か・・・支えてくれる人が必要なんだ。  
フェイトに、アルフがいたようにな」

フェイト「アル・・・フ」

少しずつ、フェイトの瞳から光が戻ってきた。

朝我「さつき、俺は家族の話をしたよな？俺さ、実は両親いない  
んだ」

フェイト「え・・・」

朝我「俺、『ストリートチルドレン』でさ、この『朝我零』って名  
前も、実は“ある人”からの貰い物なんだ」

フェイト「・・・」

フェイトは起き上がりつて、俺の話を聞いていた。

本当は、なのは達の援軍に行きたい。

けれど、その前に・・・変えたかった、一人の少女の運命を変える。

だから俺は話を続けた。

朝我「夜我也俺と同じストリートチルドレンで、俺と対立していた  
んだけど、まあそれから色々あって現在にいたるんだ」

フェイト「どうして・・・仲良くなつたの?」

朝我「簡単だ。たった一人、たった一人でも、俺達に声をかけてくれた人がいたんだ。俺たちに、手を差し出して、声をかけて・・・俺達の世界を変えてくれ人がいたんだ。フェイトにもいだろ?」

「フェイト・・・あ」

フェイトは、思い出す。

何度も何度も、手を差し出して・・・声をかけてくれた・・・桜光の少女のことを。

友達になりたいと声をかけてくれる人がいた。

朝我「あいつは今、お前の運命をぶっ飛ばしに行ってる。それは、エゴなのかもしれない。だって、フェイトには何も言わずにやつてるから。後は・・・フェイト。お前だけだよ」

そつ言つて俺は、フェイトに手を差し出す。

フェイト「ねえ、私の全ては・・・終わったの？」

フェイトは迷いの中、最後の質問をする。

そしてフェイトはしばしば迷う。

フェイト「・・・」

朝我「俺は、フェイト。お前の運命を変える。なのはも、コーノやアルフだって協力してくれる。だから・・・俺のこの手を取るか、取らぬいかだ」

その質問に朝我は即答する。

朝我「ああ。終わったよ

フェイト「・・・そつか

また暗い表情をするが、朝我は「だけど・・・」と言つてから、再び話しを続ける。

朝我「ここからが、この瞬間が、また新たな始まりだ

そう言つて俺はフェイトの頭に手を乗せていく。

朝我「それに、まだ9歳だぞ？まだ、スタートラインにもたつてないんだ。なのはも、フェイトも。今から、スタートラインに立つんだ。だから俺が言いたいのは、今までの人形扱いされてきた自分は、もう捨てろって事だ」

フロイト「死の問題」

フェイトの瞳から、光が戻った。

フュイト「ありがとう、朝我。私は良いいんだよね？」

朝我「当然だ。フロイトは、その翼で好きに羽ばたいといいんだ」

そう言つてフロイトは俺の手を握る。

朝我「ありがとうございますまた後で一杯聞く。今は

俺はフェイトに綺麗に治したバルデッシュを渡した。

「フロイト」これ……

朝我「さつきの会話中にずっと魔力流して修理を促してた。これで  
いけるだろ?」

バルデッシュ「ありがとうございます」

朝我「礼はいい。まあ……行くぞー。」

「フロイト」うん……

そつまつてフロイトはB-1を着て、俺と共にアースラを出た。

そう、運命を断ち切る為。

新しい自分を始めるため。

そして  
云えるべき想いを云えるため。

様々な終焉に向けて（前書き）

ベ・・・ものか』に勢いでの投稿してたよ（――・・・）

始方面から『少しは血腫しる』とか言われやつ（――・・・）

様々な終焉に向けて

夜我 Side

俺は愛紗達を連れて時空の庭園に行き、迫り来る敵を難ぎ払つてい  
く。

俺は姫鶴一文字を手に、大量の敵を切り裂く。

夜我

『銀

しごがね

！――――

純白に染まる斬撃が傀儡兵を10体ほど切り裂く。

なのは「ティバインショーター・・・ショート！――」

なのはは桜光の弾丸を放つて一體一體倒していく。

ユーノやアルフはバインドで敵の動きを防ぐ。

クロノは一人単独で奥に進んでいく・・・速く行かないとな。

夜我「！？なのは！――」

ユーノ「なのは！――」

なのは「え・・・」

油断した。

なのはの背後から一體の傀儡兵が迫っていた。

サンダーレイジ！！！

だがその傀儡兵は、突如やつてきた雷によつて破壊された。

夜我「！？

ユーノ「この光・・・」

アルフ「フェイト！？」

アルフの喜ぶ声が、上に表れる、金髪の髪の少女。

「フエイド」・・・

なのは「フエイドちゃんーー！」

フエイドはなのはのまど元に向かう。

なのは・フエイド」「！？

だが、壁を突き破つて肩にバレルを展開して砲撃を放とうとする傀儡兵が現れた。

更に背後から3体の傀儡兵。

朝我

凶

獄炎閃  
・  
烈斬極焰刃

なのはとフュイトに迫る3体の傀儡兵は強力な焰の一閃によつて擊破された。

そしてなのはとフュイトに肩と肩を合わせるように立つ、一人の少年。

なのは「朝我さん……」

「フュイト……ありがと」

朝我「どういたしまして。前の敵は一人に任せた」

なのは・フロイト」「うん」「

そう言って朝我は目にも止まらぬ速度で残りの傀儡を倒していく。

夜我「俺も、負けてられないなーー！」

愛紗「私もーーー！」

鈴々「鈴々も同じなのだーー！」

星「負けてはおれぬなー！」

紫苑「全力で援護しますーー！」

翠「行くぞーーー！」

そう言って俺たちも共に戦っていく。

なのは・フ・ハイト・セーのつ---!-----」

夜我「うえ・・・」

その瞬間、巨大な砲撃が放たれた。

朝我「お・・・おお・・・」

夜我「これはまた・・・」

俺と朝我は、なのはとフュイトとは全力全開でやり合わないようこ  
しょひと、心から誓うのだった。

それからは一手に分かれ、なのはとユーノ。

俺はフェイトやアルフ、愛紗達と共に向かつた。

向かうのは、プレシアの場所。

フェイトは、伝えたいことがあるからと言って、この道を選んだ。

朝我「！？」

だが、前に更に大量の傀儡兵が現れた。

夜我「朝我！フェイトを連れて先に行け！」

朝我「・・・良いのか？」

愛紗「安心を。私達も共に戦います」

朝我「・・・分かった。任せた」

そう言って俺はフェイトとアルフの3人で先に進んだ。

夜我「さて・・・行きますか」

愛紗「はい！！」

そして俺達はフレシアのもとに着く。

そこには既に次元震を抑えているリンクティ。

俺達はフレシア達の前に出る。

ゴーノ『じゅらゴーノ・スクライア、駆動炉を無事封印！なのはも今そつちに向かつてます！』

流石なのは達だ。任せておいて正解だな。

リンクティ『忘れられし都アルハザード、そしてそこに眠る秘術は、存在するかどうかすら曖昧な、ただの伝説です！』

フレシア「違うわ。アルハザードへの道は次元の狭間にある。時間と空間が碎かれた時、その狭間に滑落していく輝き。道は、確かにそこにある」

アルハザードか・・・懐かしいな。

俺はなのは達を失った時、プレシアと同じくアルハザードについて調べて、実際に行こうかと努力しまくった。

だが結局見つからず、悲しみに暮れた。

後悔しかしなかった。

プレシア。お前・・・俺と同じ運命を辿るつもりなのか!?

リンディ《随分と分の悪い賭けね。あなたはそこに行つて、一体何をするの?失った時間と、犯した過ちを取り戻すの?》

フレシア「そつよ。私は取り戻す。私とアリシアの

未来を」

過去と

朝我「つー？」

俺は、フレシアの言葉を否定出来なかつた。

俺も・・・今を変えて・・・未来を変えるためにここにいる。

フレシア「取り戻すの。『こんなはずじやなかつた、世界の全てをー！』

クロノ「ふやけるなーーー！」

朝我「ーー？」

その時、クロノが俺たちの前に現れる。

クロノ「世界はこつだつて、『こんなはずじやないこと』ばっかり  
だよーーすつと昔からこつだつて、誰だつて嘘うそうなんだーーー！」

朝我「クロノ・・・」

クロノ「こんなはずじやない現実から逃げるか、それとも立ち向か

うかは個人の自由だ。だけば自分の勝手な悲しみに、無関係の人間まで巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない！！！」

朝我「…」

その言葉は、フレシアに伝えていた筈なのに、何故か俺の胸にグサリと刺さる様に響いた。

それは、未来に何も伝えずに置いて来た仲間への想い。

この時代に夜我達を迎えて、巻き込んでしまった事。

俺は、俺自身の悲しみに皆を巻き込んでしまっているんじゃないかな。

そう思つてしまつてならない。

朝我「おー、フレシア。ちょっと良いか?」

フレシア「・・・」

フレシアは俺の声に反応してこちらを向き、真っ先にフロイトを睨んだ。

だけど、その事は後にしつ・・・までは、フロイトの想いを聞きた  
い、そして、伝えてあげたい。

フロイト「ひ・・・」

フロイトは先ほどのフレシアの発言と今の態度に少し迷っている。

だから俺は、フロイトの右手をそつと握りてあげた。

フロイト「あ――――――」

朝我「俺がいるから、安心しろ」

フロイト「・・・うそ」

やつらのフロイトは俺より一步前で、フレシアに話す。

フェイト「あなたに言いたいことがあって来ました」

そう、俺はこの田の為に、必死に頑張つてきた。

運命を・・そして未来を変える、その一つ。

フェイト「私は、アリシア・テスタロッサじゃありません。あなたが作つた、ただの人形なのかもしません」

それが、最初の想い。

フェイト「だけど私は フェイト・テスタロッサは、あなたに生み出して貰つた。あなたに育てて貰つた。あなたの 娘です」

フレシア「ふ・・・ふふ、はは・・・あーっはははっ！――！」

だがフレシアは高笑いして言つ。

フレシア「だから何？今更あなたを娘と思えといつの？」

「こじで俺は、『それでも、お前はフェイトの母だ』と言いたかった。」

だけど、これはフェイトとフレシアの・・・家族の問題だから・・・  
俺が交わってはいけない。

参加しては・・・いけない。

フェイト「あなたが それを望むなら」

その言葉にフェイトはそう答えて続ける。

フェイト「それを望むなら私は、世界中の誰からも、どんな出来事  
からも あなたを守る」

それはきっと、例え嫌われようとも・・・分かっていてでも伝えた  
い気持ちの一つ。

一度は嫌われた。拒絶された。否定された。

けれど、生んでくれた母親への愛は、例え作られた記憶だとしても・  
・・フェイトの胸にあるから。

だからこそ、この場で・・・今、その想いを・・・伝えているんだ。

フェイト「私が、あなたの娘だからじゃない。あなたが  
の母なんだから」

私

そしてフェイトは、フェイト・テスターとしての答えと想いを、  
プレシアに伝えた。

プレシア「・・・・・」

しばらくの沈黙の後、プレシアは答える。

プレシア「・・・くだらないわ」

だが、声は拒絕だった。

朝我「ほんとに下らないか?」

プレシア「・・・何が言いたいの・・・」

朝我「プレシア。ほんとはお前、気づいてるんじゃないか? フェイ  
トは・・・例え血が繋がってなくても、お前の娘だって事。お前の・  
・唯一無二の、大切な・・・アリシアの妹だつてこと」

プレシア「！？」

その瞬間、初めてプレシアの表情が大きく変化した。

俺は追い打ちをかけるように言葉を続ける。

朝我「アリシアは、お前にお願いしたんじゃないのか？『妹が欲しい』って」

プレシア「！？なんで・・・それを・・・！？」

ほんと「・・・そうだったのか。

朝我「・・・アリシアが、俺に教えてくれたよ

「ここに来る少し前に遡る。

俺は途中、10年後のフェイトが俺に話をかけてきた。

朝我「え・・・約束?」

フェイト「うん。アリシアの記憶が私の中にあるのは知ってると思うけど、実はアリシアの記憶の中に『大切な約束』があつたんだ」

朝我「その約束って?」

フェイト「『妹が欲しい』だって」

朝我「妹・・・・?それってー?」

フェイト「うん。私の事」

そして今。

朝我「大切な約束、今叶つたじゃねえか。もう・・・こんな事をする必要はない。お前は、妹が残した最後の約束・・・譲つて、妹を大切にしてやれよ」

プレシア「・・・」

徐々に女の涙の表情に変わっていく、プレシア。

次元の狭間に落ちていく涙。

クロノ「マズい！！！」

クロノが叫んだ瞬間、庭園の揺れが加速する。

次元を揺らす震動が、周囲に波紋を呼び起こす。

エイミィ『艦長、ダメです！！庭園が崩れます、戻ってください！  
！』この規模の崩壊なら、次元断層も起こりませんから！！！クロノ  
君達も脱出して！！！崩壊まで、もう時間がないの！！！』

エイミィの声に周囲の緊張感が高まる。床や壁、天井が崩れ始め、  
虚数空間に飲み込まれていく。

クロノ「了解した。皆！！」

クロノの言葉に、俺達は反応するが、フェイトとプレシアは違った。

二人は動かず、プレシアは話し出す。

プレシア「それでも・・・私は向かう、アルハザードへ！そして全  
てを取り戻す！！！！過去も、未来も たつた一つの幸福

も……

母さんがそう叫び、虚数空間・・・次元の狭間に飛び込んで行った。

フェイ特「母さん……」

フェイ特は必死に手を伸ばす。

だが、手は届かず、アルフが落ちそうになつたフェイ特をキャッチする。

でも、フェイ特の手は・・・伸ばしたままで、それでも必死にもがくよつと手を伸ばした。

だけど・・・届かない。

俺は  
か！？

俺と同じよ、  
届かない手を・・・見てるだけなの

あの時

なのはを救えなかつた。

手が届かなかつた。

その悲しみを、後悔を

のか！？

ファイトこれまで経験せざるつもりな

朝我「・・・つぎにんな

俺は、  
走り出  
す。

クロノ「朝我！」

そして俺たちのもとにたどり着いたなのは、ユーノ、夜我や愛紗達  
が、俺に声をかける。

なのは「朝我さん！……！」

夜我「朝我あああああ！……！」

いざれつなんだよお

朝我「わい　　聞にかわなにのせ  
おのれおのれおのれおのれおのれ」

セツニヒ、俺はフレシアのもとでダイブして、フレシアの手を握  
む。

フレシア「なぜ・・・」

朝我「もう・・・『向かないで悲しむの、嫌だからさ』

そう言って俺は、プレシアとアリシアの一人を連れて  
の狭間に堕ちていった。

次元

なのは「あ・・・・」

「アーティザン」

夜我「…………つぐそ…………」

愛紗「ご主人……様……」

「 鈴々 」 お兄さん ちやん

なのは・フェイト「い・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「……」  
「……」

この日、俺・・・朝我零は、プレシア・テスタロッサ。アリシア・  
テスターと共に、次元の狭間へ墮ちていった。

様々な終焉に向けて（後書き）

相良「え・・・朝我が・・・死んだ・・・」

ルチア「嘘・・・」

IKA「次回も・・・お楽しみに」

次回、魔法少女リリカルなのは～全てを変えられることが出来るなら  
～最終回

『別れた空に願う言葉』

なのは・フュイト」「それでも、あの空に・・・貴方がいると信じ  
て」「

## 最終回 別れた空に舞ひ散る葉（前書き）

今回で第一章最終回です……せんとあいがとハジケコモリ……

しかも一度35話……（ビックリ）が一度（？）

その他の報告はあとがきにかかせていただきます。

それでは第一章最終回、どうぞ。

## 最終回 別れた空に願つ葉

・・・数日後。

事件は集結し、私はユーノ君と共に、平和な日常に戻る。

ただ一つ違うのは、朝我さんが居なくなつたこと。

結局あの事件の時、朝我さんは次元の狭間に落ちて・・・

それでも私は朝我さんが生きてるって信じてる。

だって、朝我さんが簡単に死ぬわけ・・・ないんだから。

なのは「え・・・」

そして朝、私に電話が来る。

電話の主は管理局。

良い情報で、今からフェイアちゃんにお話出来る時間があるから、  
すぐに来てくれとのこと。

私はユーノ君を連れて、急いで向かった。

なのは「なにについていいのか急に分からなくなっちゃったね」

フヨイト「うん……あのね

なのは「うん?」

フヨイト「この前の返事友達にならなかったこと……」

なのは「うん・・・・・・・」

フロイト「君が『うひ』友達になりたい。でもどうすればここのかわからぬよ」

そうだよね・・・私も、最初は分からない。

なのは「簡単だよ。名前を呼んで、君とかあなたじゃなくて名前をよんで！わたしが高町なのはだよ」

フロイト「なの・・・・は」

恥ずかしそうに、それでも一文字一文字を大切に・・・私の名前を読んでくれた。

ちよつと照れるな・・・！」うやつて名前を呼んでもうつて。

なのは「うん」

フロイト「なのは・・・」

なのは「うん・」

フロイト「なのは・・・」

なのは「うん・・・・・」

そう言って私達は抱きしめ合ひ。

「フヒイト」「あっがとう。なのは」

なのは「うん……！」

嬉しくて、嬉しくて、嬉しそう。

気が付けば私達は、涙を流していた。

「ふう、泣かないで、なのよ。なのが泣いてるし、私も悲しいよ」

なのは「つ・・・フ・・・イ・ト・ち・や・ん・・・」

私はフロイドを抱きしめる。

「うひー、なほほ温かいね」

クロノ「二人とも、そろそろ時間だ」

そう言つてクロノ君が声をかけてくる。

なのは「うん。・・・それじゃ、最後に・・・これ」

セツニヒテ私はフュイトちやん、「リボンを渡す。

フュイト「それじゃ…私も」

セツニヒテフュイチヤンもリボンを私に渡した。

フュイト「あらがとう、なのは」

なのは「うん、フュイチヤン」

セツニヒテ私とフュイチヤンは、最後の挨拶をする。

フュイト「わかつまた」

なのは「わざ、わつとまた」

アルフ「ほら、預かり物」

セツニヒテアルフさんは私の肩にコーコ君を置いてくれた。

なのは「あっがとう。アルフさんも元気でね」

アルフ「ああ、色々ありがとうございました、なのは。ユーノ」

ニッコリと微笑みながら、アルフさんが離れていった。

クロノ「それじゃ、僕も」

なのは「クロノ君もまたね」

クロノ「ああ」

軽く挨拶を交わすと、クロノ君も離れた。

そしてフェイトちゃんたちは転送されていく。

なのは「つー」

フェイトちゃんは、小さく手を振ってくれた。

私は最初は驚いたけど、すぐに手を振り返した。

なのは「フエイトちゃん！……またね！……！」

フエイト「なのはも……また……！」

そう言って、フロイドちゃん達は消えてこりました。

なのは「・・・」

ユーノ「なのは・・・」

なのは「、帰る。ユーノ君」

ユーノ「うん」

やつれて私達は、田舎に帰つました。

ただ、ただやつぱり忘れられないのは・・・私の人生の、最初の友達。

なのは「・・・また、会えるかな?」

あの人と私が、一緒に飛んでいた・・・この広い空に、そう言った。

夜我  
Side

夜我「・・・」

俺は一度、桃香達を連れて10年後の未来に戻った。

それは、あいつが頑張った事によつて・・・何か変化が起こつているのでは無いか？

と言う期待と、あいつの存在は今、どうなつてゐるのかが気になつたからだ。

そして戻る、機動六課。

夜我「ただいま戻りました」

スバル「あ・・・夜我・・・さん」

懐かしい・・・青い髪の女の子。

オレンジ色の髪の子や、ピンク色の少女に、赤い髪の男の子。

夜我「ただいま。スバル、ティアナ、キャロ、エリオ」

俺は4人の後輩に挨拶を終えると、早速本題に入る。

夜我「隊長達は復帰したか？」

ティアナ「シグナム副隊長やシャマル先生は既に復帰してます。た  
だ

」

ここで俺は、衝撃的な事を聞く。

ティアナ「フェイト隊長がスターズの隊長やこの六課の部隊長を代  
理でやってるんで、疲れているみたいなんです

夜我「え・・・」

今・・・フェイトって言つたか・・・

夜我「フェイトは今・・・ビニルいる?」

ティアナ「フェイト隊長でしたら、部隊長室で

夜我「分かつた。ありがとう。」

そう言つて俺は全速力で走つて部隊長室に向かつた。

そして俺は部隊長室に着くと、ノックもせずに入る。

夜我「失礼する。」

フェイト「あ・・・夜我」

夜我「な・・・!?

そこには、正真正銘、10年後・・・つまり死んだはずのフェイト  
が、生きていたのだ。

フェイト「おかえりなさい。出張任務ご苦労さま」

夜我「あ、ああ」

俺は桃香達を連れて、出張任務と云ひながら10年前に飛んでいた。

フェイト「じめん。聞きたいこととかあつたりするんだけど、私も  
忙しくて・・・」

確かに、部隊長を務めるだけあつて忙しそうだ。

つて事はつまり・・・

フヒイト・テスター・ハラオウンの未来が変わった。

誰にも挨拶する必要なんて・・・ないからな。

そう言つて俺は部隊長室を出て、六課を出る。

夜我「・・・悪いフェイト。また出張任務に行くことになる

フェイト「・・・そう、分かった。気を付けてね」

夜我「フェイトもな。偶には周りの奴ら、頼れよな」

俺は仲間を選別し、必要なメンバーを揃えて、再び発動する。

俺が変えてや

夜我「あいつが変えられなかつた残りの今は  
るよ

そう言って俺は全ての力を込めて、  
発動する。

夜我

『始まりの世界』  
ダ・カーポ

□

俺が願うのは、別れてしまったあいつが、同じ空にいることを祈つて。

そして物語は

A、  
Sへ。

## 最終回 別れた空に願つ言の葉（後書き）

これで第一章は終わり、A、Sに入ります。

原作の内容に、オリジナルのストーリーも入り交じり、更に新たなキャラの登場も・・・

A、Sも楽しみにまつてください――――――

## 新たなプロローグ（前書き）

さて、今回よりA、S・・・闇の書編のスタートです！！

まあ色々な原作が混ざりってる部分が出るかもですが、駄作です  
そのへんは「理解頂きたい（-\_-）

## 新たなプロローグ

運命を変えるために時を超えて、海鳴市へやつてきた少年は、運命を  
変えるために血の命を犠牲にして様々な無茶をした。

その結果、次元の狭間へと墮ちていった。

誰もが悲しみに暮れるが、事件はまたやつてくる。

それは、彼が変えたかった、もう一つの過去。

もし変えることが出来るのなら、未来は今まで以上に大きく変化する。

そう、この一年と<sup>ターニングポイント</sup>時間が、一つの分岐点なのだ。

彼が行方不明になつたその年の冬、新たな物語が始まる。

結果を変えるために飛んだ彼らは、過去をどのように・・変えるのか？

そして彼は運命を、未来を変えるために様々な奇跡を起こす。

新たな仲間と、新たな刀。

そして戦うのは、か弱き主の運命を変える為に戦う騎士達。

運命を変える者同士の戦いの結末とは・・・

## 新たなプロローグ（後書き）

てな感じで始まります、新たな物語。

次回からは朝我Sideと夜我Sideの両方を中心に初めて行きます！

家族として、親として

「これは、どこだ？」

視界が真っ暗だ

体が言つことを見かない

俺は、死んだのか

いや、死ぬわけにはいかない、まだ・・まだ、死ねない

まだ・・変えなきやいけない運命があるんだ!!

俺は 護るんだ！！！救うんだ！！！！そして  
変えるんだ！！！！

『田代覚めなさい』

誰だ・・・

『私達は、もう大丈夫。だから、起きなさい』

大人の・・・女性の声が聞こえる。

『貴方の、大切な人が・・・待ってるんでしょ?』

大切な人・・・!?

朝我「つー!?」

俺は、目覚ました。

? ? ? ? 「目を覚ましたみたいね」

朝我「え・・・!?

俺は目覚めた直後、俺に声をかけた人に驚きを隠せなかつた。

朝我「フレシア・・・テスタロッサ」

そこにいたのは、フェイトの運命の中心にいた人物。

そして、フェイトの母親である、フレシア・テスタロッサだった。

だが俺の覚えているフレシアと違つて、優しい表情で・・・母つて印象を持つフレシアだった。

フレシア「よしやく目覚めたよ!?

朝我「あ・・・えと・・・プレシア・・・なのか？」

プレシア「ええ。“あの”プレシアよ」

自覚はあるようで、フロイトを傷つけていた自分だと呟いた。

朝我「こひは・・・」

辺りを見回すと、そこは病室だった。

個室となつていて、俺は白いベッドで眠ついたらしく……  
・・つて・・・

朝我「あ・・・れ・・・」

何故か毛布から出でている上半身がスースーするなと思つたら・・・

朝我「な、何で上半身裸なわけ！？」

しかも毛布で隠れていた下半身も毛布を広げずにしてそのまま確認すると下着一枚も纏っていない状態だった。

フレシア「あ、『めんなさい』。服、今持つてくるわね

やつぱりフレシアは部屋を出た。

朝我「・・・」

そして取り残される俺は、窓を開けて毛布を下半身を隠すよつて巻いて見る。

朝我「……これは……」

俺は、見る目を疑った。

そこに広がるのは、ミッドよりも文化が進んだのを思わせるような建築物や、魔法陣を展開して走行する車やバイク。

そしてスバルの使うウイングロードを思わせる道が無数に広がり、そこを人々や車などが行き来していた。

朝我「まさか……ここは……!？」

俺は、一つの結果を思いついた。

朝我「ここは  
アルハザード！？」

フレシアが、ただ一人を救うためにたどり着きたかった世界。  
だが・・・ジュエルシードが少なくて・・・いけなかつたんじや・・・  
・

すると、病室のドアが開く音が聞こえた。

フレシアか・・・

? ? ? ? 「お母様！ おはよ・・・って・・・・・・え？」

朝我「あ・・・・・・」

そこに現れたのはフレシアではなく、金髪の長い髪のフュイトそ  
っくりの少女。

そして彼女は数秒間、フリーズした後。

朝我「お、おいー！」

その子は大きな悲鳴をあげて顔を真っ赤にし、恐ろしい速度で走り去つていった。

朝我「今の娘・・・まさか・・・」

フェイトと瓜二つ・・・

朝我  
まさか・・・アリ、シア・・・

このアルハザードで・・・取り戻せたのか？

朝我「・・・つて」

今の問題はそこじゃない。

もし彼女がアリシアとすれば、俺は今・・・彼女に相当失礼な事をしたことになる。

てか、上半身見ただけで顔真っ赤とか・・・ウブだね。

ああ・・・後で謝つて置かないと。

プレシア「服持つてきたわよ?」

朝我「あ、ありがとうございます」

それから俺は服を着て、フレシアと話しあう。

朝我「わっしゃ、アリシアと会いましたよ」

フレシア「ああ・・・だからわっしゃ・・・」

フレシアもアリシアの事は知っているらしい、俺を見て逃げたのだと納得したらしい。

フレシア「あの子、ピュアに育ってくれたから、そういう免疫無いのよ」

ああ・・・今の世の中では必要不可欠な免疫なのになぁ・・・

朝我「といつか・・・アリシア、回復したんですね」

フレシア「ええ。あなたのおかげよ」

俺?

朝我「俺が何かしましたか?」

フレシア「これよ」

そう言つてフレシアは自らが持つ杖を出し、杖についている紫色の宝石からジュエルシードが現れた。

朝我「ジュエルシード・・・?」

数が足りなかつたんじゃなかつたのか!?

プレシア「あなたも、ジュエルシードを持っていたわよね？」

朝我「……あ

そうか、俺が持っていたジュエルシードが力を貸してくれたのか。

プレシア「あなたの持つジュエルシードは他のジュエルシードと違  
い、あなたの魔力の影響を受けているから、足りない分の全てを補  
つていたの」

朝我「！？」

つまり……俺のしたことは、無駄では無かつたんだ。

プレシア「本当に……ありがと」

俺の手を握って、感謝の気持ちを込めてそう言つた。

朝我「いえ。俺はただ……変えたかっただけだから……」

プレシア「……何が、あったの？」

プレシアは、俺の事を聞いてきた。

朝我「……プレシアには、話しても良いかな

そう言つて俺は、今までの経緯を語った。

10年後から来たといつた。

フェイト達が死んだ事。

だからこの世界に来て、運命を変えるために来たといつた。

フレシア「そんな・・・事があったの」

朝我「はい。だから俺は、その運命を・・・未来を変えるために過去に来たんです」

フレシア「・・・」

何故俺は、フレシアに話したのだろう?

ふとそう思ったが、すぐに解決した。

それは、フレシアも俺と同じだったからだ。

フレシアだって、取り戻したい時間があった。

俺と同じように・・・大切な人を失ったから、大切な人を救う為に精一杯だったんだ。

その結果・・・こんな犯罪まで行なってしまった。

フレシア「『』めんなさい・・・私、母親失格ね」

フレシアは俯いて、涙を流しながらそう言った。

朝我「・・・」

その姿に、俺は正直な想いを伝える。

朝我「確かに、今の貴方は母親失格だ」

プレシア「・・・」

俺は続けて、こういった。

朝我「だけど、貴方を母親だつて想ってくれている人がいる。貴方を、大切な人だつて・・・大切な家族だつて思ってくれている人がいる。貴方が自分自身を母親の権利がないと言つても、俺たちが母親と認めなくとも、彼女達は・・・フェイトやアリシアは、貴方を母親だつて信じてる」

プレシア「・・・」

朝我「だから、俺はフェイト達が信じる貴方を信じる。それじゃ足りないか？」

プレシア「・・・いいえ。十分よ」

プレシアは目尻に溜まった涙を指で拭いていた。

だけど、俺はプレシアの代わりに涙を拭いた。

プレシア「え／＼／＼／＼／＼／＼」

朝我「今だけは、フェイトもアリシアも見てないから・・・素直で良いと思う」

プレシア「・・・ああ・・・」

それからじいしばらぐの間、プレシアは俺に抱きつき、吐き出したいだけ悲しみの感情を解き放った。

俺はその想いを抱きとめ、この人が泣き止みますと頭を撫でてあげた。

これしか・・・部外者おれいしゃできないから。

朝我「どう、どうしました？」

それから泣き止む、フレシアは泣き止んだのだが・・・

フレシアは俺が使っていた毛布で顔を隠していた。

フレシア「は、恥ずかしい所を見られたから少し／＼＼＼＼＼＼＼＼

朝我「あ・・・ああ、そつか」

まあ男に抱きついてだいの大人が号泣だもんな・・・

朝我「あ、安心しろ。記憶の奥底に閉じ込めておくから」

フレシア「覚えているつもりなのねえ・・・（ ； ； ； ）」「

ど、どうしりと？

朝我「ま、いざとなつた時の脅しにまちよひどいいかもなあ～」

「やりと俺はそう言ひとフレシアは可愛らしく頬を膨らませて俺に  
言ひ。

フレシア「あ、貴方・・・やつぱりいい人じやない・・・」

朝我「あなたに言われたくない」

フレシア「むう・・・」

朝我「ふむ・・・」

俺とフレシアは何となく睨み合ひ。

？？？？「あ、あの・・・」

朝我「あ・・・」

フレシア「アリシア？」

気づくとドアを開けてアリシアが部屋に入ってきた。

アリシアはフレシアの隣について話をする。

アリシア「や、さりげないめんなさいー！」

ペコッと45°で謝った。

朝我「いや、俺が裸だったのが悪かったんだ。別に謝る必要ない」

アリシア「はい・・・」

それでも反省しているみたいで、結構落ち込んでいるふうにも見える。

アリシア「私の命の恩人なのに・・・失礼なことしちゃったよ・・・

・

朝我「え・・・恩人?」

アリシア「うん、お母様がね、お兄さんが助けてくれたんだって」

朝我「・・・そうか」

なんか・・・嬉しいな。

俺は、いつやって感謝されるために過去に飛んだわけじゃない。

けれど、今は・・・この世に来て良かったと思つ。

朝我「それで、俺は戻れるのか？」

フレシア「ええ。だけどこのアルハザードと地球の時間軸は違うわ。  
もしかしたら、季節は変わりすぎているかも」

朝我「それでも、俺はいかないといけないんだ！」

そう、俺はまだ・・・変えなきやいけない過去がある。

だから、迷つている時間なんてない。

フレシア「・・・分かったわ。私も一緒に」

朝我「ホントか！？」

アリシア「私も行く」

朝我「・・・ありがと」

そう言って俺達は、地球に向かつて転移を始めた。

**家族として、親として（後書き）**

さてさて始まりましたA、S

いきなり解決した事も含めて、次回より本格的に原作と同じ様にスタートです！！

皆さん、応援宜しくです！！

新たな始まりは冬の夜に（前書き）

さてさて今回より本編が入っていきます！

## 新たな始まりは冬の夜に

夜我 Side

夜我「到着」

俺達は再び地球、海鳴市にある家にたどり着いた。

夜我「・・・」

家に戻つても、やはりあいつは戻つてきていない。

夜我「朝我・・・」

届かなかつた手を届かせるために、自分を犠牲にした。

その姿は、無謀なのに・・・美しく見えてしまつ。

それは、あいつの苦しかつた日々を知つてゐるから。

大切な人を何人も失い、悲しみに暮れていたあの時を・・・

夜我「・・・いや、悩んでも仕方ないか

俺は台所の冷蔵庫の中身を確認した。

夜我「・・・」

中身は無い。

夜我「買い物か・・・朱里、紫苑、流琉、明命。買い物行くぞ。」

俺はその4人を呼ぶと、4人は猫とじやれながら現れた。

夜我一  
明命。お前また猫拾つてきたのか?」

明命一だつて猫様ですよ!?

いせ、わからん。

明命、夜我様にはわかりませんか！？この猫様の可愛さが！－！－！

そう言つて猫を俺の目の前に向けてた。

「夜我、無茶言うな。俺は猫に好かれないと」

そう言つて猫に人差し指を出すと猫が俺の人差し指をがぶりと噛み付いた。

「我夜」

朝我だとなつくな・・・畜生。

スーパーのカレンダーを見るとクリスマスフェアがどうのこうのと

年を越していない所を見ると、半年くらいの時差があったのか・・・

こここの着いた時には季節は冬になっていた。

夜我「はあ・・・寒」

俺は4人に買い物を任せ、スーパーの外に出る。

夜我「はあ・・・酷い日についた・・・」

書いてあつた。

つまり今は1~2月。

だが家にあいつが戻っていた跡がないということは……

夜我「つたく、俺たちに迷惑かけやがつて……」

俺だけじゃなくて、桃香達だつて悲しかつた。

だけど・・・俺はあいつが生きてると信じてる。

それまでの間は、俺達が彼女達の未来を変えないとな。

夜我「・・・つ！？」

刹那、世界が変化した。

夜我「結界か！？」

しかも懐かしい魔力を感じる・・・

朱里「夜我さん！」

朱里達が慌てて俺のもとに来た。

紫苑「これって・・・」

夜我「結界だ。どうやら閉じ込められたみたいだ」

海鳴市での突然の結界・・・何かが動き出したと考えるのが妥当か。

夜我「明命、今すぐ家に戻つて皆にそこを動くなと伝えてくれ」

明命「はい！」

そう言つと明命は民家の屋根の上に飛び乗つてまるで忍者の様に走つていった。

夜我「俺達は迎撃だ。こここの近くで多数の魔力を感じるからな」

朱里・紫苑・流琉「「「はい！」」」

俺は3人を連れて冬の夜道を走り出す。

なのは Side

なのは「はあ、はあ、はあ・・・」

私は今、結界の中に閉じ込められ、突然襲いかかってきた赤い服の  
女の子に倒されて、ユーノ君の治癒魔法で回復しています。

今日、久しぶりにフロイトちゃんに会えて、本当に嬉しいけど・・・  
戦いで再会なのは残念だな。

ユーノ「なのは、大丈夫?」

なのは「うん。それよりも、フロイトちゃんが・・・」

今、フロイトちゃんとアルフさんが戦ってくれてるけど、相手の騎士さんがすげく強くて・・・

ユーノ「このままじゃ・・・」

ユーノ君の不安そうな声。

なのは「フロイトちゃん・・・アルフさん・・・」

私は

怖かった。

全身の体温が抜けて行くほど・・・寒くて、怖かった。

また

失つてしまつのか?

あの時、届かなかつた手  
・  
・

もう・・・一度と失いたくない！――

なのは「レイジングハート・・・辛いけど、行ける？」

やつぱり、ボロボロになつたレイジングハートは答える。

レイジングハート「マスター程辛くは」やれいません。行けます！」

なのは「・・・うん！――！」

そう言つて私はレイジングハートの先を空に向け、空気中の魔力を集める。

ユーノ「なのは！――無茶だ！――その状態で放つたら、レイジングハートが――！」

レイジングハート「問題ありません」

なのは「大丈夫。それに、今の私には・・・これしかできないから」

これしかできない。

だから、これをやる。

そうしないと、一生後悔するから。

なのは「スター・ライト……！」

そして私は砲撃を放とうとした。

なのは「ブレイク

つー？」

なのは「うっ・・・ああ・・・」

だけど、私の動きは止まつた。

突然、私の胸から人の手と・・・光る何かが現れて・・・

なのは「い・・・や・・・・・・」

何これ・・・いや・・・いやだ・・・・・・・・・

全身の血がサーッと抜けていく感覚。

血の流れを直に感じる・・・・

怖い・・・怖いよお・・・・

？？

『銀  
しろがね

』

なのは「うつ・・・・」

薄れる意識の中、最後に見たのは

夜我「聞に合ひてよかつた。少し休んでる」

なのは「・・・ん」

そして私は意識を捨てた。

俺はなのはをゆつゝうとその場に寝かせ、純白の刀を手て、前に出る。

夜我「・・・」

夜我 S.i.d.e

夜我「さて

参る——！——！——！——！

そして俺は純白の光を纏い、冬の夜空を舞う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9760x/>

魔法少女リリカルなのはA's ~全てを変えることが出来るなら~  
2011年12月20日20時49分発行